

アリョーシャは跳び上るなり、イワン・フォードロキッチの後を追つた。彼はまだ五十歩も離れてはゐなかつた。

「何か用かい？」と、アリョーシャが自分を追つかけて來たのを見て、彼は急にその方へ振り向いた。「僕の氣が狂つてるから、後を追つかけるとカーチャが言ひつけたんだろ、ちゃんと知つてるぞ、」と彼はいら立たしげにつけ足した。

「無論あの女の思ひちがひですが、兄さんが病氣だつてことは、あの女の言ふとほりですよ、」とアリョーシャが言つた。「僕は今あの人のところで兄さんの顔を見ましたが、兄さんの顔はひどく悪かつたんですよ、イワン、とても！」

イワンは立ちどまりもしないで歩いてゐた。アリョーシャはその後について行つた。

「だが、アレクセイ・フォードロキッチ、君はどんな風にして人間が氣違ひになるのか、知つてゐるかい？」とイワンは出しぬけに、静かな、少しもいらいらしてゐない聲でかう訊ねた。その言葉の中には極めて天真爛漫な好奇心が籠つてゐた。

「いいえ、知りませんね、氣違ひにも、いろいろあるでせうからね。」

「だが、自分で自分の氣が違つてゆくことが分かるだらうかね？」

「そんな場合に、自分をはつきりと觀察することなんか、出來ないだらうと思ひますね。」と、アリョーシャはびつくりして答へた。イワンはほんのちよつとの間だまつてゐた。

「若しも、お前が僕と何か話したいんなら、どうか話題を變へてくれ、」と彼は不意に言つた。

「ああ、さうさう、忘れないうちに、この手紙を渡しておきますよ、」と、おづおづ言つてアリョーシャはポケットからリーズからの手紙を取り出して、イワンの方へ差し出した。二人はちやうど街燈のあるところへ來てゐたので、イワンは筆蹟で直ぐそれと悟つた。

「ああ、これはあの小悪魔からよこしたんだな！」と、彼は毒々しく笑つた。そして開封もしないで、いきなりそれを封筒のままずたずたに引き裂くと、ぱつと風に向けて投げ棄てた。紙きれは四方へ飛び散つた。

「まだたしか十六にはなるまいに、もう自分の方から持ちかけやがるんだよ！」と、彼はまた往來を歩きながら、侮蔑するやうに言つた。

「持ちかけるんですつて？」とアリョーシャが叫んだ。

「分かり切つたことぢやないか、淫奔な女がするやうに持ちかけるのさ。」

「何をいふんです、イワン、何をいふんです？」と、アリョーシャは悲しげに、熱くなつて遮つた。「あれはまだ子供ですよ、あんな子供を見さんは侮辱するのですか！ あの子は病氣なんです、たいへん重いですよ、あの子も氣が狂ふかも知れませんよ、……僕は仕方なしにこの手紙を見さんにことづかつて來たんです、……僕はそれどころか、兄さんから何か聴きたいと思つてゐたのです、……あの子を救ふために……」

「お前に聴かせることなんか何もないよ。若しもあれが子供だとしても、僕はあれの乳母ぢやないからね、アレクセイ、もう黙つてくれ、そんな話はよしてくれ、僕はそんなこと考へてもゐないんだ。」

また暫らく沈黙がつづいた。

「あの女はあす法廷でどんな態度をとつたらいいか、それを教へて貰はうと思つて、今夜はよつびて聖母を祈り明かすことだらうぜ。」と、彼はまた出しぬけに鋭く、毒々しく言つた。

「兄さんは、……兄さんはカテリーナ・イワーノヴナの何を言つてるんですか？」

「さうさ。あの女はミーチャを救ひ出すことも出来れば、破滅させることも出来るんだ！ だからあの女は祈りをして、自分の心を照らして貰はうと思ふのだ。あの女には、自分でもどうしたらいいのかわからないのだ。まだ決心をすることが出来なかつたんだよ。やつぱり僕を乳母扱ひにして、子守唄のうたをうたはせようとしてゐるのさ。」

「兄さん、カテリーナ・イワーノヴナはあなたを愛してゐるんですよ、」と、アリオシーシャは憂はしげな情をこめて言つた。

「さうかも知れん、だが、僕はあの女が餘りすぎぢやないんだからな。」

「あの女は苦しんでゐますよ、なぜ兄さんは……あの女にいろいろのことを言つて、希望を持たせたんです？」と、おそろおそろアリオシーシャは非難するやうにつづけた、「僕は兄さんが時々思はせ振りをなすつたことを知つてゐますよ。こんなことを言つては失禮だけれど、」と、彼はつけ足した。

「僕はこの際、必要な態度をとることが出来ないんだ、きつぱり手を切つて、あからさまなことを言ひ切ることが出来ないんだ！」とイワンは苛立たしげに言つた、「人殺しに宣告が下るまで待たなきやならないのだ。若しもし僕があの女と手を切れば、あの女は僕に對する復讐として、あす法廷であの

悪黨を破滅させるにきまつてゐる。だつて、あの女はミーチャを憎んでゐるし、憎んでゐることを自分で知つてもゐるんだから、今は何もかも嘘さ、嘘の上にも嘘なんだ！ 僕が手を切らずにゐる間は、あの女もまだ僕に希望をつないで、あの人非人を破滅させはしないんだ、僕がどんなにミーチャを苦境から救ひ出さうとしてゐるか、ちゃんと知つてゐるからな、兎に角、あの呪はしい宣告が下るまでだ！」

『人殺し』とか『人非人』といふ言葉が、アリオシーシャの胸に痛々しく響いた。

「それでも、一體どうしてあの女がミーチャを破滅させることが出来るのです？」と、彼はイワンの言葉に考へ込みながら訊ねた、「ミーチャをあからさまに破滅させるやうな、どんな供述をすることが出来るんです？」

「それをまだお前は知らないんだよ。あの女はちゃんと證據を一つ握つてるのさ、ミーチャの書いたものでね、ミーチャがフォードル・パーウロキッチを殺害したといふ事實を、數學的に證明してゐるんだ。」

「そんな筈があるのですか！」とアリオシーシャが叫んだ。

「どうしてそんな筈がないんだい？ 僕は自分でちゃんと讀んだんだぜ。」

「そんな書きもののある筈がありませんよ！」とアリオシーシャは熱心に繰り返した、「そんな筈はありません、だつて、ミーチャは、下手人ではありませんもの。お父さんを殺したのはあの人ぢやありませんよ、あの人ぢやありませんとも！」

イワン・フォードロキッチは急に立ちどまつた。

「ぢや、お前は誰が下手人だと言ふんだ？」と、彼は打ち見たところ妙に冷静に訊ねたが、その質問には或る傲慢な調子さへ籠つてゐた。

「誰だかつてことは、兄さん御自分で知つてゐるんでせう、」とアリョーシャは低い聲で、腹の底を見すかすかのやうに言つた。

「誰だ？ それは、あの氣違ひの馬鹿とでもいふ作り話かい？ あの癩癩もちのさ？ スメルヂャコフのことかつて言ふのさ？」

アリョーシャは急に全身が慄へるやうな氣がした。

「兄さんは自分で知つてるぢやありませんか。」さういふ言葉が力なく彼の口から洩れた。彼は息をとぎらせてゐた。

「ぢや、誰だい、誰だい？」と、イワンは殆んど威丈高になつて叫んだ。今までのひかへ目なところは、急に消えてしまつた。

「僕の知つてゐるのはただこれだけです、」と、アリョーシャは依然として囁くやうに言つた。「お父さんを殺したのはあなたではありません。」

「あなたではないつて？ あなたでないつて、何のことだい？」イワンは立ち竦んでしまつた。

「お父さんを殺したのは、あなたではないんです、あなたではないんです！」と、アリョーシャは斷乎として繰り返した。

三十秒ばかり沈黙がつづいた。

「さうさ、僕が殺したんでないことは自分でちやんと知つてるよ。お前は寢言でも言つてるのかい？」蒼白い歪んだやうな薄笑ひを浮かべながら、イワンがさう言つた。彼はちつとアリョーシャを見据えた。二人はまた街燈の傍に立ちどまつた。

「いいえ、イワン、あなたは幾度も、下手人はおれだと自分で自分に言ひました。」

「いつ僕が言つた？、僕はモスクワへ行つてゐたぢやないか、……いつ僕がそんなことを言つた？」と、イワンはすつかり度を失つて呟くやうに言つた。

「あなたはこの怖ろしい二た月の間、一人切でゐる時に、幾度も自分で自分にさう言つたのです、」とアリョーシャは依然として低い聲で、はつきりと言葉を句切りながら續けた。けれどもそれは、もう自分の意志からではなく、ある打ち克ち難い命令に従つて、無我夢中で喋つてゐるものやうであつた。「あなたは自分に罪をきせて、下手人は自分以外の誰でもないと自身に向かつて自白したのです。けれど、あなたが殺したわけではありません、下手人はあなたではありません、決してあなたではありません！ このことをあなたに告げるために神様が僕をお遣はしになつたのです。」

二人は口を噤んだ。この沈黙は暫らく續いた。二人はその場に佇んだまま、ちつと互ひに眼と眼を見交はしてゐた。二人とも蒼ざめてゐた。と、不意にイワンは體ぢゆう慄はせながら、アリョーシャの肩をむんづと掴んだ。

「お前はおれのところへ来てゐたんだな！」と、彼は齒ぎしりしながら囁き聲で言つた、「お前はあいつが來た夜、おれのところにゐたんだな、……さあ白狀しろ、……お前はあいつを見たんだらう、見た

んだらう？」

「誰のことを言つてるんです、……ミーチャのことですか？」とアリョーシヤは怪訝さうに訊ねた。

「あいつのことぢやない、あん畜生なんかどうだつていい！」とイワンはわれを忘れて呶鳴り出した、

「あいつがおれのところへやつて来るのをお前は知つてるのか？ どうしてそれを知つたんだ、さあ、言つてみる！」

「あいつつて誰ですか？ 誰のことを言つてるのか、僕にはさつぱり分からないのですよ」と、アリ

ョーシヤは怖ろしくなつて呟いた。

「いや、お前は知つてゐるよ……でなけりや、どうしてお前は……お前が知らない筈はないよ……」

しかし不意に彼は自分を抑へたやうであつた。彼は突つ立つたまま、何やら物思ひに耽つてゐるらしかつた。異様な嘲笑ひが彼の唇を歪めた。

「兄さん、」とアリョーシヤが慄へ聲でまた言ひ出した、「僕が今あんなことを言つたのは、兄さんが僕の言葉を信じて下さることを知つてゐるからです、この『あなたではない』といふ言葉を、僕は命にかけて言つたんです！ いいですか、命にかけてですよ。神様がこの言葉を僕の魂へ吹き込んで、それをあなたに言はせて下さつたのです。たとひ、この一瞬間から永久にあなたの怨みを受けようとも……」しかし、イワン・フョードロキッチは見たところ、もうすつかり落ちつきを取り戻してゐるらしかつた。

「アレクセイ・フョードロキッチ」と彼は冷たい微笑を浮べて言つた、「僕は豫言者だの癲癩もちだの

にはとても我慢がならない、神の使ひなんてものはなほさら堪らないんだ、それは君もよく御承知の筈だよ。今から僕は君と縁を切る、怖らく永久の別れになるだらう。どうか今すぐこの四つ辻で僕と別れて貰ひたい。この横町は君の家へ行く道筋だ。特にけふ僕のところへ来て貰ふことは御免を蒙るよ！ 分かつたかね？」

彼はくるりと背を向けると、しつかりした歩調で、振り返りもしないで、さつさと歩み去つた。

「兄さん、」とアリョーシヤがその後ろから呼びかけた、「若しもけふ兄さんの身の上にかつことが起つたら、まづ第一に僕のことを思ひ出して下さい！……」

しかし、イワンは答へなかつた。アリョーシヤは兄の姿がすつかり闇の中に没れてしまふまで、ぢつと四つ辻の街燈の傍に佇んでゐた。それから、彼は踵を返して、そろそろと、横町を通つて自分の家の方へと歩を運んだ。彼もイワン・フョードロキッチも別々に間借りをしてゐた。二人ともがらんとした父フョードル・パトウロキッチの家に住まうとは思はなかつたのである。アリョーシヤは或る町人の家に家具つきの部屋を借りてゐた。イワン・フョードロキッチの方は、アリョーシヤの家からかなり離れたところに住んでゐた。彼は裕福な官吏の未亡人の所有してゐる立派な家に接續した廣々として氣持のいい離れを借りてゐたのである。しかし、この離れの方の女中といふのは、たつた一人で、それも怖ろしく年をとつた耳の遠い婆さんで、始終レウマチを病んでゐて、晩は六時から床に就き、朝は六時に起きるといつたやうな風であつた。イワン・フョードロキッチはこの二ヶ月の間、不思議なくらい女中に物をさせなくなつて、いつも一人きりでゐることを好んだ。彼は借りてゐる部屋の掃除まで自分でしてほ

かの部屋へは滅多に入らなかつた。彼は自分の家の門まで来て、ベルのつまみに手をかけたが、ふと立ちどまつた。彼は依然として全身が怒りに慄へてゐるのを感じた。彼は突嗟にベルをはなした、そしてべつと唾を吐くと、くるり向きを變へて、まるで別な方角へすたすたと急ぎ足に歩きだした。それは全く正反對の方角に當る町はづれで、彼の家から二露里も離れてゐた。彼はそこにある一軒の小さい、傾いた丸太づくりの小家へと志したのである。その家にはマリヤ・コンドライチエヴナが住んでゐた。それは前にフォードル・パウロキツチの邸の隣りに住んでゐてよくフォードル・パウロキツチの家の臺所へスープを貰ひに来た女である。その頃スメルヂャコフはこの女に歌をうたつてやつたり、ギターを弾いて聴かせたりしたものである。彼女は以前の持ち家を賣り拂つて、今ではまるで百姓家のやうなこの家に、母親と二人で住んでゐた。病氣で死にかかつてゐるスメルヂャコフはフォードル・パウロキツチが亡くなつて以來、この母娘の家に同居してゐたのである。今イワン・フォードロキツチが、突發的な抑へ難い或る氣持に驅られてここへやつて來たのも、彼に會ふためであつた。

## VI

## スメルヂャコフとの最初の會見

イワン・フォードロキツチはモスクワから歸つて以來、スメルヂャコフのところへ話しに行くのは、今度でもう三度目であつた。あの悲劇の後、初めてスメルヂャコフに會つて話しをしたのは、彼がモスクワから歸つて來た當日であつたが、それから二週間の後、もう一度、彼を訪問した。だが、この二度目の訪問以來、彼はスメルヂャコフとの會見を打ち切つたので、もう一ヶ月以上も、彼に會はなかつたし、その消息も耳にしなかつた。イワン・フォードロキツチがモスクワから歸つて來たのは、父の死後やつと五日目のことであつたから、彼は棺さへ見なかつたのである。葬式はちやうど彼の歸る前の日に取り行はれてゐた。イワン・フォードロキツチの歸着が遅れた理由はかうであつた。アリョーシヤはイワンのモスクワの宿所を、はつきり知らなかつたので、カテリーナ・イワーノヴナのところへ駆けつけて、電報を打つて貰はうとしたが、彼女もやはり確かな居所を知らなかつたので、自分の姉と叔母に宛てて打電した。それはイワン・フォードロキツチがモスクワへ到着すれば早速、彼女の家へ立ち寄るものと考へたからである。ところが彼は到着後四日目になつてはじめて彼女らを訪問したのである。電報を読むと彼はむろん急遽この町へ歸つて來たのであつた。歸ると彼はまづ第一にアリョーシヤに會つたが、弟と話しをしてひどく驚ろいたのは、彼がこの町の一般の意見とは全然反對に、ミーチャを少しも疑はうとしないで、いきなり下手人としてスメルヂャコフを名ざしたことである。次いで彼は署長や檢事などに會つて、豫審の模様や拘引の有様を詳しく知るに及んで、更に一層アリョーシヤの意見に驚かざるを得なかつた。が、結局アリョーシヤの意見なるものは、極度に昂奮した兄弟の情と、ミーチャに對する同情に基くものだとなつて解決した。アリョーシヤがミーチャを愛してゐることは、イワンもよく知つ

てゐた。序で見ドミトリイ・フォードロキッチに對するイワンの感情に就いて、ほんの一言だけ述べ  
ておくが、彼は全然ミーチャを愛してゐなかつた。時たま、せいぜい憐愍を感じることもぐらゐるが關の山  
で、それすらやはり嫌惡に近い激しい侮蔑の念を混じへてゐた。ミーチャは第一その外貌からして、全然  
イワンの同情を惹くやうには出来てゐなかつた。彼に對するカテリーナ・イワーノヴナのミーチャへの  
愛情をも、イワンは憤慨の眼をもつて眺めてゐた。彼が被告としてのミーチャに會つたのも、やはり歸  
郷の當日のことで、この面會はミーチャの犯罪に對する彼の信念を弱めなかつたばかりか、却つて一層  
つよめたくらゐである。彼はその時、不安と病的な昂奮に驅られてゐる兄を見た。ミーチャはやたらに  
喋り散らしたが、放心したやうな捨鉢なところがあり、非常に激越な調子でスメルチャコフの罪を鳴ら  
しながら、何だか怖ろしく混亂してゐた。彼が何より多く口にしたのは、死んだ父が彼から『盗んだ』  
三千留のことであつた。『おれの金なんだ、あれはおれのものなんだ、』とミーチャは繰り返した、『た  
とへおれがあのお金を盗つたにしても、正當なことをしたまでぢやないか、』彼は自分に不利なすべての  
證據に就いても殆んど辯駁しなかつた。自分に有利な事實を擧げるにしても、やはりしどろもどろで、  
不合理だつた。全體として彼はイワンに對しても誰に對しても、全く辯明を望んでゐないものやうで  
あつた。それどころか、却つてむかつ腹を立てたり、告發に對して傲慢な侮蔑を投げたり、罵つたり、  
激昂したりするだけであつた。戸が開いてゐたといふグリゴリーの證言に對しては、彼はただ蔑むやう  
に笑つて、それは『惡魔が開けたんだ、』と言つた。しかしこの事實に對して、彼は何ら筋道のたつた  
證明を下すことが出来なかつた。そればかりか、『何をしても許される』と自ら公言してゐるものに、

人を疑つたり訊問したりする権利がどこにあるなどと、鋭く突つこんで、面會早々イワン・フォードロ  
キッチを侮辱してしまつた。一體にこの時彼はイワン・フォードロキッチに對してひどくよそよそしい  
態度をとつた。イワン・フォードロキッチはミーチャとの面會を済ますと、早速その足でスメルチャコ  
フの許へ出むいて行つた。

彼は急遽モスタワから歸る途中、汽車の中で、スメルチャコフのことや、出發の前後、彼と交した最  
後の對談などを、絶えず考へつづけた。いろいろなことが彼の心を惑亂し、様々なことが疑はしく思は  
れた。しかし、豫審判事に供述をする時には、その對談のことは暫らく言はないでおくことにした。す  
べてをスメルチャコフとの會見まで延ばしてゐたのである。スメルチャコフはその時、町立病院に收容  
されてゐた。ヘルツェンシュトゥーベ博士と、病院でイワン・フォードロキッチに會つた醫師ヴルギン  
スキイとは、イワン・フォードロキッチの執拗な質問に對して、スメルチャコフの癲癇は疑ふ餘地がな  
いと確答して、『慘劇のあつた當日あいつは假病を使つてゐたのではありませんか？』といふ問ひに吃  
驚したほどであつた。彼らの説明によると、今度の發作は異常なもので、幾日も繰り返し繰り返し繼續  
したため、患者の命もまづたく危険であつたが、手當を盡した結果、今では生命を取り止めることだけ  
は斷言できるやうになつたが、悪くすると、(ヘルツェンシュトゥーベ博士がさうつけ加へた) まだ患  
者の精神に異狀を呈するやうなことになるかもしれないと限らない、『一生涯といふほどでないにしても、相  
當長期間に亘つて、』といふのであつた。『では、あの男はいま發狂してゐるのですか？』といふイワ  
ン・フォードロキッチの性急な質問に對して、彼らは『嚴密にいつて、まだそこまでは行つてゐません

が、一種の變態徵候は認められます。」と答へた。イワン・フォードロキッチはその變態徵候がどんなものか、自分で調べてみようかと考へた。病院ではすぐに面會を許された。スメルチャコフは別室に收容されて、寢臺に横たはつてゐた。その傍らにはもう一つの寢臺があつて、衰弱しきつたこの町のさる町人が寝てゐたが、水腫で全身がむくみ上つて、どう見ても、あすあさつてあたりの壽命らしかつたから、この男のために話を遠慮しなければならぬやうなことは萬々なかつた。スメルチャコフはイワンを見たと、胡散くささうにやりと笑つた。そして最初の一瞬間、何となく物怯ぢしたやうであつた。少くともイワン・フォードロキッチにはさう思はれた。けれど、それはほんの束の間のこと、その後は却つてその冷靜さで彼を驚かした。イワン・フォードロキッチは一目見ただけで、彼が極度の病的状態にあることを確かめた。彼はひどく衰弱してゐて、物をいふのもどかしく、妙に舌を動すのさへ大儀さうであつた。それにひどく痩せて黄いろくなつてゐた。二十分ばかりの面會の間ぢゆう、彼は絶えず頭痛と、四肢の疼痛を訴へとほした。去勢者のやうな、萎びた彼の顔は、怖ろしく小さくなつたやうに見える、顴顚の毛は縫れて、前髪は細い一掴みの毛束となつて突つ立つてゐた。けれど、始終まばたきをして、何かを暗示するもののやうな左の眼は、依然たるスメルチャコフを現してゐた。「利巧な人とはちよつと話しても面白い」といふ例の文句が、すぐにイワン・フォードロキッチの記憶によみがへつた。彼はスメルチャコフの足許の方にある床几に腰を下した。スメルチャコフは苦しさに寢床の上でちよつと體を動かしたが、自分の方から口をきらうともせず黙りこんだまま、さして珍らしくもないといつた眼つきをしてゐた。

「おれと話が出るかい？」とイワン・フォードロキッチが訊ねた、「大して疲らせはしないがね。」  
「大丈夫できますとも、」と、スメルチャコフは弱々しい聲で呟いた、「もう餘程まへにお歸りになつたのでございますか？」彼はばつゝの悪きうな訪問者を勵まさうとでもするやうに、慇懃にかうつけ加へた。

「いや、けふ歸つたばかりだよ……こちらで、お前たのこたごたのお相伴に預からうと思つてさ。」  
スメルチャコフはほつと溜息をついた。

「どうして溜息なんかつくんだ、お前は初めつから知つてゐたんぢやないか？」と、イワン・フォードロキッチはいきなり叩きつけた。

スメルチャコフは暫らく依估地に口を喋んでゐた。

「それあ何で知らずにをられませう！ 前からちやんと分かつてゐたことですからね、でも、よもやあんなことにならうとは思ひませんでしたよ。」

「どんなことにならうと思はなかつたんだ？ 誤魔化しちやいけなぞ！ あの時お前は穴倉へはいりさへすれば、すぐ癩癩を起すと豫言したぢやないか、ちやんと穴倉と指定したぢやないか？」

「あなたは取り調べの時、それを仰つしやつたのですか？」スメルチャコフは落ちつき拂つて、ちよつとかう訊ねてみた。

イワン・フォードロキッチは急にむつとなつた。

「いや、まだ言はないが、ぜひ言ふつもりだ。なあ、おい、お前は今おれにいろいろ説明しなきやな

らんど。いいか、おい、おれはお前に冗談口を聴きに來たんぢやないぞ！」

「何で冗談など申しませう、わたしはあなた一人を、神様のやうに頼つてゐるのでございますのに！」と、スメルチャコフは依然として落ちつき拂つてかう言つた。そして、ただちよつとの間、瞑目した。

「まづ第一に」と、イワンが切り出した。「發作の豫言は出來ないつてことを、おれは知つてゐるんだ。おれはちゃんと調べてあるから、誤魔化すことは出來ないぞ。時日などを豫言することは出來ないんだ。それなのに、どうしてあの時、お前は、日や時間ばかりか、穴倉のことまで豫言することが出來たのだ？ 若し、お前がわざと發作の眞似をしたのでないとすれば、どうしてお前は、はつきりとあの穴倉で發作を起すといふことを、前もつて知つてゐたんだ？」

「さうでなくても、穴倉へは、一日に幾度も行かなくちやなりませんでしたので、」と、スメルチャコフはゆつくりと言葉を曳つばるやうに言つた。「一年前にも同じやうな具合に、屋根裏から落つこちたことがあるのでございますよ。發作の起る日や、時間を豫言することは出來ませんが、さういふ豫感だけは、いつでもあるのでございますからね。」

「それなのに、お前は日と時間を豫言したぢやないか！」

「わたしの癲癇のことはね、旦那、ここのお醫者に訊いて下さればよくお分かりになりますよ、わたしの病氣が本當だつたか、假病だつたかがね。ですが、わたしはこのことに就いては、もう何にも申し上げることはございませんよ。」

「だが、穴倉のことは？ 穴倉のことはどうして前から知つてゐたんだ？」

「よくよくあなたは穴倉が氣になると見えますね！ あの時わたしは穴倉へはいると、何だか怖ろしくつて、胸さはぎがして堪らなかつたのです。あなたとお別れして、もう他には世界ぢゆうに誰ひとり頼りになる人はないと思つて、餘計おそろしかつたのでございます。あの時、わたしは、穴倉へはいると、『今にも起りはしないか、あいつがやつて來て、ここでぶつ倒れやしないかしら？』と思つたのですよ、つまりこの心配がもとで、いきなり咽喉に頑固な痙攣が起つて……それどころげ落ちてしまひましたんで。このことも、それからあの日の前の晩、門の傍であなたとこのお話をして、自分の心配やら穴倉の一件を申し上げたことなどを、わたしは詳しくお醫者のヘルツェンシュトラーベさんや、豫審判事のニコライ・パルフェーノキツチさんに申し上げましたところ、あの方たちは残らずそれを豫審調書に書きつけなさいましたよ。特にこの病院のヴルゼンスキイ先生などは、みなさんの前で、こんなことを惹き起したのはつきりさういふ考へからだ、『今に轉げるだらうか、轉げはしないだらうか？』といふ懸念から起つたのだと、どこまでもさう仰しやいましたよ。で、それはその通りに違ひございません。その通り調書へもお書きつけになつたのです。つまりそれはただただたくしの心配から起つたこととに相違ないといふことをですよ。」

これを言ひ終ると、スメルチャコフは、さも疲れたやうに、深い息を曳いた。

「ぢや、お前はもうそんなことまで供述したのかい？」と、イワン・フォードロフはいささか毒氣を抜かれた形で訊ねた。彼は正しくあの時の二人の對談を申し立てると言つて、スメルチャコフをおどすつもりだつたのである。ところが、スメルチャコフの方が先を越して供述してしまつてゐたのであ



る。

「わたしに何を怖れることがございませう？ 何もかも本當のことを書きつけさせておけばいいんですよ、」と、スメルチャコフはきつぱり言った。

「門の傍でお前とした話も、逐一喋つてしまつたのかい？」

「いいえ、逐一といふ譯ではございませぬ。」

「あの時、癲癩のまねが出来るといつて、おれに自慢したことも喋つたのかい？」

「いいえ、あれも言ひませんでした。」

「ぢや訊くがね、なぜお前はあの時おれをチェルマーシニヤへやつたんだい？」

「あなたがモスクワへ行つておしまひになるのを心配したからでございませうよ、何しろチェルマーシニヤの方が近うございますからね。」

「嘘をいへ。お前の方からおれに行けとすすめたんぢやないか。罪を避けるためにお發ちなさいましと言つたぢやないか。」

「あれはあの時、あなたに對する情誼と心からの信服から申したことでございませう、家の中に面倒が起るやうな気がしましたので、あなたをお氣の毒に思つてのこととございませう、尤も、あなたのことよりも、自分の身が可哀さうだつたのでございませうがね。それで、罪を避けるためお發ちになるやうにと申し上げましたのは、今にも家の中に不幸が起りますから、お父さんの保護をなさらなければならぬといふことを、あなたに悟つて戴くためだつたのでございませう。」

「それぢやもつと眞直ぐに言へばいいぢやないか、馬鹿！」イワンは急にかつとなつた。

「どうしてあの時眞直ぐになど言へませう？ あれはただ怖ろしさのために申しただけでございませうもの、若しそんなことを言つたら、あなたが御立腹になるに決つてゐますからね。無論、わたしも、ドミトリー・フォードロキッチが何か騒動を起しなさはせぬか、あの金だつて自分のものだと思つておいでになるのだから、持ち出したりなさりはせぬかと、心配をしない譯ではなかつたのですが、まさかあんな人殺しが持ち上らうなどと、誰が思ひませう？ わたしの考へてゐたのは、ただあの人が、旦那の蒲團の下にあつた、あの封筒入りの三千留をお取りになるだらうといふことだけだつたのですが、たうとう殺しておしまひになつたんですからね、あなたにだつて豫想外なことでしたせう？」

「お前でさへ豫想外だつたと言ふのに、どうして、僕がそれを豫想して、家に留まることが出来るんだ？ どうしてお前はそんな世迷ひごとを言ふのだ？」と、イワン・フォードロキッチは考へこみながら言つた。

「ですけど、わたしがあなたにモスクワの代りにチェルマーシニヤへいらつしやるやうにおすすめたことからも、御想像がつきさうなものでございませうがね。」

「どうして想像がつくんだ！」

スメルチャコフは非常に疲れたらしく、再びちよつと沙汰に落ちた。

「わたしがあなたに、モスクワ行きをおすすめしないで、チェルマーシニヤ行きをおすすめましたのは、あなたが少しでも近くにゐて下さることを望んだからでございませうよ、だつて、モスクワは遠う

ございますからね。それにドミトリイ・フォードロキッチにしましても、あなたが近くにおいでになると分かつてゐたら、そんなに思ひ切つた眞似はなさるまいと思つたからですよ、これからでもお察しがつきさうなものぢやございませんか。それにわたしのことにしましても、何か事が起ればあなたが駆けつけて庇つて下さる筈でございます、なぜと申して、わたしはグリゴリイ・ワシーリキッチの病氣のことや、わたしが發作を怖れてゐることを、お話ししておきましたからでございます。また、亡くなられた旦那様のお部屋へはいる例の合圖を、ドミトリイ・フォードロキッチが、わたしから聞き知つてゐらつしやることを、あなたにお話ししたのは、つまりあの方が屹度何かしでかしなさるに違ひない、とあなたがお察しになつて、チェルマーシニヤ行きどころか、全然どこへもお出かけにならないで、ここにお留まり下さるだらうと考へたからでございます。」

「責えきらない話しつぶりだがなかなか秩序だつたことを言ふわい」と、イワン・フォードロキッチは考へた、『ヘルツェンシニトウーベは、精神に異状があると言つてゐたが、一體どこにそんな點があるのだらう?』

「お前はおれを小馬鹿にしてるんだな、畜生!」彼はかつとなつて叫んだ。

「ですが、實のところわたしは、あの時、あなたがもうすつかりお察しになつたことと思ひましたので、」とスメルチャコフは極めて單純らしい様子で言ひ抜けた。

「察しがついてをれば、出かけやしないや!」イワン・フォードロキッチはまたもやかつといきり立つて叫んだ。

「ところが、わたしは、あなたは何も彼もお察しの上で、ただただを罪を避けよう、怖ろしさを逃れようとお思ひになつて、出来るだけ早くどこへでもいいからと、遁げ出しておしまひになつたものとはかり思つてをりました。」

「お前は誰でも自分と同じに臆病だと思つてゐるのかい?」

「失禮ですが、實はあなたもわたしと同じやうな方だと存じてをりましたので。」

「むろん、察しなければならぬところだつた、」とイワンは心を波立たせながら言つた、「尤も、おれはお前が何か卑劣なことをするだらうとは察してゐた……だがお前は嘘をついてるんだ、また嘘をついてるんだ。」と、彼は急に思ひついて叫んだ、「お前はあの時馬車の傍へ寄つて来て『賢い人とはちよつと話しても面白い』と言つたことを憶えてるだらう。してみれば、お前はおれが出發するのを悦んで褒めたのぢやないか?」

スメルチャコフは更にもう一度、溜息をついた。その顔には血の色がさしたやうであつた。

「わたしが悦びましたとすれば、」と、彼は少し息をはずませながら言つた、「それは、ただ、あなたがモスクワへではなく、チェルマーシニヤへ行くことに御同意なすつたからですよ、何しろ、すつと近うございますからね。ですが、わたしがあんなことを申ししたのは、お褒めするつもりではなくて、寧ろお咎めするつもりだつたのでございますよ。それが、あなたにはお分かりにならなかつたのでございます。」

「何を咎めるんだ?」

「それはあなたがあんな災難を前もつてお察しになつてゐながら、自分の父御を振り棄て、わたしどもを保護して下さらうともなさらないからでございますよ。何しろ、わたしがあの三千留の金を盗みでもしたやうな、嫌疑をかけられる心配がありましたからね。」

「畜生！」とイワンはまた罵るやうに呶鳴つた。「だが、待て、お前は豫審判事や検事に、あの合圖のことも供述したのか？」

「何もかもありのままに申し立てました。」

イワン・フョードロキッチはまた内心おどろいた。

「おれが若しあの時、何か考へたとすれば、」と彼はまた始めた、「それは、お前が何か卑劣なことをするだらうといふことだ、ドミトリーはなるほど殺すかも知れないが、盗みなんかはしない——おれはあの時さう信じてゐただ……がお、前の方はどんな卑劣なことをするかも知れないと、おれは思つてゐたのだ。お前は自分から、癲癇の發作が眞似られると言つたぢやないか、何のためにあんなことを話したんだい？」

「それはただ。わたしが馬鹿正直なためですよ。わたしは生れてから一度も、わざと癲癇の眞似なんかしたことはありません、ただあなたに自慢がしたいばかりにあんなことを申し上げただけです。全く馬鹿げ切つたことでございますよ。わたしはあの頃、あなたが大變すきでしたから、あなたには何でも正直にお話ししてたのですよ。」

「だが兄貴は、殺したのも盗んだのもお前だと言つて、きつぱりお前に罪をきせてゐるんだぞ。」

「それあ、あの方にはそんなことより他には仰つしやりやうがございますまいよ、」とスメルチャコフは苦笑ひを洩らして、「でも、あんなに澤山の證據が擧つてゐるのに、誰があの人と言ふことなんか信用するのですか？ グリゴリー・ワシーリエキッチも、ちやんと戸の開いてゐたのを見たんですからね、かうなつては、もうどうも仕様がありませんか。まあ、あの人と言ふことなんかどうだつていいんですよ！ 自分が助かりたいと思つて、もがいてゐるんですからね……」

彼は靜かに口を閉ぢたが、急に何か思ひついたやうにつけ足した。

「だつて。やつぱり同じことになりますよ。あの人わたしはわたしの仕業だと言つて、わたしに罪を被せようとしておいでなさるさうです、——そのことはわたしも聞いてをります——けれど、たとひわたしが癲癇の眞似の名人にしましても、若しもあの時わたしが本當に、あなたのお父様に對してそんな企らみを持つてゐたとしますれば、癲癇の眞似が上手などと、あなたに前もつて申し上げる筈がありませんよ！ 若しもわたしがあんな人殺しの企らみをもつてゐたら、自分の不利になる證據を前もつて打ち明けるなんて、そんな馬鹿なことをする筈がありませんよ、まして、相手はその人の息子ぢやありませんか？ そんなことが本當に有り得るでせうか？ どうしてどうして、そんなことがあらうなどは決して思はれやしませんよ。現に今にしましても、わたしとあなたの話は神様より他に誰ひとり聞いてゐる者はありませんが、若しあなたが検事やニコライ・パルフョーノキッチにお話しなすつたとしても、それは結局わたしの辯護に役立つだけです。なぜと申して、前にあれほど馬鹿正直だつた者を、どうしてそんな悪人だなどと思ふことが出来ませう？ そんなことは誰にでも分かることぢやありませんか。」

「まあ聴けよ、」と、スメルチャコフの最後の論證に打たれたイワン・フォードロキッチは會話を打ち切るために席を立つた。「おれはちつともお前を疑つてはゐない。お前に罪を被せるのはむしろ滑稽なことだとさへ思つてゐるよ……それどころか、お前はおれを安心させてくれたので感謝してゐるくらいだ。今はもう歸るが、また來るよ。ぢや。失敬。早くよくなるんだね。何か要る物はないかい？」

「いろいろ有難うございます、マルファ・イグナーチエヴナがわたしを忘れないで、わたしに入必要なものは、前々どほり親切に何かと持つて來てくれます。親切な人たちが、毎日たづねて來てくれるのです。」

「ぢや、さようなら、だが、おれはお前が癲癇の眞似が上手だつてことは、誰にも話さないからね……お前も言はない方がいいぜ。」と、イワンはなぜか不意にさう言つた。

「よく分かつてをります、それをあなたが仰しやらなければ、わたしもあの時あなたと門の傍でお話したことを、すつかりは言はないことにしませう……」

イワン・フォードロキッチは不意にそこを出たが、まだ廊下を十歩も行くか行かない時、始めて、スメルチャコフの最後の言葉に何か侮辱的な口吻が含まれてゐたことに氣がついた。彼はよほど後へ引き返さうかと思つたが、その考へもちらと閃いただけで、「何だ、馬鹿々々しい！」と呟やくと共に、急ぎ足に病院を出てしまつた。彼が第一に感じたのは、犯人がスメルチャコフではなくて、兄のミーチャらしいといふ情勢を、確かめた安堵の情であつた。尤もそれは正反對であるべき筈であつたが、なぜ彼がそんな安堵の氣持になつたのか——その時彼はそのことを解剖したくなかつた。そればかりか、自分

の感情の詮牽に嫌惡の念さへ覺えたのである。彼は何事かを一刻も早く忘れてしまひたいやうな氣持であつた。その後數日の間に、ミーチャを壓倒するやうな多數の證據を一層詳しく根本的に知るに及んで、彼は絶対にミーチャの有罪を信じてしまつた。ごくつまらない連中、例へばフォニーヤやその母親などの供述にしても、殆んど戰慄に値するほどのものであつた。ベルホーチンや、酒場や、プロートニコフの店や、モークロエの證人などのことは、今さら言ふまでもなかつた。殊にその詳細が壓倒的のものであつた。祕密の『ノック』に關する供述は、戸があいてゐたといふグリゴリーの供述と同程度に、判事や檢事を驚ろかした。グリゴリーの妻のマルファ・イグナーチエヴナはイワン・フォードロキッチの質問に對して、スメルチャコフは彼らと仕切り壁を距てて夜どほし寝てゐたが、そこは『わたし共の寢床から三步とは離れてをりませんでした』で、彼女はぐつすり寢込んでゐたけれど、彼の唸り聲を聞いて何度も眼を覺した、『しじゆう唸つてをりました、しつきりなしに唸つてをりました』とはつきり言ひきつた。またヘルツェンシュトゥーベと話をして、スメルチャコフはいつかう狂人らしくない、ただ衰弱してゐるだけだといふ意見を述べたが、それはただこの老醫師の微妙な微笑を買つたに過ぎなかつた。『ぢや、あなたはあの男がいま特にどんなことをしてをるか御存じですか？』と醫師はイワン・フォードロキッチに訊ねた、『佛蘭西語を暗誦してゐるんですよ。あの男の枕の下には手帳が入れてありますね、誰が書いたのか、佛蘭西語が露西亞字で書いてあるのですよ、へへへ！』で、結局イワン・フォードロキッチはすべての疑ひを一掃してしまつた。もはや彼は嫌惡の情なしに兄ドミトリイのことを考へることは出來なかつた。しかし、ただ一つ腑に落ちないのは、アリオーシャが下手人はドミ

トリイではなく、『十中八九まで』スメルジャコフに違ひないと、頑強に主張しつづけてゐることであつた。イワンは常にアリオシヤの意見を重視してゐたので、今もそのためにひどく怪訝に思ふのであつた。また、アリオシヤが、自分とミーチャの話をするのを避けて、決して自分の方からは言ひ出さないで、ただイワンの問ひに答へるに過ぎないといふことも不思議であつた。これも、イワン・フォードロキツチの殊に注意してゐる點であつた。けれどそれと同時に、彼はこれとは全然別な方面の或る事柄にひどく心を奪はれてゐた。彼はモスクワから歸ると早々、カテリーナ・イワーノヴナに對する燃えるやうな、物狂はしい情熱に溺れきつてゐたのである。けれど、後日イワン・フォードロキツチの全生涯にその影像をとどめた、その新しい情熱については、いま物語るべき機會ではない。これはまた、別な小説の主題を形造るべきものである。が、その小説にいつか取りかかるかどうか、それは作者自身にも分らない、だがそれにしてもこの際黙過することの出来ないことがある。イワン・フォードロキツチは前にも書いた通り、あの夜アリオシヤと一緒にカテリーナ・イワーノヴナの家から歸る途すがら、『僕はあまりあの女を好かぬ』と言つたが、それはあの時の大きな嘘であつた。尤も、彼は時によると、殺し兼ねないほど、彼女を憎むこともあつたが、その實、氣が狂ひさうならぬ彼女を熱愛してゐたのである、それには多くの原因が重なつてゐた。彼女がミーチャの件に氣も顛倒してゐたところへ、再び自分の許へ歸つて來たイワン・フォードロキツチに、彼女はまるで救ひ主か何ぞのやうに、いきなり取り纏つたのである。彼女は自分の感情の中に忿怒と侮蔑を抱いてゐた。ちやうどそこへ、以前彼女を熱烈に愛してゐた男が、再び現はれたのである、——おお、彼女はそれをよく知つてゐた——彼

女はその男の知力と感情を常に高く評價してゐたのである。けれどこの嚴格な處女は、自分を愛してゐる男のカラマゾフ式な抑制し難い烈しい情熱にも拘らず、また彼女に對する彼のあらゆる蠱惑にも拘らず、自分を犠牲にしようとはしなかつた。それと同時に彼女は、ミーチャを捨てたといふ悔恨のために絶えず苦悶してゐて、争つた時とか甚く怒つた時などは（そんなことは度々あつた）イワンに向つてそのことを公然と言つたりした。イワンがアリオシヤと話しながら、『嘘の上の嘘だ』と言つたのはこのことであつた。そこにはむろん多くの虚偽があつた。これが何よりもイワン・フォードロキツチを憤慨させたのである……が、このことはあとにしよう。一言にしていへば、彼は一時殆んどスメルジャコフのことを忘れてゐたのである。けれども、スメルジャコフを最初に訪ねてから二週間ばかり経つて、またしても例の奇怪な想念が彼を苦しめ始めたのである。彼は絶えず自問した——なぜ自分はその時、例の最後の夜、即ち出發の前夜、フォードル・パーウロキツチの家で、盜人のやうに足音を忍ばせながら階段の上へ出て、父親が下で何をしてゐるか、聞き耳を立てたのだらう？　なぜ後になつてそのことを思ひ出して嫌惡を感じたのだらう？　なぜその翌る朝、途中であんなに急に憂鬱になつたのだらう？　なぜモスクワへ乗り入れながら、『おれは卑劣漢だ！』と獨りごちたのだらう？　と、こんな風に反問したことだけを言へば澤山であらう。今や、彼はかうしたさまざまな惱ましい想念のために、カテリーナ・イワーノヴナさへ忘れがちになりさうな氣がした。それほどまでに、彼はまた急にこの想念の虜になつたのである。丁度こんなことを考へながら往來を歩いてゐる時、ふとアリオシヤに出會つたのである。彼はすぐに弟を呼び止めて、不意にかう問ひかけた。

「お前はおぼえてるだらう、ドミトリイが食事の後で家へ暴れ込んで、親爺を擲りつけたことを。それから僕が庭で、『希望の権利』を保有するとお前に言つたことがあつたらう？　ところで一つお前に訊ねるが、あの時、僕が親爺の死ぬことを望んでゐると考へたかい、どうだい。」

「考へました、」とアリョーシャが低い聲で答へた。

「だが、それは實際その通りだつたんで、推測も何も要りやしない。だが、お前は那時、『毒蛇同志がお互ひに噛み合ふ』のを、つまりドミトリイが親爺を一刻も早く殺すのを、僕が望んでゐると思ひはしなかつたかい？……そして僕自身もその手傳ひくらゐし兼ねなかつた、と思ひはしなつたかい？」

アリョーシャは微かに蒼白めて、無言のまま兄の顔を見つめた。

「さあ言つたらどうだい！」とイワンが叫んだ。「僕はお前があの時どう思つたか、それが知りたくて堪らないんだよ、本當のことが聴きたいんだ、本當のことが！」彼はもう豫め一種の憎惡を浮べて、アリョーシャを見つめながら、深い息をついてゐた。

「勘忍して下さい、僕はあの時さう思つたのです、」とアリョーシャは囁いたが、『その場をつくらふ言葉』を一言もつけ加へないで黙つてしまつた。

「有難う！」と、イワンはぶつきらぼうに言ふと、そのままアリョーシャを置去きりにして、足早に勝手な方向へ歩み去つた。その時以來アリョーシャは兄イワンがなぜか際だつて自分を避けるやうになり、そのうへ自分を好かないやうにさへなつたことに氣がついた。それでアリョーシャの方でも、イワンのところへ行くのをやめてしまつたのである。ところが、イワン・フョードロキツチはその時アリョー

ーシャに會つてから自分の家へは歸らずに、その足で直ぐに又スメルチャコフのところへ出むいたのであつた。

## VII

### 二度目の會見

スメルチャコフはその時もう病院を出てゐた。イワン・フョードロキツチは彼の新しい住まひを知つてゐた。それは例の軒の傾いた丸太づくりの小さい家で、入口を境にして二つに仕切られてゐた。片方にはマリヤ・コンドライチエヴナが母親と共に住み、もう一方にスメルチャコフが別に住んでゐるのであつた。彼がどんな條件で同居してゐるのか、無賃で厄介になつてゐるのか、それとも金を拂つてゐるのか、それは神より他に知る者はなかつた。後になつて人々は、彼がマリヤ・コンドライチエヴナの未來の婿のいふ名目で、當分はただで世話になつてゐるのだときめてしまつた。母親も娘もひどく彼を尊敬して、自分たちよりも一段高い人間のやうに見てゐた。イワン・フョードロキツチは扉を敲いて玄關へはいると、直ぐにマリヤ・コンドライチエヴナの指示に従つて、スメルチャコフの借りてゐる『白い方の小屋』へ通つた。部屋の中にはタイル張りの煖爐があつて、怖ろしく暖かくしてあつた。ぐるりの

壁は空いろの壁紙で貼り廻らしてあつたが、一面にすだすだに裂けて、その隙間を油虫が無数に匂ひ廻つて、絶えずがさがたと音を立ててゐた。家具といふほどのものもなく、兩側の壁ぎはにベンチが一脚づつと、卓を挟んで二脚の小椅子が置いてあつた。卓は生地のままの木製ではあつたが、それでも薔薇いろの模様をついた卓布が掛けてあつた。二つの小さい窓には、ゼラニウムの鉢植が一つづつ戴つてゐた。一隅には龕に納めた聖像が祀つてあつた。卓の上にはでこぼこになつた餘り大きくない銅のサモワルと、茶碗を二つ載せた盆があつた。しかしスメルチャコフはもうお茶を飲み終つて、サモワルの火も消えてゐた……彼は卓の傍のベンチに腰をおろして、手帳を見ながらペンで何やら書きつけてゐた。その傍にはインキ壺と、背の低い鑄鐵製の燭臺があつて、それでも燭臺にはステアリン蠟燭が立ててあつた。イワン・フォードロキッチはスメルチャコフの顔色を一目見るなり、病氣はもうすつかり癒つてゐることを知つた。彼の顔は前より生々として肉づきもよくなり、前髪は梳きあげられ、鬢には髪油がつけてあつた。彼は派手な綿入れの部屋着を着て坐つてゐたが、それはかなり着古した代物で、いい加減ぼろぼろになつてゐた。彼の鼻には眼鏡が懸かつてゐたが、イワン・フォードロキッチは彼が眼鏡を懸けてゐるのを見たことがなかつた。こんなつまらない事實が、イワン・フォードロキッチの怒りを急に倍加した。『何だ、こんな奴が、眼鏡なんぞかけやがつて!』スメルチャコフは徐ろに頭をあげて、來訪者を眼鏡ごしにじつと見据えた。それから、やをら眼鏡をはづして、ベンチから立ち上がったが、慇懃なところは少しもなく、いかにも大儀さうで、ただ社交上避くべからざる禮儀を守つてゐるだけだ、といつた風な態度であつた。イワンには直ぐそれがびりつと來た。彼はそれを感じると同時に見て取

つた。何より眼についたのは、スメルチャコフの眼眸で、それは極端な悪意と、不愛想と、そのうへ傲慢の色さへ帯びてゐた。『何のためにふらふらとやつて來たんだ。何もかもあの時片をつけたぢやないか、何だつて又やつて來たんだらう?』とでも言つてゐるやうに見えた。イワン・フォードロキッチは辛うじて自制した。

「お前んとは暑いね、」と、彼は立つたまま言つて、外套の釦をはづした。

「お脱ぎになつてよろしいよ、」とスメルチャコフは許可を與へた。

イワン・フォードロキッチは外套を脱いでベンチに投げ掛けると、素早く慄へる手で椅子を卓の方へ引きよせて、腰をおろした。スメルチャコフはそれより先きに自分のベンチへ腰を掛けてゐた。「何はさて、僕らのほかに誰もゐないね?」とイワン・フォードロキッチは急ぎ込んで厳しく訊ねた。「誰も聽いてやしないかい?」

「誰も聽いてをりはしません、御覽の通り、中に玄關がありますからね。」

「ねえおい、おれがお前と別れて病院から歸る時、お前は何か言つたね? お前が癲癩の眞似の名人だつてことをおれが黙つてゐたら、お前も、おれと門の傍でいろいろ話したことを、すつかりは豫審判事に言はないと言つたね? 『すつかり』とはどういふ意味なんだい? どういふつもりでお前はあの時あんなことを言つたんだ? おれを脅したのかい? おれが何かお前とぐるにでもなつてゐたといふのかい? おれがお前を怖れてゐるとでも言ふのかい?」

イワン・フォードロキッチは自分が一切あてこすりや遠まはしな言ひ方を棄てて、正々堂々と勝負を

してゐるのだといふことを相手に知らせようとするものの如く、怖ろしい剣幕でかう言つた。スメルヂャコフの眼は毒々しくきらりと光つて、左の眼が瞬きだした。それは例によつて控へ目な沈着な色を保つてゐたが、すぐに自分の答へを現はした。『お前さんが明らさまを望むなら、さあこれがその明らさまだよ、』とでもいふやうに。

「あの時のつもりはかうだつたのです、あの時あんな風な言ひ方をしましたのは、つまり、あなたが前もつて自分の親の殺されることを知つてゐながら見す見すお父さんを犠牲に供しておしまひになつたのですから、人があなたの心持ちに對してよくない解釋を下すかも知れない、ことによつては、まだどんなことを言ひ出さないにも限らないと思つたからでございます——それをあの時、わたしはお上の役人に言はないとお約束したのでですよ。」

スメルヂャコフは見たところ、決して急き込まず、自己を抑制しながら話してゐるやうであつたが、その聲には強情で執拗な、毒々しくて、不敵な挑戦的な語氣が響いてゐた。彼は臆面もなくイワン・フォードロキッチを見つめてゐた。イワンは最初の一瞬間、眼の中がちらちらするやうにさへ感じた。

「どうしたつて？ 何だと？ 一體お前は正氣かそれとも正氣でないのか？」  
「全く正氣でございます。」

「ぢや、お前はおれがあの時人殺しを知つてゐたと言ふのか？」イワン・フォードロキッチはたうとうかう叫びさま、拳で卓を力一杯敲きつけた。「『まだどんなことを言ひ出さないとも限らん』とは何だ？ さあ言へ、悪黨！」

スメルヂャコフは黙つたまま、依然として例の圖々しい眼つきでイワン・フォードロキッチを見つめてゐた。

「さあ、言へ、臭い悪黨め、『まだどんなことを』とば何だ？」と、こつちは喚いた。

「わたしが今『どんなことを』と申しましたのは、あなた御自身があの時お父さんの亡くなることを非常に望んでおいでになつたらしいといふことなんです。」

イワン・フォードロキッチは、矢庭に飛び上ると、力まかせに拳固でスメルヂャコフの肩を擲りつけた。で、こちらはよろよるとなつて壁に倒れかかつた。そして忽ちその顔は涙に濡れた。『旦那、弱い者を擲るなんて、恥かしいことぢやありませんか！』と言ひながら、彼はいきなり、青い格子縞のさんざ鼻をかんだ汚ない手巾で眼を蔽ふと、弱々しく、めそめそ泣き出した。一分間ばかりたつた。

「もう澤山だよ！ 止せ！」とイワン・フォードロキッチは再び椅子に腰をおろしながら、遂に命令するやうに言つた。「おれの癩癩玉を破裂しないやうにしておくれ！」

スメルヂャコフは眼からぼろ手巾を取りのけた。その皺だらけの顔ぜんたいが、たつたいま受けた凌辱をまざまざと現はしてゐた。

「悪黨め、ぢや貴様は、あの時おれがドミトリイと一緒になつて、親爺を殺さうとしてゐると思つたんだな？」

「あの時のあなたのお考へが分からなかつたのでございます、」とスメルヂャコフは、不服さうに言つた。「ですからあの時、あなたが門へおはいりになつたところでお止めしたんです。この點であなたを



試してみようと思ひましてね。」

「何を試さうつてんだ？ 何を？」

「その御様子をですよ、つまりお父さんの一刻も早く殺されることを望んでおいでになるかどうかと  
54。」

何よりイワン・フォードロキッチを激昂させたのは、スメルチャコフがどこまでも固執してゐるあの  
圖々しい頑固な語であつた。

「ぢや、親爺を殺したのは貴様なんだな！」、と彼はだしぬけに呷鳴りつけた。

スメルチャコフは蔑むやうにやりと笑つた。

「わたしが殺したのでないことは、あなたも十分に御承知の筈でせう。わたしはまた、賢い人間が二度とこんなことを話す必要はないと思つてゐましたが。」

「だが、なぜ、貴様はその時おれにそんな疑ひをかけたんだ？」

「あなたも御承知の通り、ただもう怖ろしいが山々で疑つたのでございます。それといふのも、あの頃わたしはただ怖ろしさにびくびくしながら、誰彼なしに疑ぐるやうな氣持になつてゐたからでございますよ。そんな譯で、あなたを試してみる氣にもなつたのでございますよ。なぜと申して、若しもあなたまでが兄さんと同じやうなことを望んでゐらつしやるとすれば、もう萬事が片づいたも同然で、わたしなどは序でに、蠅か何かのやうに殺されてしまふに違ひないと思つたからでございますよ。」

「おい、一週間まへには貴様はそんなことを言はなかつたぞ。」

「病院でお話をしてゐた時も、實はやはりそのつもりだつたのでございます。ただ餘計なことを言はなくても、お分かりになると思つただけですよ。あなたのやうなこの上なく伶俐なお方は、あまり眞正面からの話はお好きでなからうと存じましてね。」

「ちえつ、あんなことを言やがる！ だが、さあ返答をしろ、返答を、おれは飽くまで訊ねるぞ。一體どうしてこのおれがあつた時、貴様のその卑劣な心に、おれとしてあるまじき、そんな下等な疑ひを起こさせたんだ？」

「人殺しなんてことは、到底あなた御自身に出来る藝當ではありませんし、又そんなことをなさる氣もありませんらなかつたでせう。けれど誰かほかの者が殺つてくれたらなあ、とぐらゐはお思ひになつた筈ですよ。」

「よくもぬけぬけそんなことが言へたものだ！ どうしておれがそんなことを望むのだ、どういふ譯があつておれがそんなことを望むといふんだ？」

「どういふ譯があつてですつて？ それぢや遺産のことはどうだと仰しやるのでございますか？」と、スメルチャコフは毒々しい復讐的な語調で答へた、「だつて、もしお父様がお亡くなりになれば、あなたが御兄弟は少くとも四萬留といふ金がめいめいに分けて貰へる筈でございました。ひよつとするとそれ以上になるかも知れません。若しもフォードル・パーヴロキッチがあつた御婦人と、つまりアグラフエーナ・アレクサンドロヴナと結婚なすつて御覽なさい、あの女は結婚式が済み次第、きつと全財産をそつくり自分の名義に書き替へてしまひましたよ。あの女もなかなか抜け目のない人ですからね。さう

なつた曉には、あなた方御兄弟三人は、お父様が亡くなられても、二留の金も手に入ることではありま  
せんよ。しかも、その結婚は難かしいことだつたでございませうか？ ほんとに危機一髪といふ瀬戸際  
だつたのですよ。あの女がちよつと小指を一本うごかしさへすれば、お父様はすぐにも舌を出して、あ  
の女ひとの後から、教會へ駆けつけるといふ場合だつたでございませう。

イワン・フォードロキッチは、苦しさを忍んで自分を抑へた。

「ようし、」と、やがて彼は言つた、「どうだ、おれはこの通り、跳び上がりもしなければ、お前を擲  
りつけも、打ち殺しもしなかつたらう。さあ、それからどうしたと言ふんだ。お前に言はせると、おれ  
は兄のドミトリイにその役廻りを押しつけて、それを當てにしてゐたと言ふんだな？」

「何でそれを當てになさらないでゐられませう、さうでせう、あの方が若しもお父さまを殺して御覽  
なさい。あの方は貴族の権利も、地位も、財産もみんな失つて、流刑になつてしまふでせう。さうすれ  
ばお父様の亡き後で、あの人の取り分があなたとアレクセイ・フォードロキッチとに山分けといふこと  
になるでせう。つまりあなた方二人は四萬留づつの代りに六萬留づつ手に入るようになるのですから  
ね。ですから、あなたがあの時ドミトリイ・フォードロキッチを當てになすつたことは間違ひのないこ  
とでございませうよ！」

「まあ、おれは我慢して聽いてやらう！ だが聽け、悪魔め、おれが若しあの時、誰かを當てにした  
とすれば、無論それは貴様で、ドミトリイではないのだ。誓つて言ふが、おれは貴様が何か卑劣なこ  
とを仕出かしはしないかといふ氣がしてゐたんだ……あの時の……自分の氣持をおれはちゃんと覺えてゐ

るぞ！」

「わたしもあの時、ちよつとそんな氣がしたのです。あなたはこのわたしをやはり當てにしておいで  
になるやうだ、とね、」と、スマルチャコフは嘲けるやうにやりとして、「ですから、それで一層はつ  
きりとあの時あなたはわたしに御自分の正體を見せておしまひになつた譯ですよ。と申しますのは、若  
しもわたしが何か仕出かしさうだと感じていらつしやりながら、御出發になつたのだとすれば、つま  
りお前は親爺を殺してもいい、おれは決して邪魔はしないぞ、と、おつしやつたも同然ぢやありませ  
んか。」

「悪魔め！ 貴様はさう解釋してゐたのだな！」

「これもみんな、あのチェルマーシニヤが原因でございませうよ、考へても御覽なさいまし！ あなた  
は、モスクワへおいでになるおつもりで、お父様がどんなにチェルマーシニヤへ行けとお頼みになつて  
も、それをお撥ねつけなすつたのでございませう！ それが、わたし風情のつまらない一言で直ぐに御  
承知なすつたではありませんか！ あなたがあの時チェルマーシニヤ行きを御承知なさるなんて、なん  
の必要があつたのでございませうか？ わたしの一言で、何の理由もなくモスクワ行きを中止して、チェ  
ルマーシニヤへお出かけになつたとしますれば、何かわたしに期待しておいでになつたといふことにな  
るでございませんか。」

「いや違ふ、斷じてさうぢやない！」と、イワンはぎりぎり齒ぎしりをしながら唸つた。

「どうしてこれがさうぢやないんですね？ 本来なら反對に、あなたはお父様の息子として、あの時

あんなことを申したわたしを第一に警察へ突き出しなされるか……少くとも、その場で横つ面の一つも張り飛ばすかなさうなものぢやありませんか。ところが、どうでせう、あなたはこれつばかしも腹をお立てになるどころか、却つてわたしのつまらない言葉を、そのまま直ぐ實行に移して御出發になつたではありませんか、それはほんとに不合理な話でございますよ、なぜつて、あなたはお父様の命を護るために、お残りになるのが至當だつたのですからね……わたしはどうしても、さう解釋しない譯には参りませんよ！」

イワンは苦い顔をして、兩の拳をぶるぶる慄はせながら膝を突いて、じつと坐つてゐた。

「さうだ、貴様の横つ面を擲り飛ばさなかつたのは残念だよ、」彼は苦笑した、「あの場合、貴様を警察へ曳つばつて行く譯には行かなかつたんだ。誰がおれの言ふことを信用するものか、それにおれはどんな證據も見せることが出来ないぢやないか、だが横つ面を擲ることは禁じられてゐるけれど、お前の醜面を粥のやうにしてくれるところだつたのに。」

スメルチャコフは小氣味よげに相手の顔を眺めてゐた。

「世の中の當り前な場合では、」と、彼は、いつかフォードル・パーヴロキッチの食卓の傍でグリゴリイ・ワシリーエキッチと信仰論を闘はして相手をからかつた、あの同じ如何にも自足した教訓的な調子で始めたのであつた、「世の中の當り前な場合では、面打は實際いま法律で禁められてをりまして、誰も擲ることをやめました、世の中の特別な場合には、わが國ばかりではなく、全世界いたるところ、殊に最も完全な佛蘭西共和國でさへも、全くアダムとイヴの時代と同様に、依然として擲つてゐます。」

これはいつになつても決してやむものではありません。それなのに、あなたはあんな特別な場合に於てさへ、思ひ切つておやりになれなかつたのですね。」

「何かい、お前は佛蘭西語を習つてゐるのかい？」と、イワンは卓の上に載せてあつた手帖を顎でしやくつた。

「わたしにしたつて佛蘭西語くらゐ習つて、自分の教養を増してはならないつて法はありませんからね、どんなことでわたしだつて歐羅巴のああした幸福な國々へ、いつか行く機會がないにも限りませんからね。」

「こら、悪黨、」イワンは眼を光らせながら、全身をわなわなと慄はせた、「おれは貴様の言ひ掛りなんか怖れてやしないぞ、だから何でも貴様の言ひたい放題のことを供述するがいい、今おれが貴様を擲り殺さないのは、この犯罪について貴様に疑ひをかけてゐればこそだ。貴様を法廷へ突き出してやらうと思へばこそだ。今におれは貴様の面皮をひん剝いてくれるぞ。」

「ですけれど、わたしの考へでは、まあ、黙つておいでになつた方がお徳ですよ。だつて何の罪咎もないわたしに、いくら濡衣を被せようとなすつても、駄目なことですからね、それに誰があなたを信用するものですか？ それでも、あなたがどうしても仰しやるおつもりなら、わたしも洗ひざらひ言つてしまひますよ。なあに、わたしだつて自分を庇つて悪い筈がありませんからね！」

「おれが今貴様を怖れるとでも思ふのかい？」

「今わたしがあなたに申したことは、たとへ法廷では取りあげられなくつても、世間が本當にします

「からね、さうなつたらあなたも恥をお搔きになりますよ。」

「それはやつぱり、『賢い人とはちよつと話しても面白い』つていふ奴なのかい、え？」と、イワンは齒ぎしりをした。

「まったく圖星でございますよ。ですから賢い人におんななさいまし。」

イワン・フォードロキッチはたち上つて、憤怒のために身を慄はせながら外套を着ると、もはやスメルチャコフには一言の返事もしなければ、その方を、見向かうともしないで、さつさと小屋を出て行つた。ひやひやした夜氣が彼の氣分を爽やかにした。空には皎々たる月が懸つてゐた。思想と感覺との怖ろしい夢魔が彼の心の中で煮えたぎつてゐた。「これからすぐに行つてスメルチャコフを告訴してやらうか？ だが、何を告訴するんだ。どの道あいつには罪はないんだ。却つて反對に、あいつの方がおれを告訴するだらう。實際、おれはあの時、何のためにチエルマーシニヤへ出かけたんだらう？ 何のためだ？ 何のためだ？」とイワン・フォードロキッチは自から問ふた。「さうだ、無論おれは何事かを豫期してゐたのだ。あいつの言ふ通りだ……」そして、またしても彼の頭に浮んだのは、最後の夜、父の家の階段口で立ち聴きをしたことであつた。だが今はそれを思ひ出すと、何ともいへぬ苦痛を覺えたので、まるで何かに突き刺されたやうに、その場に立ちどまつたほどであつた。「さうだ、おれはあの時あれを期待してゐたんだ、本當にさうだおれは望んでたんだ、本當におれは親爺の殺されることを望んでゐたのだ！ おれは殺人を望んだのだらうか？ 望んだのだらうか？ スメルチャコフを殺さなければならぬ！……いま若しスメルチャコフを殺すことが出来ないやうなら、おれは生きてる價値はな

いのだ！……」イワン・フォードロキッチは家へ歸らないで、すぐその足でカテリーナ・イワーノヴナのところへ行つて、その様子で彼女を驚ろかした。彼はまるで狂人のやうであつた、彼はスメルチャコフとの會話を細大漏らさず彼女に打ち明けた。そして、どんなにカテリーナ・イワーノヴナが説き諭しても、氣分を落ちつけることが出来ないで、やたらに部屋の中を歩き廻りながら、變なことをとぎれとぎれに喋り散らした。やうやく椅子に腰をおろすと、彼は卓に肱を突いて、兩手で頭を支へながら、奇怪な文句を口走るのだつた。

「若しも下手人がドミトリイでなくて、スメルチャコフだとすると、僕もあいつと連帶の罪があるのです。だつて、僕があいつを唆かしたのですからね。いや、果たして僕があいつを唆かしたかどうか——それはどうだか分かりません。けれど、若しも下手人があいつで、ドミトリイでないとすれば、むしろ僕も人殺しだ。」

これを聞くと、カテリーナ・イワーノヴナは黙つて席を立つた。彼女は自分の書きもの卓のところへ行くと、その上にあつた手箱をあけて、中から一葉の紙片を取り出して、イワンの前に置いた。それが例の證據物件で、後でイワン・フォードロキッチがアリオシヤに、兄ドミトリイが父を殺した『數學的證據』があると言つた書類である。それはカテリーナ・イワーノヴナの家でグルーシエンカが彼女を侮辱した例の悶著の後で、修道院へ歸るアリオシヤと、ミーチャが野原で會つたその晩、ミーチャが酔つ拂つて、カテリーナ・イワーノヴナに書き送つた手紙であつた。その時、ミーチャはアリオシヤと別れると、グルーシエンカの家へ飛んで行つた。グルーシエンカに會つたかどうかは分からないが

とにかく彼はその晩、料理屋の『帝都』へ行つて、例の通りさかんに飲んだ。そこで酔ひに乗じてペンを取り寄せると彼は自分にとつて重大な文書を書きあげたのである。それは狂氣じみて辻褄の合はぬ支離滅裂なもので、どう見ても『酔つばらひ』の手紙であつた。それは恰かも酔つばらつた男がわが家へ歸つて、妻や家族の者に向つておれば今侮辱された、おれを侮辱した奴はしやうのない悪黨だが、おれはその反對に素晴らしい立派な人間だ、おれはその悪黨を懲らしてやるのだと、涙を流しながら、拳を固めて卓を敲きながら、取り留めもないことをだらだらと、躍起になつて喋り立てる、ああいつた繰り言のやうなものであつた。彼が酒場で貰つた手紙の用紙は、極く安つぱい普通の書翰紙の汚れた切れつぱしで、その裏には何か計算のやうなものが書いてあつた。酔漢の繰言であるから、たしかに紙面が足なりかつた。で、ミーチャは紙の縁まで一杯に書いたばかりか、最後の幾行かは、すでに書いた上へ筋かひに書きなぐられてあつた。その手紙はかういつた意味のものであつた、『宿命的なカーチャよ！

あす僕は金を手に入れて、お前の三千留を返すよ。偉大なる憤りの女よ、さようなら、しかし僕の戀人よ、さようなら！ もう最後にしようぢやないか！ あす僕はあらゆる人に頼んで金を手に入れる。もし手に入らなければ、誓つて、僕は親爺の家へ出かけて、その頭を打ち割つて枕の下にある金を取るのだ、ただ、イワンが立つてからでなくちや駄目だ。僕は懲役にやられても、三千留の金はお返しする。だからお前も許してくれ。僕は地面に額をすりつけてお辭儀をする。だつて、僕はお前に對して卑劣漢だつたからだ。勘忍してくれ。いや、いつそ許してくれるな。その方がお前にも僕にも氣持が樂だ！ お前の愛よりも、懲役の方がましだ。僕はほかの女を愛してゐるんだから、お前はその女を今日こそよく

知つたらう。だから、どうしてお前に許すことが出來よう？ 僕の泥棒を殺すのだ！ 僕は誰をも忘れるために東へ行く。『あの女』もやはり忘れるのだ。僕を苦しめるのはお前ばかりではなくて、あの女もさうなんだから。さやうなら！

『二伸、僕は呪咀を書いてゐるが、しかしお前を尊敬してゐるのだ！ 僕は自分の胸の聲に耳を傾けてゐる。一本の弦が残つて鳴つてゐる。いつそ心臓を眞二つに斷ち割つた方がいい。僕は、自分を殺さう。だが、やはり先づあの犬から殺してやる、あいつから三千ひつたくつて、お前に投げつけてやるのだ。僕はお前に對して悪黨であつても、泥棒ぢやないぞ。三千留を待つてゐてくれ。犬の蒲團の下にあるのだ、薔薇いろのリボン。僕は泥棒ぢやない。僕の泥棒を殺すのだ。カーチャ、輕蔑の眼で見てくれるな。ドミトリイは泥棒ではない、人殺しだ！ 毅然として立ち、お前の傲慢を忍ばないために親爺を殺し自分を滅ぼしたのだ。またお前を愛さないためにも。』

『三伸。お前の足に接吻する。さやうなら！』

『四伸。カーチャ、誰かが僕に金をくれるやうに神に祈つてくれ。さうしたら僕は血を流さないでも済む。誰もくれなければ血を流さなければならん！ 僕を殺してくれ！』

奴隸にて敵なる デ・カラマゾフ。』

イワンはこの『證據文書』を読みをはると、確信を持つて立ち上つた。して見れば下手人は兄で、スメルチャコフではない。スメルチャコフでなければ、従つて彼イワンでもなかつたのだ。この手紙は忽ち彼の眼に、數學的な意義を有するものとなつてきた。もはやミーチャの罪に對する些の疑ひを容れる

餘地もなかつた。序でに斷つておくが、ミーチャがスメルチャコフと共謀して殺人を敢行したのかも知れないなどといふ疑念は全然イワンの心に浮かばなかつた。また、さういふことは事實とも符合しなかつた。イワンはすつかり安堵の胸を撫でおろした。彼は翌朝になると、スメルチャコフとその嘲弄を思ひ出して、ただ輕侮の念を覚えるだけであつた。數日の後には、スメルチャコフに疑はれたことぐらゐを、どうしてあんなに苦しめたのかと不思議に思ふほどであつた。彼はスメルチャコフを蔑視して、あのことを忘れてしまはうと心に定めた。かうして一ヶ月たつた。もはや彼は誰にもスメルチャコフのことを訊ねようとしなかつたが、たまたま相手が重い病ひにかかつて、正氣を失つたといふことを、二度ばかりちらと耳にした。『何れ、發狂して死ぬでせう、』と、或る日、若い醫師のワルキンスキイが言つた、イワンはそれを記憶に疊んだ。その月の終りの週には、イワン自身も體の調子がひどく悪いことを感じ始めてゐた。公判に先立つて、カテリーナ・イワノヴナがモスクワから招聘した醫師にも、彼は診察して貰ひに行つた。彼とカテリーナ・イワノヴナとの關係が、極度に緊張したのはその頃であつた。二人は謂はばお互ひに愛し合つてゐる仇敵同志のやうなものであつた。時々ほんの束の間ではあつたが、強い愛情をもつて、カテリーナ・イワノヴナがミーチャへ歸つて行つたことは、イワンを全く狂的にまで激昂させた。不思議なことには、作者が前に述べたカテリーナ・イワノヴナの許に於ける最後の事件まで、つまり、アリョーシャがミーチャに面會した歸りに彼女の家へ立ち寄つた時までの、一ヶ月の間ちゆう、イワンは一度も、彼女の口から、ミーチャの犯罪を疑ふやうな口吻を聞いたことがなかつたのである。そのくせ彼女は幾度もミーチャに『歸つて』行つては、イワンの烈しい怨恨を呼び

醒したのであつた。それに今一つ重要なことは、彼はミーチャに對する憎惡が日一日と募つてゆくのを感しながらも、その憎惡がミーチャの『復歸』のためではなくて『彼が父を殺した』ためであることを理解してゐた點である。彼はそのことを十二分に感じてゐると共に意識してもゐた。それにも拘はらず、彼は公判の十日前にミーチャのところへ出かけて行つて、兄に逃亡の計畫を持ち掛けたのである。この計畫は明らかに久しい以前から熟慮を重ねたものらしかつた。そこには、彼をしてかうした行動に出でしめた重大な原因の他に、彼の内心に潜んでゐた或る癒し難い傷痕があつたのである。それは、兄に罪を被せた方がイワンにとつて有利である、さうすれば父親の遺産をアリョーシャと二人で四萬留どころか、六萬留づつ分けることが出来るからと、スメルチャコフがちらと漏らした一言のために生じたものであつた。彼はミーチャを脱走させるための費用として、自分から三萬留を犠牲に供する決心をした。その時ミーチャのところから歸つて来る途中で、彼は非常な悲哀と苦悶を感じた。自分がミーチャの逃亡を望むのは、ただ三萬留を犠牲に供して、心の傷を癒やすためばかりでなく、まだ何か他に理由があるやうな氣がしたのである。『おれが精神的には同じやうな人殺しだからではあるまいか?』と彼は自ら問うて見た。何か茫漠としてはゐたが、或る焼けつくやうな何物かが彼の心を突き刺した。殊に、この一ヶ月のあひだ、彼の自尊心は非常な苦痛を覚えてゐた。だが、そのことは後廻しにしよう……イワン・フョードロキツチはアリョーシャと話をしてから、自分の家へ歸つて呼鈴に手をかけた時、不意にスメルチャコフのところへ行かうと決心したが、それは咄嗟に彼の胸に湧き上つた、一種特別な憤怒の衝動に驅られたためであつた。彼は先刻カテリーナ・イワノヴナがアリョーシャのゐる前で彼に向つ

て、『それはあんたよ、あんたよ、あの人が（即ちミーチャが）下手人だつてことをわたしに言ひ張つたのは、ただあんた一人だけよ！』と喚いたことを、突然、思ひ浮べたのである。それを思ひ出すと同時にイワンは愕然として立ち竦んだほどであつた。彼は未だ曾て一度もミーチャが人殺しだなどといふことを、彼女に言ひ張つたことはなかつた。それどころか、スメルヂャコフのところから戻つて来た時など、彼女の前で自分自身を疑つたほどであつた。寧ろ『彼女』こそその時、例の『證據書類』を持ち出して、ミーチャの犯罪を彼の前に立證したのではないか。それなのに、不意に今になつて彼女は『わたし自身でスメルヂャコフのところへ行つて来たのよ！』などと叫んでゐる。一體いつ行つたのだらう？ イワンは少しもそのことを知らなかつた。して見れば、彼女はミーチャの罪を十二分に信じてはゐないのだ！ ではスメルヂャコフは彼女に何と話したのだらう？ 彼は何を、一たいどんなことを彼女に話したのだらう？ 彼の心は怖ろしい憤りに燃え立つた。彼女のさうした言葉を、どうして三十分前に平氣で聞き通して、喚き出さずにおられたのだらう？ 自分ながら譯がわからなかつた。彼は呼鈴を手ばなすと、スメルヂャコフの家をさして急ぎ出した。『今度こそおれは、あいつを殺してしまふかも知れないぞ、』と彼はみちみち考へた。

## VII

## スメルヂャコフとの三度目の最後の會見

道程の半分も行つたかと思ふ頃、その日の早朝と同じやうな厳しい空つ風が吹き起こつて、細かいさらさらした紛雪がしきりに降り始めた。雪は地面へ落ちて、積る暇もなく風に捲き上げられた。かくて間もなく本物の吹雪になつてしまつた。この町でも、スメルヂャコフの住んでゐる邊では、街燈といふものが殆んどなかつた。イワン・フォードロキツチは暗闇の中を吹雪にも氣づかず、殆んど本能的に路を見分けながら辿つて行つた。頭が割れるやうに痛み、顛顛がづきづき疼いた。手が痙攣を起こして引きつるのを彼は感じた。マリヤ・コンドラーチエヴナの家の近くまで来た時、イワン・フォードロキツチは突然一人の酔つ拂ひの小柄な百姓が、つぎはぎだけの外套を着て、よろよろと千鳥足でやつて来るのに出會つた。その百姓はぶつぶつ言つたり、罵つたりしてゐるかと思ふと、今度は不意に嘔れた酔ひ拂ひ聲で歌ひだすのであつた。

『やあれ ワンカめはピーテルへ行つた、なんの、あんな奴待つものか！』

しかし、彼はいつもこの二の句で歌を打ち切つて、また誰かを罵り始めるかと思ふと、また出しぬけに

同じ歌をうたひ出すのであつた。イワン・フォードロキッチはまるでそんな相手のことなど考へもしない先きから、その男に對して、烈しい憎惡を抱いてゐたが、やがてそれをはつきり意識した。するといきなり、その百姓に拳固を喰はせてやりたくて堪らなくなつた。ちやうどその瞬間に、二人はすれ違つたが、その途端に百姓はひどくよろめくと同時に、力いつぱいイワンに突き當つた。こちらは荒々しくそれを突き返した。百姓は後ろへ突き飛ばされると、そのまま凍つた雪の上へ丸太のやうにぶつ倒れたが、ただ一聲、『おお!』と病的に唸つただけで、それつきり黙つてしまつた。イワンが歩み寄つて見ると、彼は仰向けになつたまま、身動きもせず、人事不省に陥つて倒れてゐた。『凍えてしまふだらう!』さう考へただけで、イワンはスメルチャコフの家をさして、再び歩き出した。

彼が玄關へはいつたばかりのところへ、蠟燭を持つたマリヤ・コンドライチエヴナが駆け出して、扉を開けた。そしてパーゼル・フォードロキッチ（即ちスメルチャコフ）は大變具合が悪くて、別に寝こんでゐるといふ譯ではないが、殆んど正氣を失つた様子で、お茶の支度を言ひつけておきながら、それを飲まうともしない、といふやうなことを彼に囁いた。

「でも、暴れでもするのかね?」と、イワン・フォードロキッチはぞんざいに訊ねた。

「いいえ、そんなことはございません、極くおとなしいんですが、ただ餘り長いお話はお止し下さいませ……」とマリヤ・コンドライチエヴナが頼んだ。

イワン・フォードロキッチは扉を開けて部屋の中へはいつた。最初の時と同じやうに、部屋はうんと暖めてあつたが、室内の様子は多少變つてゐた。壁ぎはにあつたベンチが一脚とりのけられて、その跡

へマホガニイ色に塗つた、大きな古い皮張りの長椅子が据えてあつた。その上に寢床が敷かれて、こざつぱりした白い枕が載せてあつた。スメルチャコフはやはり同じ部屋着を着て、その寢床に腰かけてゐた。卓が長椅子の前へ持ち出してあつたので、部屋の中はひどく狭苦しくなつてゐた。卓の上には黄いろい表紙の厚い本が一冊のつかつてゐたが、スメルチャコフはそれを讀んでゐるでもなく、ただ坐つたきり、なんにもしてゐない様子であつた。彼は無言のまま徐ろに視線をあげてイワン・フォードロキッチを迎へたが、見たところ、彼の來訪を少しも驚ろいてゐないらしかつた。彼の顔はすっかり面變りがして、ひどく瘦せて黄いろくなつてゐた。眼は陥ち窪み、下脛が蒼くなつてゐた。

「ではお前ほんとに病氣なのかい?」イワン・フォードロキッチは立ちどまつた。「おれは長くは邪魔をしないから、外套も脱がないよ。どこへ掛けさせて貰はうかな?」

彼は卓の向ふ側へ廻つて、椅子を引き寄せて腰をおろした。

「なぜ黙つておれを見てゐるんだい? おれはただ一つだけ訊きたいことがあつて來たのだ。誓つて、おれはお前の返事を聞かないうちは、決して歸らないよ。お前のところへあのカテリーナ・イワーノヴナが來ただらう!」

スメルチャコフはやはり平靜にイワンを眺めながら、長い間じつと押し黙つてゐたが、急に片手を一振りして、顔を外方へ向けた。

「一體どうしたんだ?」とイワンが叫んだ。

「どうもしません。」



「どうもしない筈はない！」

「さう、参りましたよ。でも、どうだつていいぢやありませんか。構はないで下さい。」

「いや、構はずにゐられないのだ！ いつ来たのか、言へ！」

「それに、わたしはあの女のことなんか憶えてもゐませんよ、」と、スメルチャコフは輕蔑するやうに笑つたが、急にまたイワンの方へ顔を向けて、妙に狂的な憎惡の眼で睨みつけた。それは一ヶ月前に會つた時イワンを見据えたあの同じ眼つきであつた。

「あなたもどうやら御病氣のやうですね。まあ、げつそりとお瘦せになつて、まるでお顔の色つたらありませんよ。」と彼はイワンに言つた。

「おれの體のことなんか心配してくれなくてもいいんだ、おれの訊いてゐることに返事をしろ。」

「それに何だつてあなたの眼はさう黄いろくなつたのでせう、白眼がまつ黄ぢやありませんか、ひどく御心配なことでもおありですかね？」

彼は蔑むやうににやりとしたが、不意に聲を立てて笑ひした。

「おい、いいか、おれはお前の返事を聞かないうちは決して歸りやしないぞ！」と、イワンは怖ろしく苛立つて叫んだ。

「何だつてあなたはさう執拗くなさるのです？ どうしてそんなにわたしを窘めなさるのです？」と、スメルチャコフはさも苦しさうに言つた。

「ええい、畜生つ！ おれは貴様なんかには用はないんだ。訊ねたことさへ答へれあ、直ぐ歸るのだ。」

「何もお答へすることはありませんよ！」さう言つて、スメルチャコフはまた眼を伏せた。

「いや、おれはきつと貴様に返事をさせてやるぞ！」

「どうしてあなたは、そんなに氣に懸るのです？」と、スメルチャコフは急にイワンを見据ゑたが、その顔には輕蔑の色といふよりは、もはや一種の嫌惡の情さへ現はしてゐた。「あす公判が始まるからなんですか？ それならあなたに別條はないでせう、大丈夫ですよ！ お家へ歸つて安心してお寝みなさい。少しも御懸念なさることはありませんよ。」

「さつぱり分らんことを言ふねえ……どうしておれが明日を怖れるんだ？」と、イワンは吃驚して言つた。すると、不意に彼の魂は、ぞつと冷たいものに撫でられたやうに感じた。スメルチャコフはじろじろと彼を眺めまはしてゐた。

「御得心が、行き、ませんかね？」と、彼は詰るやうに言葉を切りながら言つた、「賢いお方が御自分から、そんな茶番をやるなんて、本當にも好きぢやありませんか！」

イワンは無言のまま相手を睨めた。イワンはかういふ語調を豫期しなかつた。それは、實に傲慢不遜なものであつた。しかも以前の下男が、いま彼にかうした口のきき方をするとは、實に容易ならぬことであつた。この前の會見の時ですら、まだこんなことはなかつた。

「何にも心配なさることはありません、さう申してゐるぢやありませんか、わたしはあなたのこと、何にも喋りはいたしませんからね。一つも證據がありませんからね、おや、お手が慄へてゐますね、なぜ指がそんなにぶるぶる慄へてゐるんです？ さあ、家へお歸りなさい。下手人はあなたぢやあり

ません。」

イワンはぎよつとした。彼はアリオーシャのことを思ひ出した。

「おれでないことは分かつてゐる……」と彼は呟いた。

「お分か、り、ですかね？」と、またスメルチャコフは言葉尻を捕へた。

イワンは飛び上つて、スメルチャコフの肩を掴んだ。

「すつかり言つちまへ、毒蛇め！ すつかり言つちまへ！」

スメルチャコフはびくともしなかつた。彼はただ狂的な憎悪をこめた眼で、イワンをぢつと食ひ入るやうに睨みつけただけであつた。

「ぢや、申しますがね、下手人はあなたなんですよ、」と彼は憎々しげにイワンに囁いた。

イワンは恰かも何か思ひ當りでもしたもののやうに、どつかと椅子に腰を落した。そして彼は敬意を籠めてにやりと笑つた。

「貴様はやはりあの時のことを言つてるのか？ この前會つた時と同じことを？」

「さうです、この前わたしのところへおいでになつた時も、あなたはすつかりお飲みこみなすつたぢやありませんか、だから今もお飲みこみになれる筈でございますよ。」

「お前が氣違ひだつてことだけは、おれにも飲みこめるよ。」

「よくもまあ退屈しないことですね！ かうして面と向かひ合つて、お互ひに瞞しあつたり、狂言をやつたりするなんて、何の役にも立たないぢやありませんか？ それともあなたは、わたしの眼の前

で、わたし一人に罪をなすりつけようとなさるのですか？ 殺したのはあなたです、あなたが主犯です。わたしはただあなたの手先になつただけです。あなたの忠實な僕リチャルドだつた譯です。わたしはあなたの命令に従つてあれをやつつけたんですからね。」

「やつつけた？ それぢや、貴様が殺したんだな？」イワンは悪寒を覺えた。

まるで脳震盪でも起こしたやうな氣がして、彼は悪寒のためにぶるぶる慄へだした。その時になつて、スメルチャコフもびつくりしたやうに彼を眺めた。恐らく、イワンの愕ろきが、あまりにも眞剣なものに打たれたものであらう。

「ほんとに、あなたはなんにも御存じなかつたんですか？」と、皮肉な笑ひをたたへて、イワンの顔を見つめながら、スメルチャコフが胡散くさげに呟やいた。

イワンは尙も彼を見つめてゐたが、彼の舌はまるで痺れたやうになつて、口をきくことさへも出来なかつた。

ああ、ワンカはピーテルへ、たうとう行つてしまつただ。

わしはあんな奴、待ちませぬ！

さういふ歌が突然、彼の頭の中で鳴り響いた。

「なあ、おい、おれにはそこに坐つてゐるお前が、夢ではないか、幻ではないかと思へて、怖ろしいのだ。」と彼は呟やいた。

「ここには幻なんてものは何にもゐやしませんよ。わたしたち二人、それからもう一人の者がゐるほ

かにはね。確かにその第三者が今ここに、わたしたち二人の間にをりますぜ。」

「それは誰だ？ 誰があるんだ？ 第三者つて何者だ？」と、ぐるりを見廻したり、誰かゐるのではないかと、あわただしく隅々を窺いたりしながらイワンはびつくりして口走つた。

「第三者といふのは、神様のことです。天帝です、その天帝が今われわれの傍にましますのです、しかし、お探しになつても駄目です、あなたには見つかかりつこありませんよ。」

「お前が殺したと言ふのは嘘だ！」と、イワンは狂氣のやうに喚いた、「貴様は氣が狂つたのか、それともこの前の時みたいにおれをからかつてゐるのだな！」

スメルチャコフは先刻と同様に何ら臆することなく、ちつとイワンを物珍らしさうに見まもつてゐた。彼はまだどうしても自らの疑ひの念を追ひのけることが出来ずに、やはりイワンが、『何もかも知つてゐる』くせに、ただ『彼ひとり罪をなすりつけようとしてゐる』のだといふ氣ばかりするのであつた。

「ちよつと待つて下さい、」と、やがて彼は弱々しい聲でいふと、不意に、テーブルの下から自分の左足を持ち上げて、ズボンをたくし上げ始めた。その足は長い白の靴下につつまれて、スリッパを穿いてゐた。彼はゆつくりと靴下止めをはずすと、靴下の中へ指を深く突つこんだ。イワン・フォードロキツチはそれを眺めてゐたが、急に驚愕のあまり、がたがたと慄へだした。

「氣ちがひ！」と喚いたかと思ふと、彼はぱつと跳ね上がると共に、後ろへ身を退いて、背中を壁に叩きつけたまま、體を糸のやうに伸ばして、びつたり壁にくつついてしまつた。彼は物狂ほしい恐怖に

襲はれながら、スメルチャコフを賈めた。相手は彼の恐愕にはまるで無頓着で、相變らず靴下の中を捜りながら、頻りに何かを指先きで摘んで曳つぱり出さうとしてゐるやうであつた。たうとう探り當てて曳き出し始めた。イワン・フォードロキツチはそれを、何かの書類か、または紙束だと見てとつた。スメルチャコフはそれを曳つぱり出すと、卓の上に載せた。

「さあ、これですよ！」と彼は靜かに言つた。

「何だ？」イワンはぶるぶる慄へながら答へた。

「どうぞ、御覽下さい、」スメルチャコフはやはり靜かに言つた。

イワンは卓子の子へ一足あゆみ寄ると、その紙束を取り上げて、それをほどかうとしたが、何か氣味の悪い、怖ろしい蛇にでも觸つたかのやうに、急に引つこめた。

「あなたの指はまだ慄へてゐますね、ぶるぶる痙攣してゐるぢやありませんか、」さう言ふとスメルチャコフは自分で徐ろに紙束を解いた。上包みのなかからは虹色の百留紙幣の束が三つ出て來た。

「全部ここにあります。みんなで三千留です、勘定するまでもありませんよ。さあ、お受け取り下さい、」と、彼は金を顫でしやくりながら、イワンにすすめた。イワンは椅子に腰を落した、彼の顔は手巾のやうに蒼ざめた。

「びつくりさせましたぢやないか……その靴下で……」と、彼は何か變に薄笑ひを浮かべながら言つた。

「ほんとうですか、ほんとうにあなたは今まで御存じなかつたのですか？」と、スメルチャコフは重ねて訊いた。

「うん、知らなかつた。おれは、ドミトリイだとばかり思つてゐたんだ。兄さん！ 兄さん、ああ！」  
彼は急に両手で自分の頭を抱へた、「なあ、おい、お前は一人で殺したのか？ 兄貴の手を借りずにか、それとも一緒にやつたのか？」

「ただあなたと御一緒にやつただけです。あなたと御一緒に殺したのです。ドミトリイ・フォードロキッチには何の罪もありません。」

「いいよ、いいよ、あれのことは後廻しにしてくれ。何だつておれはかう慄へるんだらう？……何だか口も碌々きけないんだ。」

「ずつとあの頃はお元氣でしたね、『どんなことをしても構はない、』とか仰しやつてたぢやありませんか、それなのに、今のその怖れ方はどうなすつたのです！」と、スメルヂャコフは怪訝さうに呟やいた、「レモナードでもお上がりになりませんか、今すぐ言ひつけませう。大へん氣分がすつきりいたしますよ。ところで、こいつを先づ隠して置かなくつちやあ。」

と言つて、彼は再び紙幣束を顎でしゃくつた。彼はレモナードの支度をして持つて来るやうに、マリヤ・コンドライチエヅナに言ひつけようと思つて、戸口へ行くために立ち上がらうとしたが、彼女に金を見られないやうに何か被せる物を捜さうとした、先づ手巾を曳つぱり出したがそれはまたしてもすつかり鼻汁に汚れてゐたので、イワンが入つて来た時に眼にとめた、例の卓子の上に一冊だけ載つてゐる黄ろい表紙の、厚い書物を取り上げて、それを金のうへへかぶせた。その書物の表題は、『我等が聖き神父イサク・シーリンの言葉』と書いてあつた。イワン・フォードロキッチは機械的にその表題

を讀みとつた。

「レモナードは欲しくないよ、」と彼は言つた、「おれのこととは後でいい、坐つて話してくれ、どんな風にしてやつたのか？ すつかり話してくれ……」

「外套をお脱ぎになつてはいかがです、すつかり蒸れてしまひますよ。」

イワン・フォードロキッチは今やつと氣がついたやうに外套を脱ぐと、椅子から立たないで、ベンチの上へ投げ出した。

「話してくれ、どうか話してくれ！」

彼はかなり落ちついて來たらしかつた。今こそスメルヂャコフが、『一切』を物語るものと信じて、ちつと待ち構へてゐた。

「どんな、風にやつたかと仰しやるんですか？」スメルヂャコフはほつと吐息をついた、「あなたのあのお言葉に従つて、最も自然な方法でやつつたのですよ……」

「おれの言葉なんて後廻しにしてくれ、」とイワンはまたしても遮つたが、全く己れを制御したらしく、もう前のやうに呟鳴つたりはしないで、言葉つきもしつかりしてゐた。「どういふ風にやつたのか、それを詳しく話してくれ、すつかり順序を追つて、何一つ言ひのこさずに、詳しく、何より第一に詳しく、頼むよ。」

「あなたがお發ちになると、わたしは穴倉へ落つこちました……」

「發作が起つてか、それとも眞似をしたのかい？」

「それあ、眞似をしたのに決まつてゐますよ、何もかも、すっかり芝居だつたのです。靜かに梯子を降りましてね、一番下まで行つてから、悠々と横になつたのです、横になつてから唸り出して、運び出されるまで腕いてゐたのです。」

「ちよつと！ では、それからずつと、病院でもやはり芝居をしてゐたのかい？」

「いいえ、そんなことはございません。翌くる朝になつて、病院へ連れて行かれる前に、本當の、とても激しい發作が起つたのでございます、もう長年あんなひどいのかかつたことがないくらゐ甚だしいやつだつたのです。二日の間といふものは、まるで覺えがありませんでした。」

「よし、よし、それから先きを話してくれ。」

「それからあの、わたしが病氣になると、きまつてマルファ・イグナトチエヴナがいつも夜どほし寢かしてくる、あの人たちの住ひの仕切壁の向うの寢床へ寢かされましたが、そのことはちやんと分かつてをりました。あの女はわたしが生れ落ちた時から、いつもわたしに親切にしてくれましたからね。夜分わたしは唸りました、尤も、低い聲でしたけど、そしてドミトリイ・フォードロキツチを今か今かと待ちかねてゐたのです。」

「待つてゐたつて？ お前のところへ来るのをか？」

「わたしのところへ何の用があるのですか？ 旦那の家へですよ、だつて、わたしはあの人がその夜のうちにやつて来るのを、少しも疑つてゐなかつたのです。と言ひますのは、あの人はわたしがゐなくて消息が少しも分らないから、ぜひ自分で邸へやつて来て、あの人のことだから易々と扉を乗り越えて

て中へはいり込んで、きつと何かなさるに相違ないと思ひました。」

「だが、萬一兄が來なかつたら？」

「そしたら、何事も起こらなかつたでせうよ。あの人が來なければ、わたしも思ひ切つたことはしやしませんからね。」

「よし、よし……もつと分かり易く話してくれ、急がずに、それに、何ひとつ言ひ落さないことが肝腎だよ！」

「わたしはあの人がフォードル・パーヴロキツチを殺すのを待つてゐたのです、……：……つきりさうなると思ひましたので、それには、ちやんとわたしが下拵へをしておいたんですからね、……：……その二三日前から、……：……第一、あの人は例の合圖を知つてゐます。それにあの人はその數日來、疑ひや憤りを次ぎと胸に疊んでゐたのですから、是非この合圖を利用して、邸へ忍び込まなければならなくなつてゐたんです。それは決して間違ひつこありません。そこで、わたしはあの人を待つてゐたのです。」

「待つてくれ、」とイワンが遮つた、「若し兄貴が殺したら、金を取つて逃げさうなものぢやないか。お前だつてさう考へた筈だろ？ さうなつた暁には、何が一體お前の手に入るんだ？ おれには分からないな。」

「ところが、金はあの人に決して見つかりつこないのです。金が蒲團の下にあるといふことは、ただわたしがさう言つて教へただけで、それは全く嘘つばちなんですもの。前には手箱の中へ入れてありましたが、わたしは人間として唯ひとりフォードル・パーヴロキツチから信用されてをりましたから、入

れ智慧をして、後には、その金のはいつてゐる封筒を、部屋の隅の聖像のうしろへ置き換へさせたんです。あすこなら、殊に急いで入つて来た時など、誰にも氣づかれる心配がありませんからね。そんな譯で、あれは、あの封筒は、且那の部屋の隅の、聖像の後ろにあつたんですよ。蒲團の下へ入れておくなんて、第一滑稽ですよ、せめて手箱の中へ入れて、錠でもおろして置かなくつちやあね。でもこの町では今みんなが、蒲團の下にあつたものと思ひ込んでゐるのです、馬鹿な考へ方ですよ。ところで、たとひドミトリイ・フョードロキッチがこの人殺しをやつたにしても、何ひとつ見つけることが出来ないか、それとも大抵の人殺しにあり勝ちなやうに、ちよつとした物音にもおぢけて、逃げ出してしまふか、ふん縛られるかに決まつてゐるのです。さうなつたら、わたしはいつでも、翌る日でも、いやその晩にでも、悠々と聖像のうしろからその金を持ち出して、罪はみんなドミトリイ・フョードロキッチになすりつけてしまふことが出来ますからね。わたしはいつもそれを見越してゐたのです。」

「だが、若しも兄貴がぶん殴つただけで殺さなかつた場合には、どうするのだ？」

「殺さなけたば、無論、わたしも、金を取る譯には参りませんから、見す見す無駄にしてしまつたことでせう。しかし、かういふ目算もありましたよ、つまり、あの人がただ殴りつけ、氣絶させたやうな場合にも、わたしはその金をぬすみ取つて、あとでフョードル・パーヴロキッチに向かつて、あなたをなぐつて金を取つたのは、ドミトリイ・フョードロキッチにきまつてゐますよと、告げ口をするのです。」

「待つてくれ、……何だか頭がこんぐらかつてしまつたよ。では、やつぱりドミトリイに殺させて、

お前は金だけ取つたつて譯かえ？」

「いいえ、あの人が殺したのぢやありません。なかに、それあ今でもわたしはあなたに向かつて、あの人が下手人だといふことは出来ませぬけれど、……しかし、今あなたの前で嘘を吐きたくないのです、だつて、……だつて、お見受けする通り、あなたが實際これまで、何もお分かりにならなかつたのだとしたところで、又はわたしに對して白を切つて、明白な自分の罪を、人になすりつけてゐらつしやるのではないにしろ、やつぱりあなたには全體として責任があるのですからね。さうでせう、あなたは殺人の行はれることをちやんと御存じで、しかもそれをわたしに委せておいて、御自分は何食はぬ顔をして、~~お~~發ちになつておしまひなすつたのですからね。だからわたしは、この事件の張本人はあなた一人で、わたしは自分で殺しはしたけれど、決して張本人ではないといふことを、今晚あなたの面前で證明しようと思ふんですよ。あなたこそ真正の下手人ですよ！」

「どうして、どうしておれが下手人だ？ 飛んでもない！」と、イワンはたうとう我慢がしきれないで、また自分のことは後廻しにしておくつもりだつたことも忘れて叫んだ、「それはやつぱりあのチェルマーシニコのことかい？ ぢやあ、たとひお前がおれのチェリマーシニヤ行きを同意の意味にとつたにしても、一體、何のために同意が必要だつたのだ？ さあ、お前は今それをどう説明するのだ？」

「あなたの御同意を確かめて置けば、あなたがお歸りになつても、紛失した三千留のことで騒ぎ立てなされることもあるまいし、またどうかしてわたしがドミトリイ・フョードロキッチの代りに、その筋から嫌疑を受けたり、ドミトリイ・フョードロキッチとぐるになつてゐたやうに思はれた場合に、あなた

が辯護して下さるに違ひないことが、ちやんと分かつてゐるからですよ、……それにあなたが遺産を手にお入れになれば、おそらくあなたは生涯わたしの勞に酬いて下さるでせうからね、なぜといつて、あの遺産を相續なさいましたのは、何といつても、わたしといふ者があつたお蔭ですよ。もしお父さんが、アグラフェーナ・アレクサンドロヴナと結婚なすつたとしたら、あなたは鏝一文お貰ひになることは出来なかつたでせうからね。」

「ああ！ ぢやお前はその後、一生涯、おれを苦しめるつもりだつたのだな！」イワンは齒ぎしりをした、「だが、あの時、おれがもしも出發しないで、お前を告訴した場合にはどうするんだ」

「でも、あの時、何を告訴なさることが出来たでせう？ わたしがチエルマーシニヤ行きをお勧めしたことをですか？ そんな馬鹿な話はありませんよ。それに、わたしたちが話し合つた後で、あなたがお發ちにならうと、おとまりにならうと、別に困ることはありませんよ。若しおとまりになれば、何事も起こらなかつたでせう。わたしはあなたがこの話にお進みにならないのだと知つて、何もしなかつたでせう。ですけれど、若しも、お發ちになれば、それはあなたがわたしを告訴したりなさらないで、この三千留の金をわたしに取つてもいいといふ保證をして下さることになりますからね。それにあなたは後でわたしを苦しめることもお出来になりません。だつて、さうなればわたしは法廷で洗ひざらひ言つてしまひますからね。しかし、わたしが盗んだり殺したりしたことではありませんよ——まさかそんなことを言ひませんよ——あなたから盗んで殺せと、煽動されたけれど承知しなかつたと、申し立てるのです。だからあの時あなたの同意を求めて、後であなたから苛めつけられないやうにしておく必要が

あつたのです。だつて、あなたには何の證據もないけれど、わたしはあなたがお父さんの死ぬのを熱望しておいでになつたことをあばき立てれば、いつでもあなたを抑へつけることが出来ますからね。きつと世間ではそれを眞に受けるでせうから、あなたは生涯恥をおかきになる譯ですよ。」

「なに、なに、おれがそんなことを熱望してゐたつて？」と、イワンはまた齒ぎしりをかんだ。

「それは確かにさうでしたよ、あなたはあの同意に依つて、暗黙のうちはこのことをやつてもいいとお許しになつたのです。」スメルチャコフは臆面もなくちつとイワンを眺めた。彼はひどく衰弱してゐて、低い懶さうな口のきき方をしたが、彼の心中に秘められた何物かが彼を驅り立てたのである。明らかに何か彼は思惑をもつてゐたらしい。イワンはそれを豫感してゐた。

「さあ、その先きを話せ、」と彼は相手に言つた、「その夜の話を話してくれ」

「その先きのことは分かり切つたことです！ わたしが寝てゐて、ちつと聴き耳を立ててゐますと、旦那の叫び聲が聞えたやうに思ひました。グリゴリイ・ワシーリエキツチはその前に急に起きて出て行きました、だしぬけに悲鳴をあげたかと思ふとあとは全くしんとして、眞暗でした。わたしは寝たまま胸をどきつかせながら待つてゐましたが、とても我慢が出来なくなりましたので、たうとうおきて出て行つたのです。見ると、左側の方の、庭に面した窓が明いてゐるぢやありませんか。そこで左手へ一足近よつて、わたしは旦那がまだ生きて坐つてゐるかどうかとちつと耳を澄ましました。ところが旦那が歩き廻りながら溜息を吐いてをられる氣配です。ぢや、まだ息があるんだな、ちえつ、とわたしは思ひましたよ！ 窓へ近寄つて、『わたしですよ、』と聲をかけました。すると旦那は、『あいつがやつ

て来たぞ、やつて来たぞ、だがもう逃げて行つた！」と言ふんです。つまりドミトリイ・フョードロキ  
ツチが来たことなんです。「あいつがグリゴリイを殺しをつた」——『どこで』とわたしが小聲で訊き  
かへしました。すると旦那は『あすこの隅だ』と指でおさしになつて、同じやうに小聲で仰しやるん  
です。わたしは『待つて下さい』と言ひすて、庭の隅へ行つて見ますと、グリゴリイ・ワシーリエキ  
チが血みどろになつて、氣絶したまま塀の間に倒れてゐるぢやありませんか。そこで、ドミトリイ・フ  
ョードロキツチの来たことは確かだ、といふ考へがすぐわたしの頭に浮かびました。で、直ぐその場でひ  
と思ひに片づけてしまはうと決心しました。それは、たとひグリゴリイ・ワシーリエキツチが生きてゐ  
るにしても氣絶してゐるのだから、よもや何にも氣がつきはしないだらう、と思つたからです。唯一  
つ、マルファ・イグナーチエヴナが眼を覺しはしないかといふ懸念はありましたかね。わたしはその瞬  
間にもそれを感じましたが、もうその時はやつつけてしまひたい慾望がわたしに襲ひかかつてゐて、殆  
んど息も出来ないくらゐだつたのです。わたしは窓際へ引つ返して、『あの女がここに来ますよ、やつ  
て来たんですよ、アグラフェーナ・アレクサンドロヴナが来て、はいりたがつてゐますよ』と旦那に言  
ひますと、旦那は子供のやうにぶるぶる身慄ひをして、『ここにつてどこだ？ どこだ？』さう言つて  
喘ぐやうにしながら、まだ信じられない様子です。『そこに立つてゐますよ、扉を開けてあげなさい！』  
と、わたしが言ひますと、旦那は半信半疑でわたしを窓ごしに眺めながら、窓をあけるのが怖ろしい様  
子なんです。『これは、つまりおれを怖れてゐるのだな』とわたしは考へました。が、をかしいぢやあ  
りませんか、その時、わたしは不意に窓枠を敲いて、グルーシエンカが来てゐるといふ合圖をしてみる

ことを思ひついたので。ところが旦那は、言葉を信じないくせに、わたしがこつこつと合圖をした  
ら、すぐ駆け出して来て、扉を開けたぢやありませんか。わたしがはいつて行かうとしますと、旦那は  
わたしの前に立ちふさがつて『あれはどこにゐる？ あれはどこにゐる？』と言つてわたしを見ながら  
びくびくしてゐるぢやありませんか。こんなに怖れられてゐるんぢや、とても首尾よくゆかないな、  
と、わたしは思ひました。部屋へ入れないんぢやないか、旦那がどなりはしないか、マルファ・イグナ  
ーチエヴナが駆けつけやしないか、何か他に起こりはしないかなどと思ふと、怖ろしくなつて足の力も  
抜けてしまひました。今は何も覺えてゐませんが、その時わたしは旦那の前できつと眞蒼になつて突つ  
立つてゐたに違ひありませんよ。『そこです、その窓の下です、どうしてあなたには見えないのでせ  
う？』と、旦那に耳うちすると、『ぢや、お前連れて来てくれ、あれをつれて来てくれ！』——『でも、  
あの女は怖がつてゐるんです。大きな聲にびくりしてがさ藪のかけにかくれてゐるんです。御自分で  
書齋から出ていらして、お呼びになつて御覽なさい。』とわたしがいひますと、旦那は窓の傍へかけ寄  
つて、蠟燭を窓のうへに立てて、『グルーシエンカ、グルーシエンカ、お前そこにゐるのかい？』と、  
呼びましたが、呼びながらも窓から體を外へのぞけようとしません。わたしから一步も離れよ  
うともしないんです。怖ろしいからですよ。わたしをひどく怖れてゐたので、傍から離れないんです。  
『はいえ、あの女は（と、わたしは自分で窓に寄つて頭を外へつき出したが）あそこのがさ藪のかけ  
にゐるんですよ、旦那を見て笑つてゐるぢやありませんか、見えるでせう？』と言ひました。すると旦那  
は急にそれを眞にうけて、ぶるぶる慄へ出したのです。何しろ、グルーシエンカにすつかり現つて抜



かしてゐたんですからね、そして旦那は窓から體を乗り出すやうにしたんです。わたしはふつと、旦那の卓子のうへに載つてゐたあの鑄鐵製の文鎖を、そら、覺えていらつしやるでせう、三斤もあるやつなんですよ。あれを取つて、振りかぶると同時に、旦那の後ろから頭蓋骨めがけて打ちおろしたのです。旦那は叫び聲ひとつあげずに、そのままぐつたりしてしまつたので、また二三度なぐりつけました、三度目に頭骨が破れたらしい手應へがありました。すると、旦那は仰向けに倒れましたが、體ぢゆう血みどろになつてゐました。わたしは自分の身の廻りを調べてみましたが、血の飛ばつちりひとつ着いてゐないのです。わたしは文鎖をきれいに拭いてもとのところへ戻し、聖像に近寄つて、封筒に入つてゐる金を取り出しました。そして封筒を床の上へ投げすてて、その傍へ薇薔いろのリボンも捨てておきました、わたしはがたがた慄へながら庭へ飛び出すと、一目散にあの空洞のある林檎の木の傍へ行きました——あなたもあの空洞を御存じでせう、わたしはずつと前から、その空洞に眼をつけてゐたものですか、ちやんとその中に布片と紙とを用意しておきました、わたしは紙幣を全部その紙にくるんで、その上から布で包んで空洞のなかへ深くさし入れました。そして二週間以上もそのままにして置いたので、その後、病院から出て来た時、初めて取り出して来たのです。わたしはそれから寢床へ戻つて寢たわけですが、『もしもグリゴリイ・ワシーリエキッチが、死んでしまふと、こちらにとつてはたいへん都合が悪いが、萬一死なずに生きかへつてくれたら何より好都合だ、さうなればあの老人は、ドミトリイ・フョードロキッチの來たことを立證するだらうし、自然あの人殺して金を盗つたことにもなるんだから』とびくびくしながら考へました。そこでわたしは一生懸命に呻き始めました、それは少しも早

くマルファ・イグナーチエヴナを起こすためでした。たうとうあの方は起きて、わたしのところへ駆け寄らうとしましたが、グリゴリイ・ワシーリエキッチのゐないのを見ると、いきなり外へ飛び出して行つてしまひました。そして庭が喚き聲を立てるのが聞こえました。それからごたごたが始まつて、夜つびで續いた譯ですが、わたしはすつかり、ほつとしましたのです。

話し手は言葉を切つた。イワンは身じろぎさへもせず、相手から暫しの間も眼を離さず、死人のやうに黙々として、最後まで聴き入つてゐた。語りながらも、時々スメルチャコフはイワンを眺め眺めしたが、大ていは眼を外らしてゐた。話し終つたとき、彼はさすがに昂奮したらしく、息苦しうで、顔にべつとり汗をかいてゐた。しかし、彼の感じてゐたのは悔恨であるか、何であるか、それは判然しなかつた。

「ちよつと待つた、」とイワンが何か考へ込みながら遮つた、「ぢや、扉はどうしたといふんだ？ 若し親爺がお前だけに扉を開けたものなら、それより前にグリゴリイが扉の開いてゐるのを見る譯がないぢやないか？ グリゴリイはお前より先きにそれを見たといふんだからね。」

イワンが前とは打つて變つた調子で、少しも怒りを含まず、非常に穩かな聲で話しかけたことは注目すべき點である。若しこの瞬間、その扉を開けて、鬨のところから彼らを覗く人があつたならば、その人は彼らが何か普通の、興味ある話題について睦しく語り合つてゐるのだと思つたに違ひない。

「その扉のことも、グリゴリイ・ワシーリエキッチが開いてゐるのを見たと言ふのは、みんなあの爺さんの空想なんです」と、スメルチャコフは口を歪めてにやりと笑つた、「あの男は人間ぢやないんで

す、たしかに強情な夫勢馬ですからね、實際見たんぢやなくつて、見たやうに思つただけですが、一旦いひ出したが最後、決してあとへ引かないんです。しかし、あの男がそんな考へを抱いてゐることは、結局、わたしたちにとつて、もつめの幸です。さうなればいよいよドミトリイ・フョードロキツチに罪が被せられる譯ですからね。」

「待てよ……」とイワン・フョードロキツチが言つたが、妙にぼんやりしたやうに、しきりに何か考へ込みながら、「待てよ、お前に訊きたいことが山ほどあつたのだが、すつかり忘れてしまつた……なぜかう忘れつぽくつて、頭がこんぐらかつてるんだらう……さうだ！ 兎に角これだけ訊くがね、一體お前は何のために包みを開けたのだ、またなぜ封筒を床のうへへ捨てて置いたのだ？ なぜそのまま包みを持つて行かなかつたんだ？……さつきその話を聞いた時には、さうするのが正當だといふ風に思はれたのだが……なぜさうしなければならなかつたのかおれにはとんと合點がゆかないのだ……」

「さうしたのは、ちよつと譯があつたのです。なぜといつて、前からその包みの金のことをよく知つてゐる人間——たとへば わたしのやうに、自分でその金を封筒へ入れたら、旦那が封印をして上書きまでなざるのを目のあたり見てゐるやうな人間ならば、假にその男が旦那を殺したとしても、兇行の後その金包みを開封したりなどするでせうか？ それもそんなせつばまつた場合にですよ。だつて、開いて見るまでもなく、封筒に金のはいつてゐることは、百も承知してゐるのぢやありませんか？ それが若しわたしのやうな強盗であれば、まるで反對に包みなど開けて見るまでもなく早速それをポケットへ捻ぢ込むなり一目散に逃げ出してしまひますよ、ところが、ドミトリイ・フョードロキツチは全く

別です。封筒のこともただ話に聞いてゐるだけで、一度も見ることがないんですからね。假りに蒲團の下からでも、それを見つけ出したところで、早速それを引き裂いて紙幣の有無をたしかめるに違ひありません。そして後にそれが自分に對する證據になるだらうなどと考へる餘裕もなく、封筒なんかその場に投げ捨てるに違ひありませんよ。だつてあの人は何といつても上流の生れですから、むろん、常習の盜賊でもなければ、これまで一度として物を盗んだことなどはないんですからね。たとひこの場合、盜む氣になつたにしても、それは普通の盗みではなく、ただ自分の物を取返すだけのことで、この考へはあの人自身、前々から町ぢゆうに言ひ觸らしたり、フョールドル・パーヴロキツチのところへ自分の財産を取り戻しに行くんだなどと、人前で自慢してゐたくらゐですからね、しかしわたしは取調べの時、検事にはそのことを明らかに言つた譯ではなく、自分でも分らないやうな風に、ちよつと匂はせただけです。丁度、検事が自分で思ひついただけで、わたしが言つたのぢやない、といふ風に、ちよつと仄めかしてやりました、——この仄めかしに引つかかつて、検事さんはたしかに涎れを垂らしてゐましたよ。」

「一體全體、お前はそんなことをその場で考へつたのかい？」とイワンは驚愕に襲はれて、妙な聲で叫んだ。彼は再び驚異の色を浮かべて、スメルヂャコフを眺めた。

「とんでもない、まさか、あんな火急の場合に、そんなことを思ひつく人があるものですか？ すつと前から考へてゐたことですぜ。」

「なるほど……さうか、ぢや悪魔がお前に加勢したんなら！」とイワンはまた叫んだ。「いや、お前は

馬鹿ぢやない、おれが思つてゐたより遙かに惻巧だ……」

彼は立ち上つたが、それは確かに部屋の中を歩き廻らうと思つたものに違ひない。彼はひどく鬱ぎの蟲に取りつかれてゐたのである。しかし卓が道をふさいで、卓と壁との間には、やつとすり抜けられる程の餘地しかなかつたため、彼はその場で一廻轉しただけで、又しても椅子に腰をおろしてしまつた。かうして歩き廻ることが出来なかつたことが、かなりに彼をいら立たせたものらしく、彼はいきなり、前のやうに殆んど無我夢中になつて、喚き立てた。

「おい、貴様はなんて哀れな代物だ！ 貴様には分かるまいが、貴様を殺さずに生かしておいたのは、明日、法廷で貴様に答辯をさせようと思つたからだぞ、神様は御存じだが（イワンは片手を高く差しあげた）、——おれにも罪があるかも知れん、事實、おれは腹の中では親爺の死を望んでゐたかも知れん、誓つて言ふが、おれは貴様の思つてゐるほど、そんなに罪ふかくはないんだぞ、おれはまるでお前を唆のかしなぞしなかつたかも知れん、いや、決して唆のかしはしなかつた！ だが、どつち道、おれは明日法廷で自分のことは明らかに申し立てようと思つてゐる。その決心をしたんだ！ 何もかもおれに言つてしまふんだ、だが、おれもお前も一しよに法廷へ出るのだ！ お前が法廷でおれのことを何と言はうと、また、どんな證據を持ち出さうと、おれはそれを承認する。おれはな、もうお前なんか少しも怖くないんだよ、おれは何もかも自分で確める！ だが、お前も是非とも白状しなければならん、是が非でも白状する義務があるんだ！ おれたちは一しよに行かう！ さう決まつたのだ！」イワンはおごそかに、力強く、かう言ひ切つたが、その眼光を見ただけでも、もうそれに決つたといふことはあり

ありと窺はれるのであつた。

「あなたは御病氣ですな、たしかにさうです、ひどくお悪いやうですよ。あなたの眼はすつかり黄いろくなつてゐますよ、」とスメルヂャコフが少しも嘲笑ひを混へずに、まるで同情するやうな語調で言つた。

「おれたちは一しよに行くんだぞツ」とイワンが繰り返した、「尤も、お前が行かなくつても同じことだ、おれは一人で自供するから、」

スメルヂャコフは何か考へ込んでゐるやうに口を喋んでゐた。

「決してそんなことにはなりませんよ、第一、あなたが御出頭にはなりませんよ、」と彼はつひに、きつぱりと否應のない調子で、言ひ切つた。

「お前にはこのおれが分からないんだ！」と、イワンが詰るやうに叫んだ。

「そんなことをいぢいち白状なすつたものなら、どんなにあなたは恥をおかきにたるか分かりませんよ、第一そんなことをしたつて何の役にも立ちませんよ、わたしがそんなことを言つた覚えはないと言ひ切つてしまへば、それまでですからね、またあなたが何か御病氣であることや（實際どうもさうらしいですからね）、あなたが兄さんのことをひどく心配して自分の身を犠牲にしても救けたいと思つて、わたしにそんな言ひがかりをしていらつしやるのだと言ひ切つてしまへばそれまでです、何しろあなたはいつもわたしを蠅か蟻子ぐらゐにししか考へていらつしやらないんですからね、さう言つたら、誰があなたの言葉など信用するものですか、それにあなたは一つだつて證據を握つておいでにならないぢやあ

りませんか？」

「おい、だつて、今お前はその金をおれに見せて、おれを納得させようとしたぢやないか。」

スメルチャコフは紙幣束の上からイサク・シイリンを取り退けて、傍に置いた。

「この金を持つてお歸り下さい、」と言つてスメルチャコフはほつと溜息をついた。

「持つて行くとも、だが一たいどうしてこれをおれに呉れるのだ、お前はこの金を手に入れるために人殺しまでしてのけたのぢやないか、」イワンは非常に驚ろいて相手を瞞めた。

「そんな金はちつとも欲しくありません、」と、スメルチャコフは片手を一つ振り廻して、慄へ聲で言つた、「前にはその金でモスクワかそれともあはよくば外國へ行つて新生活を始めようと思つてそんな夢を抱いてゐたこともあるのです、それといふのも、例の『何をして構はない』から來てるのです。全く、あなたの教へて下さつたことは正しいです、あなたはそのことを何度も言つて下さいましたからね。實際、永遠の神といふものが無ければ善行なんてもなものなし、善をする必要もないつてね。あなたのお説は正しいのです、だからわたしもさう考へるやうになつたのです。」

「それは、お前が自分で考へつたのかえ？」イワンが歪んだやうな薄ら笑ひを洩らした。

「いいえ、あなたの御指導によることです。」

「ところで、どうやらお前は、神を信じてゐたといふことになるのかえ、だつて金を返さうとするぢやないか？」

「いいえ 信じて居りません、」とスメルチャコフが囁やいた、

「ぢや、何だつて返すんだ？」

「もう澤山です、……よして下さい！」スメルチャコフはまた手を一つ振つた、—あなたはしじゆう口癖のやうに、すべてのことは許されると仰しやつたぢやありませんか、それなのに今になつて、何をそんなに吃驚なさるんです？ あなたは、自分から進んで自分の罪を告白しに行かうとまで思つてゐらつしやるのです……そんなことがどうして出来るのですか！ とてもあなたは告白になど行きはしませんよ。」と又もやスメルジャコフはきつぱりと、確信ありげに斷言した。

「今に分かるよ、」とイワンは言つた。

「とても駄目なことですよ、あなたはあまりに惻巧すぎますよ、何しろあなたがお金のお好きなことはよく分かつてゐます、あなたは自尊心の強い方で、この上もなく名譽を重んじてゐらつしやいます。それに美しい女は殊のほかお好きなんです。が、中でもあなたの一番にお好きなのは、誰にも頭を下げないで、安らかに、楽しく暮らすことなんです、——それが何よりお好きなんです、だからあなたは、永久に自分の生涯を棒に振つてまで、そんな恥さらしたことをわざわざ法廷へ出てなされるおつもりはありませんよ。あなたは三人の御兄弟のうちでも一ばんフォードル・パトヴォキッチに似ておいでですよ、殊に精神はあの方にそっくりです。」

「お前は馬鹿ぢやなかつたな。」イワンは何か感動したやうにかう言つた。彼の顔は急に赧くなつた、「今までおれはお前を馬鹿だとばかり思つてゐたが、なかなかお前は眞面目な人間だつてことが今分かつたよ！」と彼は今更のやうに、スメルチャコフを見つめながらかう言つた。

「わたしを馬鹿だと考へてゐらつしやつたのは、あなたの已惚れですよ。さあ、この金をお納め下さ  
5。」

イワンは三千留の紙幣束をむきだしのまま無雑作にポケットに押込んだ。

「これは明日法廷で見せる。」と彼は言つた。

「見せたところで誰も本當にはしませんよ、いい鹽梅に、あなたはいま御自分のお金をどつさりお持ちですから、誰だつて自分の金庫から出してそれを法廷へ持つて來たんだとしか思ひませんよ。」

イワンは椅子から立ち上がった。

「繰り返していふが、お前を殺さなかつた譯は、お前といふ人間が是非とも明日必要だからだ。いいかえ、忘れては駄目だぞ！」

「ぢや、お殺しなさい。いま殺して下さい。」スメルチャコフは異様な眼つきでイワンを瞞めながら蔑むやうな調子で不意にかう言つた。「あなたにはそんな勇氣も出ないでせう。」そして彼は悲痛な薄笑ひを浮べてつけ足した。「前にはあれほど大膽だつたあなたも、今ぢや何ひとつなされないんですからね！」

「ぢや、明日！」イワンは叫んで出て行かうとした。

「ちよつとお待ち下さい……もう一遍、わたしにその紙幣を見せて下さい。」

イワンは紙幣束を取り出して彼に見せた。スメルチャコフは十秒ばかりの間それを瞞めてゐた。

「さあ、どうぞお歸り下さい、」と片手を振つてかう言つたが、また突然イワンの背後から呼び止めた。「イワン・フォードロキッチ！」

「何だ？」イワンは歩きながら振り向いた。

「おさらばですよ、」

「また明日！」イワンは再びかう叫んで小屋を出て行つた。吹雪は尙も暴れ狂つてゐた。彼は初めのうち暫らくは元氣に歩いてゐたが、忽に足がふらつきだした。「體のかげんだな」と彼は考へてにやりと苦笑した。と、一種の歡喜に似た氣持が胸の底から湧き立つてきた。彼は自分の内部に無限の強さを自覺したのである。最近たえず彼を激しく惱ましてゐた心の動搖が、ついに一掃されたのである！覺悟が出來た、『もうこれは變らないぞ』彼は幸福を覺えながら考へた。丁度その刹那、彼は何かに躓いて、あやふく倒れるところであつた。立ち止つて足許をよく見ると、さつき彼が突き飛ばしたあの小柄の百姓が、先刻のまま、もとの場所に氣絶してぢつと倒れてゐるのであつた。吹雪がもう殆んどその顔全體を埋めてゐた。イワンはいきなり百姓を掴んで引つ擔ぐやうにして歩きだした。右手に灯影のさしてゐる小屋を見つけた彼は、そこへ近よつて鎧扉を敲いた。やがて返事をしながら顔を出したこの家のあるじの町人に、三留お禮をするから、この百姓を駐在所まで運ぶ手傳ひをしてもらひたいと頼んだ。町人は準備をして出て來た。それからイワン・フォードロキッチは目的を達して、その百姓を駐在所へ運び込んで早速醫者の診察を受けさせた上に、彼がここでも惜しみなく自腹を切つて『その費用』を負擔したことなどは、こまごま書き立てないことにしよう。ただひとつ、このことに殆んどまる一時間の手数を要したことだけを述べて置かう。だがイワン・フォードロキッチは非常に満足を覺えた。彼の思考はそれからそれへと移つて活動した。『若しおれの心に明日の公判に對して、これほど堅い決心が出

來てゐなかつたなら、』と彼は一種の快感を覚えながら考へた。『あんな百姓の世話をするために一時間も潰すやうなことはしなかつたらう、怖らく、さつさとその傍を通りすぎて、相手の凍死することなどには鼻汁も引つかけなかつたらう、……だが、おれは何といふ自己反省の力を持つてゐることだらう！』と彼はその瞬間、さらに大きい快感を覚えながら心に思ふのだつた、『それだのに奴らの方ではおれを勝手に氣違ひ扱ひにしてやがるんだ！』わが家の前まで辿りつくと、彼は急に立ち止つて、俄かにこんな自問を發した。『おれは今すぐに、これから檢事のところへ行つてすべてを陳述した方がよくはなからうか？』が、彼は再びわが家の方へ向き直りながらこの問題を決定した、『明日何もかも一緒に述べよう！』かう彼が心に呟くと同時に、不思議なことに彼の悦びと満足は殆んどすべて、忽ちにして消え失せてしまつた。彼が自分の部屋へ入つた時、何か氷のやうなものが彼の心臓を掠めとほつた、それは一種の追憶のやうなもので、もつと適確に言へば、この部屋の中に前にもあり、現在でも存在してゐる、ある惱ましい、忌はしい何者かに關する記憶であつた。彼は長椅子の上へぐつたりと腰をおろした。老婆がサモワルを持つて來た、彼はお茶の用意をしたけれど口をつけようともしなかつた。老婆を明日まで用はないと言つて退けた。彼は長椅子に腰かけたまま眩暈を感じた。彼は病氣にかかつてひどく衰弱してゐるやうに思つた。やがて眠りを催しさうになつたが、彼は不安らしく立ち上つて、睡魔を追ひ拂ふために部屋の中を歩き廻つた。時々自分が熱に浮かされてゐるのではないかとも思つた。然し何よりも氣にかかるのは病氣のことではなかつた。彼は再び腰をおろすと、何かをさがしてもするやうに、ときどきぐるりと見廻し始めた。そんなことが幾度も繰り返された、最後に彼の視線は、ある一

點にちつと凝らされた。イワンはにやりと笑つたが、しかし憤怒に顔を嚇と赧らめた。彼は長いあいだ長椅子に腰かけたまま両手でしつかりと顔をささへてゐたが、やはりその眼は前と同じ一點、正面の壁際にある長椅子の上に流目に瞶めてゐた。どうやらそこに何者かがゐて彼を苛立たせ、おびやかし、苦しめてゐるものやうであつた。

## IX

## 悪魔、イワン・フョードロキッチの悪夢

自分は醫者ではないが、しかし是非ともイワン・フョードロキッチの病氣の性質を多少でも讀者に説明しなければならぬ時機に到達したやうな氣がする。少し先廻りをして一ことだけ言つて置く。彼は今晚、他ならぬ明日といふ日の前夜、震戦性譫妄性にかかつてゐたのである。それは、既に早くから健康を犯されながらも、頑強に抵抗してきた彼の肉體を完全に征服してしまつたのである。自分は醫學の事は何も知らないが、大膽に想像を廻らしてみれば、彼は實際その意志を極度に張りつめて、暫らくは病氣を遠ざけてゐたものらしい、いふまでもなく、その頃の彼は病氣を全然支配し得るものと空想してゐたのであつた。彼は自分が健康を害してゐることを知りながらも、こんな時——自分の生涯にあつて

の運命的な瞬間に——つまり、出るべきところへ出て、大膽にきつぱりと、言ふべきことを言つての  
け、『われとわが辯明』をなすべき時に、病氣などにかかるのはたまらないことであつた。尤も、一度  
は彼も、モスクワから來た例の新しい醫師のところへ相談に行つてみた。すでに前の章で述べたやう  
に、カテリーナ・イワーノヴナの空想のために招聘されたその醫師は、彼の容態を訊き、詳しく診察し  
た結果、彼が一種の脳症にかかつてゐるのだと診断した。そして、彼が嫌惡をいだきながら述べたある  
告白に對しても、一かう驚ろきはしなかつた。『あなたのやうな状態にある人が幻覺に襲はれるのはあ  
りがちのことです。』と醫師が断定した。『尤も、よく試験を試してみなくちやなりません、兎に角、手  
後れにならないやうに直ちに治療にかなければなりませんよ、さもないと、大變なことになるま  
すから。』けれどイワン・フォードロキッチはこの分別のある勸告に従つて、療養のために床に就かうと  
はしなかつた。『でも、まだ歩けるぢやないか、氣力もまだある、倒れてしまつた時は、また別だ、そ  
の時には誰でも好きな者がなほしてくれるだらう』と彼は片手をつつ振つて決心した。こんな譯で、既  
に述べたやうに、彼は今も自分が熱に浮かされてゐるのを幾分か意識しながら、正面の壁際にある長椅  
子の上の何ものかを執念く見つめてゐた。そこにはだしぬけに、いつどうしてはいつて來たのやら、誰  
か人が坐つてゐた。イワン・フォードロキッチがスメルヂャコフのところから歸つて來た時には、部屋  
の中には誰もゐなかつたのである。それは一人の紳士であつた、いや、もつと適切に言へば、ある特殊  
な露西亞のゼンツルマンで、もういい加減の年配であり若くない、佛蘭西人のいはゆる *qui frisait la*  
*cinqnantaine* であつた。かなり長くてまだ相當に濃い黒い髪や、楔型に刈り込んだ顎髻には大して白

髪も混つてゐなかつた。その男は茶いろの背廣のやうなものを著てゐた。それも一流の仕立屋に作らせ  
たものらしいけれど、いい加減著ふるされた代物で、少くとも三年以前に流行したやうなもので、社交  
界の相當の連中なら、もう二年も前に見捨てて省みなかつたに違ひない。またシャツにしても、スカ  
フのやうな形の長いネクタイにしても、無論當世風の粹な人の用ひるやうな品ではあつたが、近くで見  
るとシャツは大分うす汚れてゐるし、巾廣いネクタイもかなり擦り切れてゐた。格子縞のズボンにして  
も格好は申し分なかつたが、今の流行から見れば、やはり色が明る過ぎるし、のみならず餘り細すぎた  
ので、今ではもう遠くに人がはかなくなつてゐた。また柔かい白い毛の帽子は、もう時候はづれのもの  
である。要するに、あまり裕福でない人がきちんとした服装をしてゐると言つた格好である、つまり農  
奴制時代に榮えた、手の白い地主階級の落魄した姿に似てゐた。疑ひもなく、昔は立派な上流社會にあ  
つて、れつきとした友達を持ち、恐らく今でも以前どほりの關係を保つてゐるのだらうが、青春の歡樂  
も夢と過ぎ去り、そこへ農奴制の廢止に會つて零落するに従ひ、だんだんに親切な舊友の間を轉々とし  
て歩く、性のいい一種の食客になりさがつてしまつたのである。舊友たちがかうした人間を自分の家へ出  
入りさせるのは、當人の馴染みやすく要領のいい性質を知つてゐるからでもあり、また、さうした人  
は、無論、上席ではないにしても、兎に角、どんな人でも席を同じうして貰へるからであつた。さう  
いふ食客、即ち、要領のいい紳士は、面白い話の一つも出來、骨牌の相手などは上手に出來るけれど、  
若し何か用事を強ひられても、さうしたことをするのは大嫌ひである。彼らは大抵孤獨な人間で、獨身者  
がまたは鰥夫かである。彼らには時によると子供を持つてゐるものもあるが、そんな子供は常にどこか

遠方の伯母などの家で育成されてゐるが、紳士は交際場裡ではさういふ伯母のあることなどは、決しておくびにも出さない。彼らはさうした姻戚のあるのは、何だか肩身のせまいやうな様子であつた。そして時折自分の子供からクリスマスとか誕生日などの賀状を受け取つたり、それに返事を出したりするのであるが、そのうちに、いつの間にかその子供の存在を忘れてしまふのである。この思ひもかけない客の容貌はあまり氣立てもいいとは言へないが、要領もよく、場合に依ればどんなお世辭でも言へるといつた風であつた。彼は時計を持つてはゐなかつたけれど、黒いリボンをつけた鼈甲縁の柄つき眼鏡を持つてゐた。右手の中指には安つばい蛋白石の入つた大形の金指輪をはめてゐた。イワン・フォードロキツチは腹立たしげに沈黙したまま、話しかけようとしなかつた。客は話しかけられるのを待つてゐた。今しも自分の居間から茶の間へ降り来て、主人の相手しようと思つたところ、主人が用事ありげな様子で、不快さうな顔をして、何やら考へ込んでゐるので、温順しく待つてゐるかのやうであつた。しかし、彼は主人の方から口を利いてくれさへすれば、どんな愛想のいい話しても早速始めるつもりでゐた。突然、彼の顔には何やら心配さうな表情が示された。

「時に、君、」と彼はイワン・フォードロキツチに話しかけた。「こんなことを言ふのは失禮だが、君はカテリーナ・イワーノヴナのことを嗅ぎ出すために、スメルチャコフのところへ出かけて行つたくせに、何にもあの女のことを聞かないで歸つて來ましたね。大かた忘れたんでせう……」

「うん、さうだつた！」イワンは突然かう口走つた。その顔は心配さうに曇つた。「うん、僕はすっかり忘れてたんだ……だが、もうそんなことどうでもいいんだ、明日になれば分かる、」と彼は獨りごと

のやうに呟いた。「だが、君、」と彼は苛立たしさうな調子で言つた。「いま僕はそのことを思ひ出せる筈だつたのだ、何しろ、それが丁度僕を苦しめてゐたところだからね、どうして君は差出口を利くのだ？ それぢや、まるで僕自身で思ひ出したのではなくて、君がわざわざ僕に知らせてくれたやうに、僕までがさう信じてしまふぢやないか！」

「信じられたくなきや、それもいさ。」紳士は愛想よく微笑しながら言つた。「信仰を強要する譯にはゆかないからね、それに信仰の問題では證據、物的證據なんか何の役にも立ちやしない。トーマスが信じたのは、決して蘇つたキリストを見たためぢやなくつて、それを見ない前から信じようと望んでゐたからさ、例へば、唯心論者がどうだらう……僕はあの先生方を非常に好んでゐるが……まあ考へてみるがいい、彼らは、宗教の目的に奉仕するのは悪魔があつた世から自分たちに角を見せるからだと思つてゐるのです。これは、いはゆる來世の存在してゐるといふ物的證據であると彼らは言つてゐるです。來世的證據、何といふ取り合はせだらう！ それはまあそれとして、若し君がさういふ考へを抱くとしたら、悪魔の存在が證明されたことが、神の存在の證明になるでせうか？僕は唯心論者の會員に入りたい、さうしたら、その中で反對論を唱道して、僕は實在論者であつて唯物論者でないと言つてやる積りなんだ、へつ、へつ、」

「おい、君、」突然イワン・フォードロキツチが卓から立り上りさま「僕は何だか壓されてゐるやうだ……實際、うなされてゐるんだ……だから僕にかまはず、幾らでも勝手なことを喋るがいいんだ！もう君はこの前の時のやうに僕を怒らせることは出來ないよ。だが僕は何だか恥かしくつて……部屋の中



を歩き廻りたいよ……僕はときどき君の顔が見えなくなつたり、君の聲が聞えなくなつたりするんだ、この前の時みたいだね、だが、君の喋つてゐることだけはいつもよく分かつてゐるんだ、だつて、それは僕なんだから、僕自身が喋つてゐるんで君ぢやないんだからね！ しかし、ただ一つだけ分からないことがあるんだ、この前のとき僕は眠つてゐたらうか、それとも醒めてゐて實際君を見てたらうか、といふことなんだ。ひとつ冷たい水でタオルを濡らして頭へ載せてみよう、さうしたら多分、君は消え失せるんぢやないかしら。」

イワン・フョードロキツチは部屋の隅へ行つてタオルを持つて來ると、自分で言つたとほりにして、濡れタオルを頭に載せて部屋の中をあちこち歩き始めた。

「僕は、君がこれほど親密に應待してくれるので何より嬉しく思ひますよ。」と客は口を開いた。

「馬鹿、」イワンは笑ひだした、「僕が君なんか遠慮して堪るものか、僕は癩癩が痛いんだけど、気分は非常に愉快だ……額も痛い……だから、どうかこの前のときのやうに哲學じみた話だけは止して呉れ給へ、君が若し、引つこんでゐられなきや、何か面白いことを喋るがいいよ、居候なら居候らしく四方山の世間話でもね、ほんとに何といふ困つた先生に取りつかれたものだらう！ だが、僕は君なんか少しも怖くないんだぜ、もう今に君なんかすつかり征服してみせるぞ。瘋癲病院なんかへ連れてゆかれて堪るもんか！」

「居候は *C'est charmant* (おもしろ) ですよ。さうだ、僕は自然のままの姿をしてゐますよ。この地上で僕が居候でなくて何だらう？ それは兎も角、僕は君の言葉を聴いて全く驚ろいたよ。君は實際、僕を

單に空想ではなしに、實在のものとして解釋するやうになつたからね……」

「僕はただの一分間も、君を實在のものと思つたことはないよ。」イワンは殆んど猛然として叫んだ。

「君は虚偽だ、僕の病氣なんだ、僕の映像なんだ、ただ、どうして君を滅ぼしたらいいのか僕には分からないのだ。どうしても暫らくの間は僕も苦しまねばなるまい。君は僕の幻覺なのだ。僕自身の化身だ、しかし、ただ僕の半面の化身、……つまり、一ばん汚れた愚かしい僕の思想と感情の半面にすぎない、かうした見地から見れば、たしかに君は僕にとつて興味のある存在なんだ、ただ君のために浪費する時間の餘裕がありさへすればさ……」

「ぢや失敬だがね、ひとつ君の化けの皮をひん剥いて差しあげませうかね、君が先刻、街燈の傍で、

『あいつからお前は聞いたんだな！ どうして奴が僕のところへ來ることを知つたんだ！』なんてアリョーシャを呟鳴りつけましたね、あれは僕のことを言つたんだらう、してみれば、君はほんの暫らくでも信じたんだ、僕の實在を信じたんぢやないか、」と紳士は軽く笑つた。

「ああ、あれは人間性の弱點だよ……僕は君を信じることは出來なかつたのだ、この前の時でも、僕は眠つてゐたのか起きてゐたのか、それさへ覺えがないんだ。若しかしたら、あの時、君を夢に見ただけで、あれは現實ぢやなかつたのかも知れん……」

「ぢや、さつき、君はどうしてあんなにアリョーシャに辛く當つたんだ？ あれは可愛い子だよ、僕はゾシマ長老のことであれに向かつて罪なことをしたことがあるのです。」

「アリョーシャのことは言はないでくれ！ 何だい、生意氣な下郎め！」とイワンは又もや笑ひ出し

た。

「君は僕を罵りながら笑つてゐますね、——それは結構なやり口です。兎に角君はこの前よりはずつと機嫌がいいですね。僕にはその譯が分かつてゐますよ、それは君が偉大なる決心を……」

「僕の決心のことなんか言はないでくれ！」とイワンが激しく呶鳴りつけた。

「分かつてゐる、分かつてゐる、C'est noble, c'est charmant (それは氣高いことだ、それはいいことだ。)  
君は明日自分を犠牲にして兄貴を辯護するつもりなんだらう……C'est chevaleresque (それは義侠的なことだ。)」

「黙れ、貴様を蹴つ飛ばしてくれぞ！」

「そいつはかへつて有難いわけです、さうなれば僕の目的が達せられるのだからね、蹴飛ばすといふことは、君が僕の存在を信じてゐる證據ですよ、幻影を蹴るものはないわけだからね。冗談は兎も角として、僕はそんなことは平氣ですよ、すきなだけ悪口を言ひなさい、それにしても僕にだつて少しは可憐な物言ひをしても好いと思ひますがね、馬鹿だの下郎だのつて、何といふ言ひ草です！」

「君を罵倒するのは、僕自身を罵倒することなんだ、」とイワンはまた笑つた、「君は僕なんだ、ただ顔つきが違つてゐるだけだ、君の言つてゐることはみんな僕の考へなんだ、……何一つ新しいことを僕に聞かせてゐやしないぢやないか！」

「若し僕の考へ方が君に似てゐるとすれば實際それは僕の光榮です。」と紳士は慇懃にしかも威嚴をもつて言つた。

「君はただ僕の穢らはしい考へ、殊に愚劣な考へばかり選り出してゐるんだ、君は馬鹿で下種だ、怖ろ

しい馬鹿だ、いや、僕はお前なんか堪らない、堪らないんだ！ ああ、どうしよう、どうしたらいいんだ！」とイワンが齒ぎしりした。

「だがね、君、僕は何よりも先づ紳士らしく振舞ひ、紳士らしい取扱ひを受けたいんですよ。」と客は一種いかにも食客らしい、初めから讓歩してかかつてゐるやうな、善良な野心を示しながら言ひ始めた、「僕は貧乏だが、しかし、……非常に高潔だとは言ふまい、が……世間では僕が墮ちたる天使であるといふのを當りまへのやうにしてゐる。實際、僕は自分が、いつ、どうして、天使だつたか思ひ出すことが出来ない。若し、さういふ時があつたとして、それを忘れてしまつたからといつて、罪にならな

いほど、遠い昔のことなんだし。だから、今ではただ、身分のある紳士といふ評判だけを大切に、何でも成り行きに委せて、なるべく愉快な人間にならうと努力してゐるんです。僕は實際人間が好きだ、——ああ、僕はいろんなことで無實の罪を被せられてゐる！ かうして時どき君の傍へ來てゐると僕

の生命は一種の實在性を帯びて來る、それが何より僕には嬉しいんです。僕自身も君のやうにやはり幻想に苦しめられてゐるので、それだけにこの地上の實在を愛するのです。この地上ではすべてが輪廓を持つて居り、すべてに方式があり、すべてが幾何學的なところです。ところが僕たちの方では一種漠然たる方

程式の他には何もないのです、で、僕はこの地上を歩きながら空想するのです、僕は空想が大好きなんです、それにこの地上で迷信家になるのが——どうか笑はないでくれ給へ、僕はこの迷信家になるのが好きなんです、ここでは何でも僕は君らの習慣に従つてゐます。僕は町の錢湯へ行くのが好きになりましてね、全くの話だが、商人や坊さんたちと一緒に蒸氣を浴びてゐるんです。僕の夢想してゐるのは、

\*七ブードもある丸々肥った商家のお内儀さんに化けることす——それも二度と再び元へ戻らないやうに、それになりきつてしまつて、さういふ女の信ずることを残らず信じたのです、僕の理想はお寺へ行つて純朴な心で蠟燭を供へることです、本當ですよ、その時こそ僕の苦しみはなくなるのです、それから僕はこちらで醫者の治療を受けるのもまた大好きなんです、この春、天然痘が流行つた時には養育院へ行つて種痘をやつて貰ひましたよ、どんなにその日僕は満足だつたか知れない、お仲間のスラヴ人のために十留の寄附を申し出たくらゐです！……おや、君は聽いてゐないんですね、分かるかね、今晚君は非常に悪いやうですね、昨日君があゝの醫者のところへ行つたことはよく知つてゐますよ……ところで君の健康は？ 醫者は何と言つたのかね？」

「馬鹿！」とイワンが呶鳴りつけた。

「その代り君は惻巧です、君はまた呶鳴りましたね、僕は何も同情を表したわけぢやないんだから答へなきや答へないでいいんです、僕はこの頃また、レウマチが起こつてね……」

「馬鹿、」とイワンはまた繰り返した。

「君は同じことばかり言つてるぢやありませんか、ところが僕は去年ひどいレウマチに罹りましてね、今だに覺えてるんです。」

「悪魔がレウマチに罹るのか？」

「どうしてさ、僕はときどき人間の姿になるんだもの、レウマチにだつて罹るさ。人間の肉體に化ける以上、その影響も受けるのは當りまゝですよ。悪魔は *Satan sum et nihil humanum a me alienum*

*puto* (悪魔たるわたしにとつては人間の  
的なものは悉くゆかりがある)」

「何？ 何だつて？ 悪魔は、*Sum et nihil humanum* だつて……そいつは悪魔にしちや大出來だ」

「やつと御意に叶つて満足です。」

「だがそいつは僕の言葉を横取りしたのぢやないらしい、」とイワンは妙に驚ろいたやうに急に言葉を切つて、「僕は一度もそんなことを考へたことがないんだからな。どうも不思議だ。」

「*C'est du nouveau, n'est-ce pas?* (新しいんだよ、さ) 今度は僕の方から綺麗さつぱりと打ち明けてしまひませう。いゝかね君、胃の消化不良やなんかで夢を見てゐる時や、殊に魔されてゐる時など、人間は極めて藝術的な夢や、非常に混み入つた現実的な事件や、また首尾一貫した事柄を、もつとも高尚なことから胸ボタンの端のことに到るまで驚ろくばかり精細に見ることがある。實際レフ・トルストイでもこれほど細々とは書けまいと思ふほどだ。しかもそれが、どうかすると、文士ではなくて極めて平凡な人間、——官吏や、雑誌記者や、坊主などがそんな夢を見ることがあるんだよ、……これは全く大きな問題なんだがね、ある政治家が僕に打ち明けたところでは、彼の素晴らしい考へはみんな睡つてゐる時に胸に浮かんで來るんだつてさ。現に今がやはりそれなんだ、僕は君の幻影だけれど、ちやうど魔されてゐる時のやうに、なかなか奇抜なことを言つてゐるだらう、こんなことは、これまで考へたこともないだらう、だから僕は決して君の考へを受け賣りしてゐるんぢやない。しかも、それでゐてやはり君の悪夢に過ぎないんだ。」

\*一ブードは約四貫三百八十匁。(譯者註)

「嘘をいへ、君の目的は、君が獨立の存在で、決して僕の悪夢でないつてことを僕に信じさせるにあるんだ、だから、今君は僕の夢だなどと言つてゐるんだ。」

「ねえ君、けふ僕は特殊の題目を持つて來たんだよ、後で説明しよう。待てよ、僕はどこまで話をしたかな？ さうさう、僕はあのおとき風邪を引いたんだ、尤も、君たちのところでぢやない、あちらで。」

「あちらつてどこだ？ なあ、おい、僕のところに君はまだ長くゐるつもりかい？ 歸る譯にはゆかないのかい？」とイワンは殆んど絶望的に叫んだ。彼は歩くのを止めて長椅子に腰をおろすと又しても卓に肘を突いて両手でしつかり頭をかかへた。彼は濡れタオルを取つて腹立たしげにそれを投げた。一向その効きめがなかつたらしいのである。

「君の神経は破壊されてゐるんだね、」と紳士は打ちとけた調子で無雜作に言つた。その様子がいかにも親しさうであつた。「君は、僕でさへ風邪を引くからと言つて怒つてゐるやうだが、それは極めて自然なことなんだからね、何でも大急ぎである外交官の夜會へ出かけたのさ、それは豫て大臣夫人になりたがつてゐるベテルブルグの上流の貴夫人が催した夜會だつたがね、そこで僕は、燕尾服を着て、白のネクタイと手袋をつけたが、その時はまだ飛んでもないところにゐたんだ。で、君らのこの地上へ降りて來るには、まだ廣い空間を飛ばなければならなかつたのさ……無論、それはほんの一瞬間に飛べるんだけれど、何しろ太陽の光線だつて八分間もかかるのに、それに考へて見給へ、僕は燕尾服と胸の開いたチヨツキを着てゐるんだからね。精靈といふものは凍えることはないが、一旦それが人間の姿に化けた以上はどうも、……つまり、僕は無關心に出かけてしまつたんだ、ところが、その空間を充たしてゐる

エーテル、つまり、天地間の水の中は途方もなく寒いんだ、……その寒さといへば、もう寒いなどといふ言葉では表はせないね、考へても見たまへ、氷點下百五十度だぜ、よく田舎の娘たちは、こんな悪戯をするだらう、零下三十度ぐらゐの時に、馴れない者に斧を舐めさせるんだ、すると忽ち舌が凍りついて舌の皮を剝がれて、血みどろになるんだ。だが、それはわづか三十度の話さ、これが若しも、百五十度だつたらどうだらう、斧に指を觸れるなり忽ち指はちぎれてしまふだらうよ。尤も、それは斧があつた時の話だがね、……」

「そんなところに斧なんかないぢやないか？」イワンは放心したやうに、それでゐて忌々しさうな口調で、不意に口を挟んだ。彼は一生懸命になつて、自分の悪夢を信じないかのやうに、氣違ひにならないうやうにと抵抗してゐるのであつた。

「斧だつて？」と客は吃驚して問ひ返した。

「さうさ、一體そんなところに斧があつたらどうなるだらう？」とイワンは急に狂暴な口調で執拗くむきになつて叫んだ。

「空間で斧がどうなるかと言ふんだね？ *Quell idee!* なんてすばらしい考へたらう! そんな高いところへ上つては、衛星のやうに、理由も知らずに地球のまわりを廻轉し始めるだらうね、さうしたら天文學者たちはその斧の出没を計算するだらうし、ガツツクはそれを曆の中へ書き加へるだらう、ただそれだけのことさ。」

「君は馬鹿だよ、怖ろしく馬鹿だ！」とイワンが反抗的に言つた、「嘘をつくならもつと上手につくが

いいよ、でないよ、僕は聴いてやらないから。君は僕を實在論で征服しようと思つてゐるんだ、君の實在を僕に信じさせようとしてゐるんだ、ところが、僕は君の實在を信じたくない！ そんなことを信じるものか！」

「でも僕は嘘をいつてる譯ぢやないよ、みんな本當のことを言つてゐるんだ、眞實といふものは残念ながら平凡なものだからね、君はあくまでこの僕から何か偉大なものか、美しいものを期待してゐるやうですね、まことにお氣の毒だが何分にも僕は力一ぱいのことしか出来ませんからね。」

「屁理窟を言ふなよ、間拔め！」

「いや、どうして、屁理窟どころぢやないよ、僕は右側が半身不隨になつてうんうんと唸り出すといふ騒ぎなんで、いろいろと醫者の治療を受けてみたが、なるほど上手に診察して、掌を指すやうに、病状を細々と話してくれるが、とんと癒してはくれないんだ、丁度そこを一人の若い感激家の學生が、『まあお亡くなりになつても、何病で命を取られたかといふことだけでもお分かりになりますからね！』なんて言つたものさ、それにいつも彼らの癖で、何かと言へば患者を専門家へ廻してしまふのだ、われわれは診察しからないから、これこれの専門家のところへ行くといい、あちらで治療をして呉れるからと言ふのだ、何しろ今では萬病を一手に引受けるといふやうな舊式な醫者は無くなつてしまつて、新聞に廣告を出してゐるのも専門家ばかりぢやないか、かりに鼻の病氣にかかつたとすると、すぐに巴里へ行けといふ、そこには歐羅巴の専門醫がゐて、鼻を癒してくれると言ふのだ。そこで巴里へ出かけると、醫者は鼻を診察する、そして、自分は左の鼻孔は専門外だから右だけしか癒せない、維納へ

行きなさい、あすこには左の鼻孔の特別な専門醫があるからね、と、かういふ御託宣だ、何とも仕方がないから家庭療法でもやつて見ることになるのだ。ある獨逸人の醫者が、蒸し風呂の棚へ上つて鹽を混ぜた蜂蜜で體をこするといいと教へてくれたので、一度よけいに風呂へ行つたつもりで、錢湯で身體ぢゆう塗りこくつてみたが、なんの御利益もなかつた、がっかりしてミランのマツテイ伯爵に手紙を出してみたところ、伯爵から一冊の書物と水藥を送つて呉れたがね、やつぱり駄目さ、ところがどうだらう、ホツアの麥芽精でけろりと癒つてしまつたぢやないか。偶然買ひ込んで一壺半も飲むと、ダンスでも出来るくらゐすつかりよくなつてしまつたのだ。是非とも新聞紙上で『有難う』を掲載して感謝の念を表はさうと決心したんだが、どうだらう、又ひとつ面倒が起つて來たんだ、どこの編輯局でも受付けないんだ！ 『餘り時代錯誤になりますからね、誰も本當にしませんよ、le diable n'existe point 惡魔なんてものは決して居るものぢやありませんよ。』と言つて『それより匿名でお出しになつたらいいでせう』と勧めるのさ、だが匿名を信ずるのは時代錯誤だけれど、惡魔の僕なら信じられる筈ぢやないか、——『御尤もですね、』と彼らは言ふんだ、『惡魔を信じないものは誰もありません、でも、やはり工合が悪いんです、時代傾向を害することになりますからね、まあ、冗談半分ならかまひませんが、』だが、冗談半分ぢや感心しないからね。こんな譯で結局、掲載してくれなかつたのさ、全くの話だが、僕は今でもそのことが心残りなんだ。感謝の念といふやうな、もつとも美しい感情が僕の社會的地位のために、表面的に否定されてしまつたんだからね。」

「また尻理窟が始まつたな？」とイワンは憎々しげに齒を鳴らした。

「飛んでもない、だが、時には不幸も言はずにはゐられないぢやないか、僕は無實の罪を負はされたんだからね、君にしてからが、始終この僕を馬鹿だ、馬鹿だと言ふぢやありませんか。君のまだ年若なことが見え透いてゐますよ。物ごとといふものは智慧ばかりぢやゆかないからね！僕は生れつき親切で快活な心の持主なのさ。『\*わたしもやつぱり、いろんな喜劇を作りますよ、』君は僕を老い込んだラレストコフだとも思つてゐるやうですね、ところが、僕の運命は遙かに眞剣なんだ、僕は到底自分でも分らないやうな一種の宿命によつて、『否定』をするやうに出来てゐるんだ、しかし本來が親切な心だから、どうしても否定することが出来ないんだ。『いや、行つて否定しろ、否定がなければ批評もなくなる、』——『批評論』がなければ雑誌も存在しない、批評がなければ、『ホザナ』ばかりになつてしまふ。だが『ホザナ』ばかりぢや人生は充たされない、この『ホザナ』が懷疑の垣塙を通らなければならぬと言つたやうな譯だ。けれど、僕はそんなことに容喙はしない、僕が作つた譯ぢやなし、何の責任もないんだから。いけにえの山羊を連れて来て、それに批評欄を書かせたら、それが立派な人生なんだ。われわれにはこの喜劇がよく分かつてゐる。例へば僕は率直に自分の滅亡を希つてゐるのだ。ところが、みんなは、いや生きてゐてくれ、君がゐなくつては何もかも無くなるからといふんだ。若しこの世のすべてが完全無缺だつたら、何事も起りはすまい。君がゐなければどんな事件も起りはすまい、しかし事件がなくても困る、とかう言ふんだ。で、僕は不精無精、齒を喰ひしぼりながら、事件を作るために、註文を受けて不合理なことをやつてゐるんだ。ところで人間はあれほど優れた智能を持つてゐる

ながら、この喜劇を何か眞面目なことのやうに思ひこんでゐる、それが人間の悲劇なんだ、そりや、なるほど彼らは苦しんでゐるさ、けれど……そのかはりに彼らは生きてゐるのだ、空想でなしに現實に生活してゐるんだ、なぜなれば、苦痛そのものが生活だからね、苦痛がなくて人生に何の快樂があらう、すべてが一種の制限ない祈りに變つてしまふ、すべてが神聖だけれど、少し退屈だね。ところが僕はどうだ、僕は苦しんでゐるくせに、生活もしてゐないんだ、僕は言はば不定方程式の未知数なんだ、僕は一切の始めもなければ終りもない人生の幻影の一つなんだ、自分の名まで忘れてしまつてゐる。君は笑つてゐるね……いや、笑つてゐるんぢやなくつて又怒つてゐるんだらう、いつだつて君は怒つてゐるんだから、君は絶えず賢くならうと骨折つてゐるが、僕はどこまでも、星の上の生活や、すべての階や、すべての名譽をかなぐりすてて、七ブートもある商家の内儀の體に宿つて、神様に蠟燭を捧げてみたいもんだよ。」

「だつて君は、神を信じないんぢやないか？」とイワンが意地悪さうにやりと笑つた。

「さあ、何と言つたものかな、若し君が眞面目なら……」

「神はあるのか、無いのか？」とイワンはまた兇暴な執拗さをもつて叫んだ。

「ぢや、君は眞面目なんだね？ だがね君、全く、僕は知らないんだよ、えらいことを言つてしまつたなあ！」

「知らなくつたつて、君は神を見たる？ いや、君は實在のものぢやなかつたんだね、君は僕自身な

\* ゴオゴリの「檢察官」の主人公フレスタコフの臺詞。(譯者註)

んだ、君は僕だ、それだけのものさ！ 君は屑だ、君は僕の空想なんだ！」

「お望みなら僕も君と同じ哲學を奉じてもいい、それが最も公平だから。Je pense, donc je suis 我思故に我在です。これは僕にもよく分かつてゐるが、僕の周囲にある他のすべてのものは、この世界も、神も、悪魔さへも——そんなのが果して實在してゐるか、それとも僕自身の發散物に過ぎなくて、無限の過去から、ただ一人存在して來た僕の自我の漸次に發展したもののなのか、一つも僕にはそれが證明されてゐない、……だが、僕は急いでこの話を切りあげよう。でない、君は今にも飛び立つて僕にかみかかりさうだからね。」

「君、何か面白い逸話でもしたらいいぢやないか。」とイワンは病的な口調で言つた。

「逸話なら丁度この問題にお誂へ向きのやつがありますよ。いや、逸話といふよりも傳説に近いね、君は『見てゐるくせに信じない』と言つて僕の不信を責めるがね、君、それは僕ひとりぢやない、僕らの仲間みんな今苦しんでゐる。それといふのも、みんな君らの化學のおかげなんだ。まだ原子だの、五感だの、四大原素だのと言つてゐた時代には、どうにかまとまりはついてゐたのだ。古代にも原子はあつたからね。だが、君らが『化學的分子』だとか『原形質』だとか、その他いろんなものを發見したことが分かる、僕らはすっかり尻尾を巻いてしまつた。すっかり混亂が巻き起されたのだ。何よりいけないのは迷信とか、愚にもつかない風説の絶えないことだ。さうした流言は君たちの間でも、われわれの間でも變りはないのだ、いや、かへつてわれわれの方が多いくらゐる。密告だつて同じことで、僕らの方にはある種の報告を受け付ける役所さへあるのだ。そこでこの原始的な物語だが、これはわれわ

れの中世紀のもので——君らの方ぢやなくつて、われわれの中世紀のものなんだ、——セブードもある商家の内儀のほかに、誰ひとりとして信するものがない話だ。これもやはり、人間界の内儀ぢやなくて、われわれの世界の内儀なんだがね。君らの世界にあるものは、みんな僕らの世界にもあるんだ、これは禁じられてゐることだけれど、友達甲斐に君だけに秘密を打ち明けるのだよ。その物語といふのは天國についてのこと、何でもこの地上に、深遠な思想をもつた一人の哲學者があつたのださうだ。彼は『法律も良心も信仰も、すべてを否定した』が、わけても、來世の生活を否定したのだ。それがやがて死んだのだ。彼はすぐに暗黒と死へ赴くものと思つてゐたのに、思ひがけなく彼の眼の前に、忽然として未來の生活が現はれたのである。彼は度膽を抜かれて憤慨した。『これはおれの信念に矛盾してゐる』と言つたものだ。このために彼は裁きを受けて、……いや、君、咎めないでくれ、これはただ僕が聞いただけの話だ、つまり、傳説に過ぎないんだから……ところで裁きの結果、億兆キロメートルの闇路（我われの世界では今基米を使つてゐるのだよ。）を歩いて行くやうに宣告されたのだ、この億兆キロメートルの闇路を通り抜けてしまふと、天國の門が開かれて、あらゆる罪が許される譯なんだ……」

「だが、君らの世界では、その千兆キロメートルの闇路の他に、どんな拷問があるんだい？」とイワンが異様に元氣づきなから遮つた。

「どんな拷問があるつて？ ああ、それは訊かないでくれ給へ。前には何やかやといろいろあつたが、今ではだんだん精神的なやつ、いはゆる『良心の苛責』といったやうな、馬鹿げたものがはやりだした

んだ。これもやつぱり君らの世界から来た『君らの人心軟化』の影響なんだ。だからね、得をしたのはただ良心を持たぬ者ばかりだ。だって、良心が全然ないのだから、良心の呵責ぐらゐ物の數ではないさ。その代り、まだ良心と名譽の觀念をもつてゐる、れつきとした連中はさすがに苦しんだね、……全く、まだ準備も出来てゐない地盤のうへへ、よその制度をまる寫しにした改革なんか持つて来たのは、百害あつて一利ないことさ！　まだ昔の火刑の方が、よつぽどいいくらゐだ。億兆キロメートルの闇の路を宣告されたその男は、突つ立つたまま暫らく四邊を見廻してゐたが、やがて路の眞中へ、ごろりと横になつて、『おれは歩くのはいやだ。主義として歩かない！』と言つたものさ。かりに露西亞の教養ある無神論者の魂を、鯨の腹の中で、三日三晩すねてゐたといふ豫見者ヨナの魂につきまぜると、丁度この路傍へ横になつた思想家の性格が出来あがる譯だ。」

「一體、何の上に寝たのだらう？」

「おほかた何か乗つかるものがあつたのだらうさ、君は笑つてゐるんだね？」

「えらい奴だ！」イワンは依然として異様に昂奮しながら叫んだ。彼は今ある思ひがけない好奇心を感じながら聴き入つてゐた。「ちや、何かい、今でも横になつてゐるのかい？」

「いや、ところがさうぢやないんだ。殆んど千年近くも寝てゐたが、その後立ち上つて歩き出したのだ。」

「何といふ馬鹿な奴だ！」と、イワンは神經的に、からからと笑つて叫んだが、なにか一心に考へてゐる様子だつた。「永久に横になつてゐるのも、億兆キロメートル歩くのも結局同じことぢやないか？」

だつて、それは百萬年も歩かなくぢやならないんだらう？」

「もつとずつと永くかかるよ。あいにく鉛筆もないが、勘定してみれば分かるよ。だが、その男はもう疾うに行き着いたんだ。そこから話が始まるのさ。」

「何、行き着いたつて？　どこから百萬年なんて年を取つて来たんだい？」

「君はやはりこの今の地球のことを考へてるんだね！　だが、この現在の地球なんでものは百萬度も繰り返されたものかも知れないぢやないか。地球の年限が切れると、凍つて、はぜ割れ、粉々に砕け、元を形づくるものに分解し、『水の中に穹蒼ありて』次ぎにまた彗星が生じ、太陽が生じ、太陽から地球を生ずるのだ。——この順序はもう無限に繰り返されてゐるかも知れないさ。そしてすべてが、以前と一點一畫も違はないんだ。とても不都合な我慢のならぬ退屈な話さ……」

「よし、よし、それで、行き着いてからどうなつたんだい？」

「天國の門が開かれて、彼がその中へ一歩踏み込むと同時に、まだ二秒とはたないうちに、——これは時計で言ふんだよ、時計で（尤も、彼の時計は、途中、彼のポケットの中で、原の要素に分解してしまつた筈だがね）——彼はこの、ほんの二秒にも充たない間に、億兆キロメートルどころか、億兆キロメートルを億兆倍にして、更に億兆倍を進めると喚くんだ。まあ、要するに、あれは『ホザナ』を歌つたのさ。おまけに、その薬があんまり効いちまつて、それで、そこにゐる割と高尚な考をもつた連中は、初めのうちは彼と握手する氣が進まなかつたほどだ。あんまり急に保守主義に飛び込んぢやつたといふわけです。いかにも露西亞人らしいだらう。もう一度いふが、これは傳説なんだ。ただ僕はかけ値



なしに卸すだけだ。僕らの方では、こんなことにかけては、今もつてこんな考へ方をしてゐるのさ。」

「君の正體を捉まへたぞ！」イワンは何か、やつとはつきり思ひ出すことが出来たらしく、いかにも子供らしい嬉しさを聲で叫んだ。「この億兆年の物語は、僕の自作だ！僕はその頃やつと十七で中學に通つてゐたのだ、……その當時、この話を作つてコロフキンといふ友達に話して聞かせたことがある。それはモスクワのことだ、……この話は非常に僕の特質を表してゐて、決して、よそから種を取つて來たものぢやないんだ、すつかり僕は忘れてしまつてゐたが、いま不意に頭に浮かんで來たんだ、いや、これは全く僕自身が思ひ出したことで、君が話したんぢやない。人間といふものは、どうかすると、數へきれないほどの事柄を無意識のうちに思ひ出すものだ。仕置場へ曳かれて行く時にでも、さうだ、……夢の中で思ひ出すこともある。君はつまり、その夢だ！君は夢だ、決して實在してなんかゐないんだ！」

「君がそんなにむきになつて僕を否定するところを見ると、」と紳士は笑つて、「君はまだたしかに僕を信じてゐるね。」

「いや、少しも信じてゐないさ！百分の一も信じてゐないよ！」

「しかし、千分の一ぐらゐは信じてゐるよ、薬も少量で済むのは、一番よく効くんだからね、白狀したまへ、君は信じてんだらう、たとひ萬分の一でも……」

「一分間だつて信じやしない！」とイワンは猛々しく叫んだ、「だが、信じたいとは思ふんだ！」と不意に彼は妙なことを言ひ足した。

「へっ！でも、たうとう、白狀したね！だが僕はお人好しだから、今度も君を助けてあげよう、ええ、君、これは僕が君の正體を捕まへた證據で、君が僕を捕まへたんぢやないよ！僕は君の作つた話を、わざわざ——君がもう忘れてしまつてゐた話を、君に話してやつたんだ、君がまるで僕を信じなくなるやうに。」

「嘘をつけ！君は自分の實在を僕に信じさせるために現はれたんだ。」

「たしかにその通りだ！だが、動搖や不安や、信と不信の戦ひ、——そんなものは、良心のある人間にとつて、たとへば君のやうな人間にとつては、時をり、首を縊つてしまつた方がましだと思はれるくらゐ、苦痛を與へるものだ、僕は君が多少、僕を信じてゐることが分かつたので、この物語をして、君に不信を注ぎこんだのだ。君を信と不信の間に迷はせるのが僕の目あてなのさ、新しいやり方だよ、君は僕をすつかり信じなくなつたかと思ふと、またすぐに僕が夢でなくて實在だといふことを信じ初めるのだ、ちやんと知つてるさ。そこで僕は目的を逐げる譯だ。でも、僕の目あては高尚なものだ、僕は君にごくごく小さい信仰の種を投げ込むのさ、さうすると、その種から一本の榊の木が生え出すのさ、ところがね、その榊の木と來たら大したもの、君がその上へ登ると、『荒野に行ひすましてゐる神父や淨らかな尼さんたち』の仲間へ入りたくなつてしまふんだ、何しろ君は内心非常に荒野に隠遁して蝗を食ひたがつてゐるからね。」

「悪黨め、それぢや、君はおれの魂を救ふつもりで、そんなに骨を折つてるのかえ？」

「たまには善いこともすべきもんだからね、君は憤慨してゐるのかい、どうも君は憤慨してゐるらしいな。」

「道化もの！ そんなら、君はいつかその蝗を食つたり、十七年も苔の生えるまで荒野で祈つた聖者を誘惑したことがあるかい？」

「いや君、それだけが僕の仕事だつたんだよ。世界も宇宙も、すっかり荒れ果てて、そんな聖者にはかり、かかり切りにしていたくらゐさ。何しろ、聖者といふものは、非常に高價なダイヤモンドだからな、かうした人一人だけでも、どうかすると、一つの星座に價することもあるものだ。——われわれの世界には一種特別な數學があるのさ。——かうした勝利はいやいや、どうしてどうして、大した値うちがあるものなんだ！ ところがさ、彼らの中のある者に到つては、全くの話だが、發達の程度が君にも劣らないくらゐで、彼らは信と不信の深淵を一時に見ることが出来るんだ。時には、役者のゴルブノフのいはゆる『眞逆様に』飛び込むといふやうな心境と、全く寸毫の差しかないやうなことがあるんだからね。」

「で、どうだい、君は\*鼻をもつて引き退つたのかい？」

「ねえ、君、」と客は鹿爪らしい調子で言つた、「そりやあ、とにかく、鼻をなくして歸るよりは、やつぱり鼻をつけて引き退つた方が都合がいいよ。ある病氣にかかつた侯爵（どうせ、これもきつと専門醫が治療をするだらう）が、つい最近、エズイタ教の神父に懺悔をする時に言つたとほりだ、僕もそこに居合はせなければ、とても面白かつたよ、『どうぞ、わたしの鼻を返して下さい！』と、かういつて侯爵が、自分の胸を叩くのさ。すると、『わが子よ、何事も測るべからざる神のみ心に依つて行はれるのです。時には大きな不幸も、眼にこそ見えなくても、非常に大きな利益をもたらすことがあるもので

す。つらい運命が、たとひあなたの鼻を奪つたとしても、最早、生涯だれ一人として、あなたのことを、鼻をもつて引き退つたなんぞといふことは出来ませんからね、そこにあなたの利益があるといふものです。』とその神父はうまく逃げをうつのだ、『神父様、それは何の慰めにもなりませんよ！』と侯爵は絶望的に叫ぶのだ、『わたしは鼻がちゃんと元のところにありさへすれば、一生、毎日々々鼻を持つて引き退つても満足なんです。』——『わが子よ、幸福といふ幸福を一時に求めることはなりません、それはこんな場合に於いてすら、あなたのことを忘れ給はぬ神様のことを恨むことになりますよ、それといふのも、若しあなたが今いはれたやうに、鼻さへあれば一生涯鼻を持つて引き退つても満足されるのならば、あなたの願ひは既にもう間接に充たされてゐるといふものですよ、つまり、あなたは鼻を失つたために、結局、一生涯鼻と一しよに残るやうな形になりますからね。』さう言つて神父は、嘆息をもらしたものだよ。」

「へっ！ 何て愚にもつかない話だ！」とイワンが叫んだ。

「なあに、君、これは君をひとつ笑はしてやらうと思つて、持ち出しただけのことさ、でも、これは全くエズイタ式の詭辯だよ、しかも、全く一言一句そのまま、いま君に話したとほりなんだからね、つい近ごろのことで、ずるぶん僕に厄介をかけたもんだ。この不仕合せな青年は家へかへると、その晩のうち自殺してしまつたよ、僕は最後の瞬間までその傍を離れなかつたがね、……このエズイタの懺悔室は、實際、僕の氣が減入つてゐる時など、何より面白いお慰みになるんだ。ところで、もう一つの事

\* 愚弄されるといふ意味。（譯者註）

件を話さうかな、これこそつい二三日まへのことなんだが、二十歳になる金髪のノルマン女、——器量といひ、姿といひ、氣立てといひ、全く涎れの流れさうな女なんだがね、それが年寄の神父のところへ行つたのさ、女は身を屈めるやうにして、小窓越しに自分の罪を神父に囁くぢやないか。そしたら、『わが子よ、どうしたのかな、また罪を犯したのか?』と神父が叫ぶんだ。『ああ、聖母様、御冗談ぢやありません! 今度は、あの人ではございません。』——『でも、いつまでそんなことを続けるのだえ、それに、お前さんはよくそれで氣まりも悪くないものだ。』——『Ah, mon père おお、主』と罪深い女は懺悔の涙にむせびながら答へる。『Ça lui fait tant de plaisir et à moi si peu de peine! あの人は大變くありませんでした。』』どうだ、まあかういふ答へを想像してみ給へ、これには僕も一本參つたよ、これは天性そのものの叫びだからさ、いや、清淨無垢どころぢやないよ、僕は即坐に、その女の罪を許して、踵をめぐらして引き退らうとしたが、つい氣が引かれて、後戻りをしたんだが、まあ、どうだらう、神父が小窓越しに、その晩の女との逢曳の約束をしてゐるつたら、——全く燧石のやうに固い年寄のくせに、このとほりまんまと片足を突つ込んでしまつたんだ、天性が、天性の眞相が勝利を占めたんだ! どうしたんだい、君はまた鼻であしらつて、憤慨してるのかい? どうすれば君の氣に入るんだか、まるで見當がつかないんだよ……』

「ほつといてくれ、しつこい悪夢のやうに君はおれの頭を搔き廻すんだ、」とイワンは病的に呻くやうに言つた。彼は自分の幻影に對して全く無力なのであつた、「僕は君と一しよにゐるのが退屈だ、たまらくな苦しい! 僕は君を追つ拂ふことが出来さへすれば、何ものをも辭さないんだが!」

「何度も言ふやうだが、君は自分の要求を少し加減しなけりやいけないう、僕なんかには偉大なもの、美しきものを所望されては困るよ。なあに、今に僕と君とはお互ひに仲よくやつて行けるからね、」と紳士は訓戒するやうに言つた。「君は全く僕が焰の翼をつけて、『雲のやうに鳴りはためきて、太陽のごとく、紅に光り輝やき』君の眼の前に現はれないで、こんなにもつつましやかな姿で出て來たんで、それで憤慨してるんだらう、第一にね、君の審美眼が辱められ、第二には、君の誇りが傷けられたんだ——どうしておれのやうな偉大な人間のところへ、こんな卑しい悪魔がやつて來たんだらう、つて、さう云ふ譯でね。全く君の中には既にベリンスキイが嘲笑つた、あのロマンチックな氣分が流れてゐるんだからね、現に僕はさつき君のところへ來るのも、コーカサスに勤めてゐる四等官のなりをして、燕尾服に旭日獅子勳章を帯びて、冗談半分に現れてやらうかと思つたが、まあ、せめて北極星章か、それとも狼星章ウルフくらゐならいいけど、旭日獅子勳章なんか燕尾服に着けて來たら、またもや君にぶん殴られやしないかと心配したんだ。君はしきりに僕を馬鹿だと言ふね。僕は頭の點では君と同一に見られたなんていふ飛んでもない大それた了見はもつてゐないよ。メフィストフェレスはファウストのところへ現はれて、自分は悪を望んでゐながら、その實、善ばかりしてゐると、自分から證明したつけね。しかし、あいつが何て言つたつて向うの勝手だが、僕はまるで反對だよ、僕はこの世界中で、眞理を愛し、心から善を望んでゐるただ一人かも知れない。僕はあの十字架にかかつて死んだ神の『言』なる人が、その右側に磔にされた盜賊の魂を自分の胸に抱いて昇天した時、『ホザナ』をうたふ小天使の悦ばしさうな聲と、天地も震ふばかりの雷のやうな、大天使たちの歡びの叫びを聞いた。その時、僕

は、あらゆる氣高きものにかけて誓ふが、實際、僕自身もその讚美者の仲間にはいつて、一緒に『ホザナ』をうたひたかつたよ！ もう少しで、讚美の歌が僕の胸からこみ上げてくるところだつた、……僕が承知してるとほり、とても多感で、藝術的に敏感だからな。ところがだ、常識——ああ、僕の性格の中で何よりも不幸な特質たる常識がだ、——僕を義務の限界の中に閉ぢ込めて、折角の好機を逸せしめたんだ！ 何しろ、そのとき僕は、『おれがホザナをうたつたら、どうなることだらう、何もかも消滅して、何ひとつ事件が起こらなくなるだらう。』と考へたものだから。それで、僕は自分の本分と社會的境遇のために、せつかく、心に生れた潮時を抑へつけて穢れた仕事に携はらなければならなかつたのさ。誰かが善の名譽をすつかり獨り占めにしてしまつて、僕にはただ不潔な仕事だけしか残されなかつたんだ。でも、僕は詐欺的な生活の名譽を羨むものではない。僕は虚榮が大きらひと來てゐるからね。宇宙に於けるあらゆる存在物の中で、なぜ僕だけが身分のあるすべての紳士といふ紳士から呪はれたり、靴で足蹴にされたりするやうな運勢を背負はされてゐるんだらう。だつて、人間の體に宿つた以上、時には、こんな結果を招いても、やむを得ないからね。僕はもとよりそこに秘密のあることは承知だ。ところが、人はどうしてもその秘密を僕に明かさうとしないんだ。尤も、僕がその秘密の真相を覺つて、不意に『ホザナ』を歌ひだしてみ給へ、それこそ忽ちあの大切なマイナスが消滅して、全宇宙に叡智が生じ、それと同時に一切は終りをつけて、新聞や雑誌までなくなるだらう。だつて、さうなつては誰が新聞や雑誌を読むものかね。だが、僕は結局あきらめて、自分の億兆キロメートルを歩いて秘密を知るよりほか仕方がないだらう。それまでは、あくまで僕は世を白眼視しながら、齒を喰ひしぼつ

て、己れの使命を果たすつもりだ、一人を救ふために數千人を滅ぼすつもりだ。その昔一人の義人ヨブを得るために、どれだけ多くの人が殺され、どれだけ立派な人の名聲が臺なしにされなければならなかつたか！ そのお蔭で僕はとても酷い目に遭はされたよ、で秘密があばかれない間は僕にとつて二つの眞實があるのだ。一つの方は少しもまだ分かつてゐなかつたが、あの世の連中の眞實で、もう一つの方は僕自身の眞實なのだ、しかし、どちらが餘計に勝れたものであるか、それはまだ分からない……おや、君は眠つてるのかね？」

「あたりまへさ、」とイワンが腹立たしげに呻いた、「僕の性質の中にあるあらゆる馬鹿げたものや、もうすつと昔に使ひ果したのものや、僕の智力で咀嚼しつくされたものや、腐肉のやうに投げ捨てられたものを君はまるで何か新奇なものやうに、今更らしく勤めてるんぢやないか！」

「またしくじつたかな！ 僕は文學的な辭句で君を誘惑しようと思つたんだがね。この天上の『ホザナ』は、實際のところ、まんざら悪くもなかつたらう？ それに今のハイネ派の皮肉な調子もさ、さうぢやないかね？」

「いや、僕は一度だつてそんな卑劣な下郎になつたことはない！ どうして僕の魂が君みたいな卑しい下郎を生むものか。」

「ねえ君、僕はある一人の實に愛すべき立派な露西亞の貴公子を知つてゐるがね、若い思想家で、文藝美術の愛好者で『大審問官』と題する素晴らしい劇詩の作者なのさ……僕はただこの男だけのことを念頭に置いてたのさ！」

『大審問官』のことなど口にするにはならんぞ、』とイワンは恥づかしさにさつと顔を赧らめて叫んだ。

「ぢや、『地質の變動』にしようか？ 覚えてゐるかね？ これもなかなか好い詩だよ！」

「僕を殺すつて？ まあさう言はないで終ひまで言はせてくれ給へ、僕がやつて来たのもその満足を味はふためなんだからね、ああ僕は生活に對する渴望に慄へてゐる、さうして若い熱烈な友人の空想が大好きなんだ！ 君はこの春こちらへやつて来ようとした時、こんなことを斷定したぢやないか、『この世には新人があつて、彼らはすべてを破壊して、人肉食主義からやり直さうと思つてゐるのだ、馬鹿な奴らだ！ おれに訊ねもしないで！ おれの考へでは何も破壊する必要はない、ただ人類の中にある神の觀念さへ打破すればよいのだ。先づこの邊から仕事に取りかからねばならない！ ここから初めなけりやならないのだ——ほんとに、何にも分らない盲らどもだ、一たび人類が一人のこらず神を否定してしまへば（この時代が地質學以上の時代と並行してやつてくることをおれは信じてゐる）その時は、以前の世界觀——殊に以前の道徳が、人肉食主義を待つまでもなく、自然に滅びて、新しいものが起こつてくる、人間は協力して人生から取れるだけのものを取るだらう、しかし、それはただ現在の世に於ける幸福と悦びのためなんだ、人間の精神は神聖な、絶大な誇りに向上して、そこに神人が出現するだらう。人間は意志と科學によつて、果てしもなく自然の範圍を侵略しながら、それに依つて以前のやうな天の愉樂に代り得るほどの高遠なる愉樂を刻々に感じるやうになる。すべての人間は自

分が全然、死滅し果てるので、決して復活するものではないことを知りながら、しかも神のやうに昂然として悠々、死につく、彼の自尊心は人生の束の間であることを怨むのが無益だといふことを教へるだらう、彼は報酬を度外視してその兄弟を愛しむだらう、愛は人生の瞬間に満足を與へるのみだが、束の間のものであるだけに、一層愛の焰を熾ならしめる。それは恰かも、前に死後の永遠の愛を望んだときに、愛の火が漫然と擴がつたのと同じ程度である……』つてね、實に巧みな表現ぢやないか！

イワンは兩手で耳をおさへて、ちつと下を見ながら坐つてゐたが、急に身體ぢゆうがぶるぶる慄へ出した、紳士の聲はつづいた。

「で、目下この問題は次ぎのやうな點にある——と、その若い思想家は考へたのだ——即ち、果してそんな時代がいつか来るものだらうか、どうだらう？ 若し来るとすれば、それに依つてすべては解決され、人類も永遠に基礎を得るわけである。しかし、人類の苔があまりに深く根を下してゐるから、殊によつたらそれが千年かかつて満足に實現されないであらう。だから今この眞理を認めたものは、誰でもその新しい主義の上へ勝手に自分の基礎を立てることが出来る、この意味に於いて人間は『何をしても構はない』、それに若しこの時代がいつまでも来なくても、どうせ神も靈魂の不死もないのだから、新しい人はこの世にたつた一人きりであらうとも、人神となることが出来る。そして人神といふ新しい位についたうへは、必要な場合には以前の奴隸人の道徳的限界を平氣で飛び越えてもさしつかへない筈だ、神のために法律はない！ 神の立つところは即ち神の場所だ！ おれの立つところは直ちに第一の場所となる……』何をしても構はない、それつきりのことだ！』これはまことに結構なことだよ、だ

が、もし詐欺をしようとするのになぜ眞理の裁可を要するのだらう？　しかし、これが露西亞の現代人なんだ、露西亞の現代人は眞理の裁可なしには詐欺ひとつする元氣もないんだ、それほど眞理を愛してゐるんだ……」

客は自分の雄辯に、調子づいたらしく、ますます聲を高めて、嘲笑ふやうに主人を眺めながら滔々と辯じ立てた。けれど彼がまだ論じ終らないうちに、イワンがいきなり卓の上からコップを取つて投げつけた。

「Ah, mais c'est bête enfin ああ、しかしそれは要するに馬鹿なことだ」と客は長椅子から飛び上がると、茶の飛ばつちりを指で拂ひ落しながら叫んだ、「ルーテルのインキ壺を思ひ出したんだね！　自分で僕を夢だと思ひながら、その夢にコップを投げつけるんだ、まるで女のやうな仕打ちぢやないか、耳を塞いでゐるのは聴かないふりをしてゐるんだと思つたが、案の定さうだつたのだ……」

そのとたんに外から激しく、執拗に窓を敲く音が聞えた。イワン・フォードロキッチは長椅子から飛びあがつた。

「そらね、窓を敲いてるぜ、開けてやりたまへ、」と客が叫んだ、「あれは君の弟のアリョーシヤが、とても思ひがけなく面白い報らせを持つて來たんだよ、それは僕が受け合つてやる！」

「黙れ、詐欺師め、アリョーシヤが來たんだつてことはおれの方が、貴様より先きから知つてゐるんだ、何だかそんな氣がしてゐたんだ、弟が來たとすれば、むろん素手ぢやない、むろん『知らせ』を持つて來たに決つてるさ……」とイワンは夢中になつて叫んだ。

「開けてやりたまへ、開けてやりたまへ、外は吹雪だ、君の弟が來てるんぢやないか、Mr. sait-il le temps qu'il fait? C'est à ne pas mettre un chien dehors……」君、天氣がこのとほりぢやないか、とても外へ犬も出してはおけないよ。

窓を叩く音はなほも續いた。イワンは窓へ駈けよらうとしたが、何だか手足を縛られたやうな氣がした、彼はその束縛を脱するため全力を盡したが、どうすることも出来なかつた、窓を敲く音は益々高くなつて、遂に束縛の綱が切れた。イワンは長椅子から飛び上がった、彼はきよとした眼つきで四邊を見廻した、二本の蠟燭は殆んど燃えつきさうになつてをり、たつた今、お客に投げつけた箸のコップは、彼の眼前の卓の上にちゃんと載つてゐて、向ふの長椅子の上には、もはや誰もゐなかつた。窓を敲く音は依然として止まなかつたが、今夢の中で聞いたほどには激しくなく、むしろ極めてひかへ目であつた。

「今のは夢ではない！　いや斷じて夢ではない！　さうだ、斷じて夢ではない。あれはいま實際にあつたことだ！」とイワン・フォードロキッチは叫んで、窓際へ駈け寄ると通風口を開けた。

「アリョーシヤ、僕があれほど來てはならんと言つたぢやないか！」と彼は狂暴に弟を嗚りつけた、「さ、何の用だ、一口で言へ、一口で。分かつたか？」

「スマルチャコフが、一時間前に、首を縊りましたよ、」とアリョーシヤは外から答へた。「玄關へ廻つてくれ、今すぐ開けるからな、」とイワンは言つて、アリョーシヤのために扉を開けに出た。

『それは、あいつが言ったんだ』

アリョーシャは中へはいるといきなり、一時間まへに、マリヤ・コンドライチエヴナが自分のところへ駆けつけて、スメルヂャコフの自殺したことを知らせたとイワンに告げた、『わたしがね、サモワルを下げにあの人の部屋へはいると、あの人は壁の釘にぶら下つてゐるぢやありませんか』とマリヤ・コンドライチエヴナが言った、『警察へ届けたんですか？』といふアリョーシャの質問に對して彼女は、まだ誰にも知らせない、『何はさておき、あなたのところへ眞すぐに駆けつけたんですわ、ずつと駆けとほして来たんですよ』と答へた。彼女はまるで氣でも違つたやうになつて、木の葉のやうにぶるぶると慄へてゐたさうである。アリョーシャがマリヤ・コンドライチエヴナと一緒にその家へ駆けつけた時には、スメルヂャコフはまだそのままぶら下つてゐた。卓の上に遺書が載つてゐて、それには『自分は誰にも罪を及ぼさないために、自分の意志と希望に依つて、我が生命を斷つ、』と認めてあつた。アリョーシャはその遺書を卓の上に乗せておいたまま、早速、警察署長の許へ赴いて一部始終を報告した。『そしてまつ直ぐにそこから兄さんのところへ来たのです、』とイワンの顔をまじまじと眺めたま

ま、アリョーシャは、言葉を結んだ。彼はイワンの顔を見つめて、ひどくびつくりしたやうに、話をし  
てゐる間も兄の顔から寸時も眼を離さなかつた。

「兄さん、」と不意に彼が叫んだ、「兄さんは大變身體の具合が悪いんでせう！ 兄さんは僕を見てい  
らつしやるだけで、僕のいつてゐることなんかお分かりにならないやうですね。」

「お前が来てくれてよかつたよ、」と、アリョーシャの聲が、一かう耳にもはいらなかつたらしく、イワ  
ンは物思はしげに言った、「だが、おれは奴が首を縊つたのを知つてゐたのさ。」

「誰から聞いたんです？」

「誰からか分かんが、しかし知つてゐたよ、待てよ、僕は知つてゐたのかしら？ さうだ、あいつ  
が僕に言つたんだ、あいつが、たつたい僕に言つたんだ……」

イワンは部屋の眞中に立つて、相變らず愁はしげに俯向きながらかう言つた。

「あいつは誰のことですか？」とアリョーシャが思はずあたりを見まはしながら訊ねた。

「あいつは擦り抜けて行つてしまつたんだよ。」

イワンは顔をあげて、靜かに微笑んだ。

「あいつはお前を——鳩のやうに清淨無垢なお前を怖れたんだよ、お前は『清い小天使』だ。ドミト  
リイはお前を小天使と呼んでゐる。小天使……大天使の歡喜の叫び！ 大天使つて一たい何だ？ 一つ  
の星座かしら、だが、星座つてものは、何か化學的分子に過ぎないんだらう……獅子と太陽の星座つて  
ものがあるかい、お前知らないかえ？」

「兄さん、お掛けなさい！」とアリョーシャがびつくりして言った。「後生ですから長椅子に腰掛けて下さい、兄さんは謔言を言ってるんですよ、さあ、枕をして横におなりなさい、タオルを濡らして頭へ載せてあげませうか？　いく分よくなるかも知れませんから。」

「タオルを取つてくれ、その長椅子の上にあるだろ。さつきそこへ抛つたんだから。」

「ありませんよ。まあじつとしてゐらつしやい、タオルのあるところは分かつてゐるから、そら、あすこにある、」と部屋の隅にある洗面臺のところから、まだたたんだままで、一度も使はないきれいなタオルを見つけて出して、アリョーシャが言った。イワンは怪訝さうな顔つきで、そのタオルを見つめた。忽ち記憶が彼の心に蘇へつた。

「ちよつと待つてくれ、」彼は長椅子の上に取りあがつた。「僕はさつき一週間まへにあすこから持つて来て、水で濡らして頭へ載せてゐて、それからまたあすこへ抛り出しておいたんだがなあ……どうしてこんなに乾いてるんだらう？　他にはもうなかつたのに。」

「兄さんはこのタオルを頭へ載せてたんですつて？」とアリョーシャが訊ねた。

「さうだよ。そして部屋の中を歩き廻つてたんだ、一時間まへにさ……それにまた何だつて蠟燭がこんなに燃えたんだらう？　いつたい何時だい？」

「もうすぐ十二時ですよ。」

「いや、いや、いや！」と、イワンは急に喚き出した。「あれは夢ぢやない！　あいつは本當に来てゐたんだ、そこに坐つてゐたんだ、その長椅子の上に。お前が窓を叩いたとき、おれはあいつにコップを

投げつけたんだ……このコップだよ……いや、まてよ、おれはその前に、もう眠つてゐたのかな、だが、この夢は夢ぢやないぞ、前にもこんなことがあつたんだ。アリョーシャ、僕はこのごろよく夢を見るよ……だが、それは夢ぢやない、現つなんだ、僕は歩いたり、喋つたり、ちやんと見たりするのだ……が、それでゐて眠つてゐるんだ。だがあいつはそこに腰かけてゐたんだよ、ここにゐたんだ、この長椅子の上に。あいつは、馬鹿の骨頂だよ。アリョーシャ、あいつは馬鹿の骨頂だよ、」と、イワンはだしぬけに笑ひ出して、部屋の中を歩き始めた。

「だれが馬鹿なんですか？　兄さん、だれのことを言つてゐるんです？」とアリョーシャはまた心配顔に訊ねた。

「悪魔だよ！　あいつはよく僕のところへ来るやうになつてね、もう二度も来た、いや三度だつたかな？　あいつはこんなことを言つておれをからかふんだ、『君は僕がただの悪魔で、焰の翼を持ち雷のやうに鳴りはためき、太陽のやうに照り輝やく魔王でないのが不服のやうだね、』なんてね。あいつは魔王ぢやない。あいつは嘘つきだ。あいつは自称魔王だ、あいつはただの悪魔だ、けちな小悪魔だ、あいつは錢湯にさへ行くんだからな、あいつの着物をひん剝いてやつたら、きつと長い尻尾が出るに違ひない、まるで犬のやうに、一アルシもあるすべすべした茶いろの尻尾がさ……アリョーシャ、お前さむいだろ、雪の中を歩いて来たんだからな。お茶を飲みたくないかい？　え？　冷たいかつて？　何ならお茶を言ひつけようか？　C'est a ne pas mettre un chien dehors、犬を外へ出してはおけなだよ……」

アリョーシャは急いで洗面器の傍へかけ寄つてタオルを濡らすと、無理やりイワンを坐らせて、その



頭へタオルを載せた、そして自分もその傍に腰かけた。

「お前はさつきリーズのことを何か僕に言つてたね？」とイワンはまた話し出した。(彼は大變口輕になつた)、「おれはリーズが好きだよ、おれは彼女のことでお前にひどいことを言つたね、だが、おれは嘘だよ、おれはあれが好きなんだ……おれは明日のカーチャが何より心配だ。將來のことが。あの女は明日おれを投げ飛ばして足で踏みにぢるだらう、あの女はおれが嫉妬のためにミーチャを陥し入れると思つてゐるんだ、さうだよ、たしかにさう思つてゐるんだ！　ところがさうぢやないんだ！　明日は十字架だ、絞首臺ぢやないんだ。なあに、あれが首なんか縊るものか。アリオーシャ、僕がどうしたつて自殺なんか出来ないつてことをお前知つてるかい！　いつたいそれは卑屈のためだらうか？　おれは臆病者ぢやない。生の渴望からだ！　スメルチャコフが首を縊つたことを、どうしておれが知つてたんだらう？　うん、さうだ、それはあいつが言つたんだ……」

「ぢやあ、誰かほんとにここにゐたと思ひこんでゐるんですね？」とアリオーシャが訊ねた。

「その隅つこの長椅子に坐つてゐたんだ。あいつをお前が追つ拂つてくれればいいんだがなあ、あ、さうだ、ほんとにお前が追つ拂つてくれたんだよ。あいつはお前が来るとすぐに消えてしまつたんだ。アリオーシャ、おれはお前の顔が好きだよ、ね、おれはお前の顔が好きなのさ。ところがあいつはね、僕なのさ、アリオーシャ、僕自身なのさ。みんな僕の下等な、卑劣な、輕蔑すべきものの現はれなんだよ！　さうだ、僕は『ロマンチスト』だよ、あいつもそれを指摘したんだ……尤も、これは根據のない讒誣だがね。あいつは馬鹿の骨頂だよ。だが、そこが奴の取柄なのさ。あいつは狡猾だ、動物的に狡猾

だよ。あいつはおれの痛癢玉を破裂させる手を知つてゐたんだ。あいつといつたら、おれがあいつを信じてゐるなどからかつて、おれに聴き耳を立てさせをつたんだ、あいつはおれを子供のやうに愚弄した。だが、あいつがおれについて言つた言葉の中には本當のことがたくさんあつた。おれは自分自身に向つてあんなことを言ふことはとても出来ない、ね、アリオーシャ、ね、」とイワンは怖ろしく眞面目に、何もかも打ち明けるやうな調子でかうつけ加へた、「僕はね、あいつがほんとにあいつで、僕自身でなかつたら、どんなに有難いんだか知れないがなあ！」

「そいつが随分、兄さんを惱ましたんですね、」とアリオーシャは同情に堪へぬもののやうに兄を眺めながら言つた。

「僕をからかつたのさ！　それがなかなかうまいもんだ。『良心！　良心つて何だい？　そんなものは僕が自分で作つたものぢやないか、何を僕は苦しむんだらう？　つまり習慣のためなんだ、七千年以來の全人類の習慣のためだ。そんなものをかなぐりすてて我々は神にならうぢやないか』さう、あいつが言つたんだ、さうあいつが言つたんだ！」

「ぢや、兄さんぢやないんですね？」とアリオーシャが噂々とした眼で兄を見つめながら、堪へ切れなくなつて思はず叫んだ、「なあに、好きなことを言はせ、おいたらいいでせう、あんな奴はうつつやつておしまひなさい、忘れておしまひなさい！　兄さんがいま呪つてゐるものをみんなあいつに持つて行かせておしまひなさい、二度と再び歸つて来ないやうに！」

「さうだな、だが、あいつは意地が悪いんだ、あいつはあいつだ、アリオーシャ、あいつは實に

無禮な奴だよ」とイワンは口惜しさうに聲を震はせながら言った、「おれに言ひがかりをしやがつたんだ、いろいろと言ひがかりをしたんだ、面と向つておれを誹謗したんだ、『ああ、君は善行を完成しようとしてゐるんだ、父を殺したのは自分だ、下男が自分の教唆で殺したと言ひに行くんだらう……』なんて……」

「兄さん、」とアリオーシャが遮つた、「お止しなさい、殺したのはあなたぢやありません、それは嘘です！」

「あいつはかういふんだよ、あいつがさ、あいつは實によく知つてゐるからね、『君は善行をしようと思つてるんだが、そのくせ善を信じてゐない——だから君は怒つたり苦しんだりしてゐるんだ。だから君はそんなに復讐的な氣持になるんだ』さうあいつは僕に面と向かつて言ふんだ。あいつは自分で自分の言ふことをちやんと心得てゐるんだ……」

「それは、兄さんが言つてゐるので、あいつぢやありませんよ、」とアリオーシャは悲しさうに叫んだ、「兄さん病氣のせいで謔言を言つて自分で自分を苦しめてるんですよ！」

「さや、あいつは自分で自分の言ふことをよく心得てるんだ、あいつが言ふのにはね、『君が自由に行くのは自尊心のためだ、君は立上つて下手人はわたしです、どうしてあなた方は怖ろしさうに縮みあがるのです？ あなたは出鱈目を言つてゐます！ 僕はあなた方の意見を輕蔑します！』と言ふつもりなんだらう、つて——あいつは僕のことをこんな風に言ふのさ。それからまた出し抜けに『だが、ね君、君は他人に賞めて貰ひたいんだよ、あれは眞犯人だ、下手人だ、けれど何といふ偉い人間なんだらう、

兄を救はうと思つて自白したんだ、と言つてね、』こんなことも言つたんだよ。だがアリオーシャ、これこそ眞赤な嘘だよ！」とイワンは急に眼を光らせながら叫んだ「僕はくだらぬ連中に賞められたくなんかないさ、それはあいつが嘘をついたんだ、アリオーシャ、それは誓つて嘘だよ、だからおれはあいつにコップを投げつけてやつたら、コップがあいつの面に當つて粉みじんになつたよ。」

「兄さん、氣を落ちつけて下さい、もうおよしなさい！」とアリオーシャは歎願するやうに言った。

「いや、あいつは人を苦しめる手を知つてやがる。あいつは残酷な奴だよ。」イワンは弟の言葉には耳も借さないで喋り続けた。「おれはいつでもあいつが何のためにやつて來るのか、ちやんと知つてゐたよ。『君が自尊心から告白に行くとしても、やつぱり心の中では、スメルチャコフだけが罪に落ちて、流刑になり、ミーチャは無罪放免となり、自分はただ良心の苛責を受けるだけで——（ねえ、いいかい、アリオーシャ、あいつはさう言ひながら笑やがつたんだよ）——世間の人からは褒められるかも知れないと、そんな望みを抱いてゐたんだらう。だが、もうスメルチャコフは死んでしまつた。首を縊つてしまつた。かうなれば、あす法廷で君だけが何と言つたつて、誰がそれを信用するものか！ それなのに君は行かうとしてゐる、さうだらう、行かうとしてゐるんだらう。君はやつぱり行くに違ひない。行く覺悟でゐる。かうなつてしまつた今、君は何しに行くんだね？』と、かうあいつは言ふんだよ。怖ろしいことを言ふ奴だ。アリオーシャ、僕はこんな質問を辛抱して聴いちやゐられないんだ。こんなことを僕に對して訊くなんて、何といふ奴だらう！」

「兄さん、」とアリオーシャが遮つた。彼は怖ろしさに胸も潰れるやうに感じながら、それでもまだ兄

を正氣づける望みを失つてゐないらしかつた、「誰もまだスメルチャコフの死んだことを知らないのに、また誰ひとりそれを喚ぎ出す暇もないのに、どうしてあいつは、僕の来る前にそれを兄さんに話すことが出来ませう！」

「あいつは話したんだよ、」と、イワンはきつぱり言ひ切つた。それには一點の疑ひを挿む餘地すら與へなかつた。「實を言へば、あいつはそのことばかり言つてゐたやうなものだよ、『もし君は善行を信じて、誰ひとり自分を信じなくても構はず、主義のために行く、と言ふなら至極、結構だよ、しかし、君はフォードル・パーヴロキッチ同様の仔豚ぢやないか。善行が一體、君にとつて何だ？ 若しも犠牲がなんの役にも立たないとすれば、一體なんのために法廷へ出かけるんだ？ それはかうだ、何のために行くのか、自分自身で知らないからなんだ！ それに君は覺悟が出来てゐるのかね？ まだ覺悟は出来てやしないぢやないか？ 君は夜つびで腰かけたまま、行かうか行くまいかと思ひ惑ふことだらう。だが、結局、君は行くだらう、そして自分でも行くことを知つてゐる。君はどちらに決めるにしても、その決心が自分から出たのでないことを知つてゐる。君は行くだらうが、それは行かないでゐるだけの勇氣がないからだよ。なぜ勇氣がないのか——それは君自身で推測しなきやならないね。これは君に課せられた謎さ！』そしてあいつは立ち上がると、ぶいと出て行つてしまつたのだ。あいつは、ちやうどお前が来るのと入れ代りに行つたのだ。アリョーシャ、あいつは、おれを臆病者だと言やがつたよ！  
*Le mot de l'énigme!* あの謎みた  
いな言葉! は、つまりおれが臆病者だつていふのさ！ 『そんな驚に大地の上が飛べるものか！』と、あいつはつけ足しをつたよ、あいつがさ！ スメルチャコフもやつぱりさう言ひを

つたつけ。あいつは殺してしまはなけりやならない！ カーチャは僕を輕蔑してゐる。それは一と月も前からちやんと分かつてゐる。それにリーザまでが輕蔑し始めたんだ！ 『褒められたさに行く』なんて嘘にも程がある！ アリョーシャ、お前もやつぱりおれを輕蔑してゐるだらう。僕はまた、お前が憎くらしくなつた！ さうだ、あの碌でなしも憎んでゐる、あの碌でなしが憎らしいんだ！ あんな碌でなしなんか助けてやりたくない、勝手に監獄の中で腐つてしまふがいいんだ！ あいつは讚美歌をうたひだしやがつたぞ！ ああ、おれはあす出かけて行つて、奴らの面前に立つて、みんなの顔に唾を吐きかけてくれよう！」

彼は前後不覺のやうに跳り上がると、頭のタオルを投げ棄てて、またもや部屋の中を歩き始めた。アリョーシャはさつきイワンが言つた、『僕はうつで眠つてゐる……歩いたり、喋つたり、見たりしてゐるくせに、やはり眠つてゐるんだ、』といふ言葉を思ひ出した。今のがちやうど、それであつた。アリョーシャはイワンの傍を離れなかつた。一走り行つて、醫者を呼んで來ようかとも、ふと考へたが、兄をただ一人残して行くのが不安であつた。さうかといつて、兄の傍についてゐて貰へるやうな人もなかつた。次第にイワンは正氣を失つて行つた。それでも彼はやはり喋り續けてゐた——ひつきりなしに喋りつづけてゐたが、その言ふところは支離滅裂だつた。舌まはりさへしどろもどろだつたが、突然、彼は激しくよろめいた。アリョーシャは矢庭にそれを支へて、別に反抗もしないのを幸ひ、寢床へ連れて行つて、兎も角も着物を脱がせると、そこへ寝かせた。アリョーシャはそれから二時間もイワンを見た。アリョーシャは枕を持つて來ると、着物も脱がないで長椅子の上に横になつた。彼は眠りに落ちよ

うとしながらも、ミーチャのため、イワンのために神に祈つた。彼にはイワンの病気がだんだん分かつて来た、『傲慢な決意の苦しみだ、深い良心の苛責だ！』兄が信じなかつた神と、神の眞理が、飽くまで信服を拒む心に打ち克つたのだ、『さうだ、』と、もう枕につけられたアリョーシヤの頭に、こんな想念が閃いた、『さうだ、スメルヂャコフが死んでしまつた限り、もう誰ひとりイワンの供述を信する者はあるまい。けれど、イワンは行つて供述するだらう！』アリョーシヤは靜かにほほ笑んだ、『神が勝利を得るに決まつてゐる！』と彼は考へた。『眞理の光明の中に立ち上がるか、それとも……自からの信じないものに仕へたがために、自分を呪ひ、人を恨んで、憎悪の中に滅びてしまふかだ。』かうアリョーシヤは痛ましげに附加へると、再びイワンのために祈るのであつた。

## 第十二篇

### 誤れる裁判

#### I

#### 運命の日

私の書いた出来事のあつた翌くる日の朝の十時に、當地の地方裁判所の法廷がひらかれて、ドミトリイ・カラマゾフの公判が始まつた。

前もつて、しつかりと念を押しておくが、法廷で起こつたことを、残らず傳へるといふことは、到底わたしらのよくするところではないと思ふ。當り前に充分に傳へることはおろか、相當の筋道を立てて傳へることも出来さうにもないのである。若し何もかも残らず思ひおこして、省くことの出来ない一切の説明を加へるとしたならば、それこそ一冊の書物全部——それも非常に大部な書物をさへも書かなくてはならないと絶えず私には考へられる。さればといつて、わたしの傳へることが、單に私一個人が心

を打たれ、特に記憶にとどまつてゐる點だけに限つてゐると言つて、私をあまり咎めないでいただきたい。私はうつかり第二義的なことを最も肝要なことと思ひ込んだり、ゆるがせに出来ない最も必要な點をすつかり抜かしてしまつたりしたかも知れぬ、……それにしても、こんな言ひ譯は止した方がよさうである。とにかく、私は出来るだけのことをやつてみよう、さうすれば、讀者諸君の方でも、私が出来るだけのことはやつたといふことを自ら諒解されるであらう。

そこで、先づ最初に、法廷へ入るに先き立つて、當日、特に私を驚ろかしたことを述べることにしよう。尤も驚ろかされたのはわたし一人ではなく、後でわかつたことではあるが、誰も彼も同じことであつた。話はかうである。この事件が餘りにも多くの人々の興味をひいてゐたといふことも、誰もが裁判の始まる日を熱心に待ちかねてゐたといふことも、公判のことがこの町で最近二ヶ月といふもの、さまざまに取沙汰され、豫想され、絶叫され、空想を逞しうせしめてゐたといふことも、誰しもがよくよく承知のことであつた。また、この事件が露西亞ぢゆうに反響をよびおこしてゐたといふことも衆知のことであつた。しかし、これがただに當地だけでなく、到るところで、また老若男女の別なく、人々をそれほどまでに熱狂させ、興奮させ、戦慄させてゐようとは矢張り當日になるまで誰しも思ひがけないところであつた。この日は當地をさして、單にこちらの縣廳のある町からばかりでなく、全國の他の町々からも、果ては、モスクワやペテルブルグからさへも、ぞくぞくと傍聽者が乗り込んで來た。法律家たちも來れば、何人かの知名の士、おまけに貴婦人たちまでがやつて來たのである。傍聽券は一枚のこらず出はらつてしまつた。男たちの中で、特に地位のある知名の人々には、裁判官席のすぐ後ろに特別の席

さへしつらへられた。そこには、こちらでは未だ會て許されたためしのない安樂椅子がずらりと並べられ、それには、色とりどりの連中が腰を下ろしてゐた。殊に多かつたのは婦人たちで、彼女たちは、當地をはじめ、他縣からもやつてきたものであるが、凡そ傍聽人總數の半ば以下といふことはあるまいと思ふ。各地からはるばるやつてきた法律家だけでも非常な多數に上り、併も傍聽券は懇願されたり哀願されたりして、すでにすつかり出拂つてしまつてゐたあとだつたから、彼らをどこへ着席させたものかと迷つたほどであつた。私は法廷の端の高壇のうしろに、急場の間に合せて特別な圍ひがつくられ、そこによそから來た法律家たちを收容するのをまのあたり見たが、椅子といふ椅子は場所を廣くするため、この圍ひから残らず持ち出されたので、彼らはぢつと立つたままでもなければならなかつた。それでも先づ先づよかつたときまで彼らは感じてゐたのである。かやうな譯で、どやどやと押し込んで來た一群の傍聽人たちは、ぎつしりつめこまれて、肩と肩とを擦り合はせながら、『事件』の終るまですつと立ち通したのである。

婦人たち、わけても、よそからやつて來た婦人たちの中には、ひどくめかしこんで法廷の特別席に陣どつてゐるものも五六人はゐたが、大部分の婦人たちはめかすことさへも忘れてゐた。女たちの顔にはヒステリックな、貪るやうな、病的な、殆んど好奇心ともいふべきものが讀まれるのであつた。この法廷に集つた全部の連中の特質の中で、ぜひ指摘しておかねばならぬことが一つあるが、それは、その後多くの人々の觀察によつても實證されたことではあるが、殆んど全部少くとも大多數の婦人たちが、ミーチャの味方であつて、彼の無罪を主張する側に立つてゐたといふことである。恐らく、その主なる

理由は、ミーチャを女ごころの征服者であるかのやうに考へてゐたからであらう。事實、二人の女性の競争者が法廷に現はれるといふことは、よく分かつてゐた。中の一人、といふのはカテリーナ・イワーノヴァであるが、彼女は殊に一同の關心を惹いてゐた。彼女については、かなり珍しい噂が随分いろいろと立てられてゐた。ミーチャが犯罪まで犯したのにも拘はらず、彼女が一方ならぬ愛慾をもつてゐるといふことについては、驚ろくべき逸話が傳へられてゐた。わけても、彼女が氣位が高いといふことや（彼女はこの町にゐても、殆んど誰をも訪問したことがなかつた）、『貴族仲間に關係をもつてゐる』といふことなどが、人の噂に上つてゐた。彼女は當局に嘆願して、流刑の地までミーチャについてゆき、どこか地下の鐵坑でも結婚する許しを得ようとしてゐるといふ噂もあつた。カテリーナの戀がたきであるグルーシエンカが法廷に現はれるといふことは、少からぬ興奮のうちに待望されてゐた。二人の戀がたき、——ブライドの高い貴族の令嬢と、『娼婦』とが、公判の前に落ちあふのを、一同は腦ましいばかりの好奇心をもつて待ちうけてゐた。尤も、グルーシエンカの方はカテリーナよりも、當地の婦人たちの間では一そうよく知られてゐた。この町の婦人たちは『フォードルと、その不幸な息子とを破滅させた』グルーシエンカを前にも見知つてゐたので、誰もが殆んど一樣に、『よくもこんなありふれた、少しも美しいところもない露西亞の町娘に』、こんなにまで親子そろつてうつつを抜かせたものだと驚ろいてゐた。要するに、噂はとりどりであつた。私は特にこの町で、ミーチャのことから、大眞面目な口論さへ惹きおこした家庭が若干あることまではつきりと知つてゐる。多くの婦人たちは、この怖るべき事件にたいする見解の相違から、自分の亭主と激しく言ひ争つたのである。そんなことがあ

つた以上、これらの婦人たちの良人が、悉く被告にたいして氣乗りがしなかつたばかりではなく、却つて憎しみの念をすら寄せて法廷へやつて來たといふことは、無理もない話であつた。先づ男子側が婦人側と反對の立場に立ち、一人のこらず被告に反感をいだいてゐたことは、大體において確實な話であつた。嚴めしい、澁面や、全く悪意にみちた顔さへも見うけられ、しかもそれらがかなり多かつたのである。もとよりミーチャが當地に居る間、かれらの多くの者に個人的な侮辱を與へたことは事實であつた。いふまでもなく、傍聽者のなかには、殆んど愉快さうな顔つきをして、殊にミーチャの運命に對して無頓着きはまる者もないではなかつたが、彼らとて、やはり眼の前の事件には無頓着では居れなかつた。一同は悉く、この事件の成り行きに興味をもつて居り、大部分の男はあくまでもミーチャが懲役になることを望んでゐた。尤も、果せるかな、法律家だけは別で、彼らの目ざすところは事件の道德的方面ではなく、ただ、いわゆる現行の法律の方面に向けられてゐた。誰もが心をうたれたのは、有名なフェチニコキッチがやつて來たことであつた。彼の才能はすでに到るところで知られてゐたが、彼が地方へ出發して、刑事上の大事件を辯護したのは、これが最初といふわけではなかつた。また、彼がかやうな事件の辯護をしたとなると、つねに露西亞全土にわたつて喧傳され、永く人々の記憶にとどまるのであつた。

一方、當地の検事や裁判長についてもまた、いろんな逸話が傳へられてゐた。検事のイッポリット・キリーロキッチはフェチニコキッチと顔合はせるのをびくびくしてゐるとか、二人はまだペテルブルグにゐる頃から、やつと出世の緒をつかんだばかりの頃からの舊い敵同志であるとか、己惚れの強い

イッポリットは、自分の才能をそれ相當に認められないのであるために、まだペテルブルグにゐた時分から、いつも誰かに侮辱されてゐるやうに感じてゐたので、このカラマゾフ事件にはやつきになつてゐて、この事件によつて自分の頽勢を挽回しようと思つてゐる、ところが、ただフェチニコフキツチだけを怖れてゐるとか、そんな風な噂がしきりに行はれてゐた。しかし、フェチニコフキツチを怖れてゐるといふ見方は、全くとはいはないまでも、正鵠を失してはゐなかつた。こちらの検事は危いと見たときには、意氣沮喪するやうな性質の男ではなく、それどころか、危険が増すに従つて、自負心もいよいよ募つて、活氣がつくといふやうな類ひの男であつた。先づ、大體において、當地の検事が餘りにも熱情家で、病的なまでに敏感な人間であつたといふことは指摘しておかなければなるまい。彼は或る事件にかかると自分の全精神をうちこんで、事件の解決如何によつて、自分の運命も運勢も全く決まるものやうな態度で身を處してゐた。法曹界では、多少これを嘲笑する者もあつた。何しろ、彼は、例のやうな性質によつて、たとひ汎く天下にといふほどではないにしても、とにかく、こんな田舎の裁判所での、あまりばつとしない地位から見ても想像される以上に、かなり一種の名聲を得てゐたからである。殊に世間では、彼が心理學に擬つてゐることを嗤つてゐた。私の考へるところでは、これらはいづれも勘ちがひであつて、この検事は、多くの人々が考へてゐるよりも、はるかに眞剣な氣質の人間であつたやうに私には思はれる。ただ、彼は根が病身であつたために、世に出た抑々の初めから、やがて一生を通じて、遂に自分の地位を築き得なかつたのである。

裁判長のことについては、ただこの人が職務を實地によくわきまへ、極めて進歩的な考へをもつた。

教養のある、人情に篤い人だといふことしか言ふことが出来ない。この人もかなり負けず嫌ひではあつたが、自分の榮達についてはそれほど、こせこせしてゐなかつた。彼の一生のおもなる目的は、進歩的な人間になることであつた。おまけに、彼にはいい引きがあり、資産もあつた。後でわかつたことであるが、彼はカラマゾフ家の事件にたいしては、普通の意味ではあるが、かなり熱のある見方をしてゐた。彼の關心をそつたのは、この現象と、その分類であり、この現象を、わが國の社會組織の一産物として、露西亞的要素の特質として見ることであつた。事件そのものの私的性質や、悲劇的な顛末に對しては、被告を初め、すべての關係者の人格に對すると同様、ひどく冷淡な、抽象的な態度をとつてゐた。尤も、これは當然のことであつたかも知れぬ。

法廷は裁判官が姿を見せない前から、傍聽人でぎつしりつまつてゐた。當地の裁判所はこの町でも最も立派な、廣くて高い、聲がよく徹る建物であつた。裁判官たちは一段高いところにすわりと並んで、その右側には、陪審員たちのためにテーブルが一つと、二列の安樂椅子が据ゑられ、左側には被告と辯護士たちの席があつた。法廷の中央の、裁判官の席にちかところには、『證據物件』を載せたテーブルがおかれてゐた。その上にはフォードルの血まみれの白絹の部屋着、兇行に用ゐたと覺しき、宿命的な青銅の杵、袖に血のにじんだミーチャのシャツ、兇行の際に血のついた手巾をいれたために、後ろのポケットのまはりに血潮の痕をとどめてゐるフロック、血のためにこちこちになり、今ではすつかり、黄いろになつてゐるハンカチ、ミーチャがペルホーチンの家を宿にして自殺しようとして装填してゐたのに、モークロエへ行つてトリフォンのためにいつの間にかこつそりと盜まれた拳銃、さてはグルー

シエンカのために三千留の金をいれて宛名まで書いてある封筒、その封筒をしぼつてあつた薔薇いろの細いリボンや、その他ここに一々おもひ出しては居られぬほどさまざまな品物が載せられてゐた。少しく離れて、法廷の奥の方のところには、一般の傍聴人の席があつたが、なほ手欄の前のところにも、いくつかの安樂椅子が置いてあつた。それは申し立てをしたのち、なほ法廷に残つてゐなければならぬ證人のためにおいてあるものであつた。十時になると、裁判長と、陪席判事と、名譽治安判事と、三人の係りの者が姿を見せた。いふまでもなく、検事もすぐに現はれた。裁判長は、小柄な、肉づきのよい、中脊といふには低く、痔をやむ人のやうな容貌の年五十ばかりの老人であつたが、短く刈りこんだ黒い髪には、少しく白髪もまじつてゐた。彼は赤い綬をつけてゐたが、——勲位がどんなであつたかは、もう今は覚えてゐない。検事は私の見たところでは、——しかも、單に私ばかりではなく、誰も眼にもであるが、何となくひどく蒼ざめて殆んど緑いろといつてもいい位みの顔までしてゐるやうに見えた、恐らく、急に一晚のうちに、何かのせいで痩せ細つたものであらう。一昨日、私が見かけた時には、まだいつもと少しも變つてゐなかつたからである。

裁判長はまづ最初に、「廷丁にむかつて陪審員はみな列席されたか?……」と訊いた。それにしても、私はこんな風につづけて行くことはとても出来ない気がする。何しろ、はつきり聞かえなかつたことも多いし、さうかと思ふと、意味のとれなかつた言葉もあるし、また忘れてしまつた點もあるからである。が、何よりも厄介なのは、先きにもいつた通り、若し言葉や出来事を一々のこらす書いてゆくとしたら、文字通りに時間と紙とが足りなくなるからである。ただ私の知つてゐることは、双方、つまり辯

護士側と検事側の陪審員が、あまり大ぜいはゐなかつたといふことだけである。十二人ゐた陪審員の顔ぶれだけはよく覚えてゐる。すなはち、この町の四人の役人と、二人の商人と、百姓と町人が六人ゐたのであつた。私はこちらの連中と、わけても婦人たちが、裁判の始まる前に、妙に驚ろいた様子で、「こんなデリケートな、こみ入つた、心理學的な事件があんな役人に、おまけにあんな百姓どもの決定に任されてよいものでせうか? あんな役人や、ましてあんな百姓たちに、一體、この事件が分かるんでせうか?」と問ひを發したりしてゐたのを覚えてゐる。事實、陪審員になつてゐたこの四人の役人は、下つ端の老朽官吏たちで——尤も、中に一人だけは幾らか若いのがゐたけれど——町の社交界でもよく知られてゐない、ほんの僅かの俸給に甘んじてゐる連中であつた。彼らはきつと、どこへも見つともなく連れ出すことの出来ないやうな年よりの細君をもち、恐らく、跣のまま飛び廻つてゐる大ぜいの子供をかかへ、暇でもあれば、どこかへ行つて歌留多に夢中になるくらゐが關の山で、本などといふものは一冊だつて讀んだ例のない手合に相違なかつた。二人の商人は、見かけこそ堂々たるものであつたが、なぜかしら妙に黙りこんで固くなつてゐた。一人は顎鬚を剃り落して、獨逸人のやうな身なりをしてゐたが、もう一人の方は、白髪まじりの顎鬚を生やし、頸には赤いリボンのついた何かのメダルをかけてゐた。町人と百姓については、別に何も言ふほどのことはなかつた。このスコトブリゴニーエフスクの町人たちに至つては、百姓と何ら變るところがなく、實際に、鋏をとつて畑を耕やしてゐたのである。二人はやはり獨逸風の服を着てゐたので、そのせゐでもあつたらうか、かへつて他の四人よりも、よけいにむさくるしく、汚ならしく見えた。そこで、事實、私も連中を見たときに、『こんな連中に、



こんな事件のことが果して分かるものだらうか？」と考へたのであるが、全く誰でもさういふ考へを持たずにはゐられなかつたであらう。しかし、彼らはやはり厳しい、しかめ面をしてゐて、一種異様な、壓迫するやうな、殆んど威かしにちかい印象を興へてゐた。

さて、つひに、裁判長は、休職九等官フョードル・パーヴロキッチ・カラマゾフ殺害事件について審問を始める旨を宣言した、——そのとき、彼がどういふ言葉づかひをしたか、いま正確には覚えてゐない。廷丁は被告を連れてくるやうにと命ぜられた。そこで、ミーチャが姿を現はした。法廷内は水をうったやうにしんとして、蠅の羽音さへ聞きとれるかと思はれた。他の人たちはどうであつたか分からないうが、わたしはミーチャの姿を見て、非常にいやな氣持になつた。先づ、彼は仕立下しの、眞新しいフロックを着て、ひどく洒落れた恰好をしてゐたのである。後に分かつたことであるが、何でも彼はわざわざこの日のために、彼の寸法書をもつてゐるモスクワの以前の仕立屋に、このフロックを注文したのださうである。新しい黒いキッドの手袋をはめ、粹なシャツを着こんでゐた。ちつと自分の眞向うを見つめながら、例の大股でつかつかと歩いて行つたかと思ふと、悠々と、落ち着き拂つて自分の席へ腰をおろした。すると、同時に、有名な辯護士のフェチニコキッチも姿を見せた。法廷には一種の重苦しいどよめきが起こつた。彼は脊の高い瘦せぎすな男で、細長い脚と、蒼白く、殊のほか細長い指と、きれいに剃刀をあてた顔と、つつましまやかに梳かされた極く短い髪と、嘲笑ひとも微笑みともつかない笑ひに歪む、薄い唇をもつてゐた。年は見たところ四十前後でもあつたらうが、もし一種特別な眼さへなかつたら、彼の顔は必らずや氣持のよい顔であつたらうが、その眼といふのが細くて、表情がなく、し

かも、眼と眼の間がひどく迫つてゐて、わづかに細長い鼻柱がその間をへだててゐるだけである。つまり、彼の顔つきは驚ろくほど鳥によく似てゐるのだ。彼は燕尾服を着て、白いネクタイをつけてゐた。

裁判長は先づ最初に、ミーチャにむかつて、名前と身分をただしたやうに記憶してゐる。ミーチャはきつぱりした口調で、返答したが、その聲が何となく、ひどく大聲であつたから、裁判長は頭を振つて、びつくりしたやうにミーチャを見た。つづいて、審問のために呼び出された人々、つまり、證人および鑑定人の名簿が読み上げられた。その名簿は相當に長たらしいものであつた。證人のうち、四人は出廷してゐなかつた。すなはち、以前、豫審の時には申し立てをしたが、今は巴里にゐるミウソツと、病氣で缺席したホフラニコワ夫人、それに地主のマクシモフと、さてはゆくりなく死んでしまつたスメルヂャコフである。スメルヂャコフの自殺については、警察の方から證明が出されたが、この報告は法廷中に激しい動搖と囁きをよびおこした。もとより、傍聽者の多くは、スメルヂャコフの自殺といふ突發的挿話を未だ知らなかつたからである。が、それよりも一同は、ミーチャの突飛な振舞に驚ろかされた。ミーチャはスメルヂャコフの變死を聞くと、いきなり自席から法廷全體へ響きわたるほどの大聲で叫んだ。

「畜生にふさはしい死にさまだ！」

私は辯護士が飛んで行つて彼を抑へたことや、裁判長が彼の方へむき直つて、もう一度かういふ氣ままなことをしたら、今度は嚴重な手段に訴へるぞといつて、嚇したことなどを憶えてゐる。ミーチャはしきりにうなづきながら、しかも、とんと後悔する氣はひもなく、幾たびかききれな小聲で繰り返す

のであつた。

「もうしません、もうしません！ うっかり口から出たんです！ もう決してしません！」  
無論、この短い一挿話が陪審員や傍聴者に、被告にとつて不利な印象をあたへたことは確かであらう。彼はその性格を暴露して、自分で自分を紹介してしまつたのである。彼がかういふ印象を與へた直後、書記の口から告發書が読み上げられた。

ごく簡単なものではあつたが、同時に行き届いたものでもあつた。何の某は、なぜ拘引せられ、なぜ裁判に付せられねばならなかつたか云々、といふおもな理由を述べてあるだけではあつたが、にも拘はらず、告發書は私には強い感銘を與へた。書記は、はつきりした響のよい聲で、分かりやすく読み上げた。今やこの悲劇全體が、運命的な、容赦のない光りに照らし出されて、新しく一同の前に浮彫のやうに集約されて現はれたのである。私はこの告發書が読み上げられた直後、裁判長が高い胸にしみこむやうな聲でミーチャにかう訊ねたのを記憶してゐる。

「被告は自分の罪を認めるか？」

ミーチャはいきなり席から立ち上がった。

「わたくしは自分の亂酒や放蕩については、自分でも罪を認めます。」彼はまた、突拍子もない、殆んど我を忘れたやうな聲で叫んだ、「懈怠と放縱については、自分に罪のあることを認めます。運命に打ちのめされた私はその瞬間、永久に潔白な人間になることを望んだのです！ しかし、爺さんの——つまり、私の戀がたきである親父の死については、——斷じて罪はありません！ また、親父の金を盗

んだことについても、——決して、決して罪はありません。さうですとも、罪なんかありやう筈がありません。ドミトリイ・カラマゾフは卑劣な男ではありません。でも泥棒ではありませんよ！」

かう叫び終ると、彼は自分の席へ腰を下ろした。たしかに彼はぶるぶる慄へてゐたのである。裁判長はもう一度被告の方を向いて、ただ質問にだけ答へればよろしい、よけいなことを言つたり、夢中になつてどなつたりなどしないやうにと、言葉少く諭すやうに言ひきかせた。次に裁判長は審問にとりかかるやうにといひつけた。そこで、證人一同は宣誓のために出てくるやうにと命ぜられた。この時、私は證人全部を見ることができた。被告の兄弟たちだけは宣誓をせずには證言することを許された。僧侶と裁判長の訓誡がすむと、證人たちは引きさがつて、出来るだけ離れ離れに腰をかけさせられた。やがて證人ひとりひとりの取調べが始まつた。

## II

### 危険な證人

私は檢事側の證人と辯護士側の證人とが、裁判長によつて何か區別されてゐたかどうか、またどういふ順序で彼らが呼び出されたのか、さういふことは少しも知らない。いづれ、區別も順序もあつたこと

ではあらう。ただ、私の知つてゐることは、検事側の証人たちが先に呼び出されたことである。繰り返していふが、私はこれらの審問をいよいよ順序を立てて書いてゆくつもりはない。それに一面からいへば、私の記述は餘計なものになるかも知れないのである。検事の論告と辯護士の辯論が始まつたとき、その討論において、すべての申し立てと意味は明瞭に性質づけられて、ある一點に歸結されてしまつたからである。この二つの注目すべき辯論を、私は少くとも、ところどころだけは委しく書きとつておいたから、その時機が来たならば、諸君にお傳へすることにしようが、同時にまた、その時には、辯論に入る前、不意に法廷内でおこつて、裁判の結末にも恐ろしい運命的な影響をあたへた筈の、思ひがけない出来事の話をも記すことにしよう。そこで、ここではただ、公判の初めから、この『事件』のある特殊な性質がはつきりあらはれてゐたこと、更に、そのことを誰も彼もが知つてゐたことだけを述べることにしよう。それはつまり、被告を有罪とする力の方が、辯護士が持つてゐた材料よりも遙かに優勢であつたといふことである。この怖ろしい法廷にさまざまな事實が集つてきて、やがて次第に一切の恐怖と血潮が明るみへさらけ出されるに至つた最初の瞬間に、すべての人々はすでにこれを悟つたのである。一同にはすでに最初の一步から、この事件がまつたく争ふ餘地のない、疑念をさしはさむ餘地のない事件であること、實は辯論なども全然不必要なのであるが、ただ形式上行ふにすぎないこと、犯人は確かに有罪であることなど、よくよく分かつてゐたに相違ないのである。私の考へるところでは、興味ある被告の無罪をあれほど熱心に期待してゐた婦人たちでさへも、やはり一人のこらず、彼の有罪を信じてゐたにちがひないと思ふ。いや、それどころか、もし彼の犯罪が充分に認められなかつたら、それこそ

婦人連は、却つてがっかりしたのに相違ない。なぜかと言へば、そんなことになれば、たとひ被告が無罪を宣告されたにしても、大團圓の興味が減るからである。被告が無罪になる、——これはいささか奇妙なやうではあるが、婦人たちは悉く、殆んど最後の瞬間までそれを信じきつてゐたのであつた。つまり、『彼は確かに罪を犯した。しかしこのごろ流行の人道主義と、新しい思想と、新しい感情等々によつて、必らずや無罪を宣告されるであらう』といふのである。だからこそ、誰もが、あんなにあくせくして、ここへ集つて来たわけなのである。

男たちはむしろ、検事と評判のフェチュコーキツチとの一騎打ちに興味を惹かれてゐた。一同は、驚異を感じながら、自分に訊ねるのであつた、『フェチュコーキツチがいかに天才であるといつても、これほど絶望的な、手の下しやうのない事件を、一體どうすることが出来るのだ？』それゆゑまた、彼の奮闘ぶりに一步一步緊張した注意を向けてもゐたのである。しかも、フェチュコーキツチは一同にとつては、最後まで、すなはち、彼が辯論にとりかかるまで依然として一個の謎であつた。玄人筋の人々は、彼には獨得の方法があるから、心の中にはもう或るものが組み立てられて、確乎たる目的をもつてゐるにちがひないと豫測してゐた。が、その目的が、果して何であるか——といふことは誰一人として推察し得るものはなかつた。それにしても、彼の信念と自信だけは一目して瞭然たるものがあつた。のみならず、彼がこの地へやつて來てから、まだ間もないのに、——やつと三日ばかりの間に、充分に事件の真相をつきとめ、『微妙にそれを研究した』らしいのを見て、人々は非常な満足を感じてゐた。たとへば、あとでみんな愉快さうに話し合つたことであるが、彼は機敏にも検事側の証人に、うまく『録

をかけて』、思ふ存分に彼らをまごつかせたばかりか、殊に彼らの素行上の世評に泥を塗つたりした。つまり、彼等の申し立てにけちをつけたのである。とはいへ、人々の眼には、彼がこんなことをするのは大いにふざけるためである、いはば、法曹界の名譽のためである、辯護士としての常套手段を忘れないためであると思はれた。何しろ、こんな『泥塗り』などでは、何ら窮極の利益をもたらし得るものではないことを、一同はよくよく承知してゐたのである。それに、察するところ、彼自身もまだ別に何か計畫するところあつて、——別な辯護の武器をかくしてゐて、時機を見て突然それを持ち出すつもりらしく、その邊のことは自分でもよく知つてゐたに違ひないのである。しかも、さし當つて今、彼は自らの實力を意識しながら、戯れたり、ふざけたりしてゐるかのやうに見えるのであつた。

たとへば、フォードルの侍僕を勤めてゐて、『庭の戸が開いてゐた』といふ、極めて重要な申し立てをしたグリゴリーの訊問の時など、辯護士は自分の訊問の番になると、しつかりグリゴリーの胸元ふかく食ひこんで放さなかつた。ここでいつておかねばならぬことは、グリゴリーが法廷の莊嚴さにも、大ぜいの傍聴者たちにも、何ら憶する色なく、かへつて勿體ぶつてゐるとさへ感じられるほど、落ちつき拂つて法廷へ入つて來たことである。彼は妻のマルファと差しむかひで話してでもゐるやうに、充分の餘裕を示して申し立てをした。ただ平生と異つてゐるのは、言葉づかひが少しく丁寧だけであつた。彼をまごつかす事などは、到底出來もしない業であつた。検事は先づ彼に向かつて、カラマゾフ家の家庭事情を詳細にわたつて、かなり長々と訊ねた。忽ち家庭内の光景は鮮かにゑがき出された。その話ぶりからいつても、態度からいつても、いかにもこの證人は素直で、公平らしかつた。自分の舊主のこと

を語るにあつても、深く敬意を拂つて申し立てをしたが、しかもなほ、ミーチャにたいするフォードルの仕打は正しいものでなかつたといひ、『大旦那のなされた子供の育て方は間違つて居りました、あの方、つまり、あの息子さんは、もし私といふものがなかつたら、きつと虱に食ひ殺されてしまつたことでせう。』とミーチャの幼年時代のことを物語りながら、彼は又かうもつけ足すのであつた、『それからまた現在の父親でありながら、現に息子のものになつて居る母方の財産を横取りしたことも、やはり、いいこととは申せません。』フォードルが息子の財産を横領したといふことには、果していかなる根據があるのかといふ検事の訊問にたいしては、グリゴリーは不思議にも、何一つ根底のある返答をしなかつたが、息子の財産相続に關する計算が、『不正』であり、フォードルはどうしても息子に『未だ何千留か拂はなければならなかつた筈です。』と言ひ張つた。序でながら、そのうち、検事はこの訊問を、——フォードル・パーヴロキッチが、事實においてミーチャにたいし、當然拂ふべきものを拂はなかつたかどうかといふ質問を、特にしつこく繰り返して訊けるだけの證人には、一人のこらす訊いたのである、アリオシヤやイワンすらも、除外はしなかつた。しかもなほ、誰からも的確な返答を得ることは出來なかつた。いづれも、單にその事實を肯定するだけにとどまり、多少ともはつきりした證據を提供したものは一人もなかつた。やがてグリゴリーは、ドミトリーが躍りこんできて、父親を殴りつけた上、もう一度殺しに戻つて來てやるぞと嚇した時の、食事中の一場面を物語つたが、その時には、この老僕の落ちついて無駄のない、一風變つた話しぶりが却つて非常な雄辯となつて、法廷には一種陰慘な空氣さへもみなぎつた。ミーチャがその時、自分をつき倒したり、顔を殴つたりして侮辱したことに

ついでには、今はもう別に怒つてはゐない、疾うに許してゐるとも言つた。死んだスメルチャコフのことを訊かれたとき、彼は十字を切りながら、あの男はなかなか調法な若者だつたが、馬鹿で病氣に打ちのめされてゐて、そのうへ不信心者であつた、ところが、この不信心を教へたのはフォードルとその長男だつたと申し立てた。しかも、スメルチャコフの正直なことは熱心に主張して、スメルチャコフが、或るとき主人の紛失した金を見つけたことがあるが、その時それを隠さうともせず、さつそく主人に渡したので、主人はその褒美として『金貨を興へ』、それからといふもの、何事によらず彼を信頼するやうになつたと言つた。庭から入る戸口が開いてゐたことは、あくまでも頑固に主張した。

彼にたいする訊問はかなり多かつたので、私は今すつかりは思ひ出すことが出来ない。

さて、いよいよ辯護士が訊問する段になつた。彼は先づ、フォードルが、『或る婦人』のために、三千留を隠したとかいふ、例の封筒のことを調べることから始めた。『あなたはそれを御自分で御覧になつたのですね、——だつて、あなたはあれほど長い間、御主人の傍にゐられたのぢやありませんか？』と訊いた。グリゴリイは、そんなものは見たこともなく、そんな金のこととは、『今度みんなが騒ぎ出すまで』誰からも聞いたことがなかつたと答へた。この封筒のことを、フェチュコーキツチは、ちやうど検事が財産分配のことを訊いたのと同じくらゐのしつこさをもつて、訊き得るだけの證人から訊いたが、それでもやはり、誰からも、その封筒の話はよく聞きはしたが見たことはなかつたといふ返事以外、何も訊き出せなかつた。辯護士がこの訊問に、殊のほかしつこかつたことは、最初からすべての人が氣づいたところであつた。

「ところで、恐縮ですが、もう一つだけ訊かして下さい」とフェチュコーキツチはだしぬけに訊いた、

「豫審での申し立てによると、あなたはあの晩おやすみになる前に、腰の痛みをとめるために、バルザム、つまり煎薬をお用ひになつたさうですが、その薬は何を調合したものでしたのですか？」

グリゴリイは、鈍い眼つきで訊問者を見てゐたが、やや暫らく無言の後、呟やくやうに言つた。

「サルヴィヤをいれましたかな。」

「サルヴィヤだけでしたか？　まだほかに思ひ出せませんか？」

「おほい、こもありました。」

「胡椒もはいつてゐましたね？」とフェチュコーキツチはちよつと好奇心を起こした。

「胡椒もはいつてをりました。」

「まあさういふ風なものだつたんですね。ところで、それはみんな火酒ウキヤカにつけてあつたのでせうね？」

「アルコールでした。」

傍聴席でくすくす笑ふ聲が微かに聞えて來た。

「それ、御覽なさい。ウキヤカ火酒どころのさわぎぢやない、アルコールさへつかつてゐるぢやありませんか。

あなたはそれを背中に塗つて、それからお連れあひだけしか御存じでない、或る有難い呪文と一しよに、残りをみんな一と息にやつてしまはれたのでせう、さうでせうね？」

「やりました。」

「たくさんお飲みになつたのでせうね？　およそのところ？　盃に一杯ですか、二杯でしたか？」

「コップ一杯ぐらゐもありましたらう。」

「コップに一杯！ 一杯半もあつたかもしれませんね！」

グリゴリイは返答しなかつた。彼は何か悟つたらしかつた。

「コップに一杯半のアルコールといへば、——なかなか悪くありませんね。あなたはどうか御考へです？ 庭からいゝところぢやない、『天國の戸が開いてゐる』のさへ見えませうからね？」

グリゴリイはやはり黙々としてゐた。法廷にはまた微かに笑ひ聲がおこつた。裁判長はちよつと身動きした。

「ねえ、確かにさうでせう、」とフェチュコーキッチは更にぐいぐいと深く食ひこんでいつた、「庭からはいる戸が開いてゐるのを、あなたが御覧になつたときには、御自分が眠つてゐられたかどうか、それさへはつきり覺えてゐられなかつたんですね？」

「ちやんとこの足で立つて居りました。」

「それだけでは、眠つてゐなかつたといふ證據にはなりません。（傍聴席には再び微かな笑ひが起つた）、で、その時、もし誰かがあなたに何か訊いたとしたら、例へばですね、今年は何年かと訊いたとしたら、あなたはそれにお答へになることが出来ましたかしら？」

「そんなことは分かりません。」

「ぢあ、今年は何年ですか、基督降誕後何年ですか、御存じですか？」

グリゴリイは自分をいぢめつける者の方へちつと眼をこらしながら、當惑した顔をして立つてゐた。

彼は事實、今年が何年であるのか知らないらしかつたが、それはちよつと妙な工合でもあつた。

「だが、あなたの手に指が何本ついてゐるか、それは御存じでせうね？」

「どうせ私なんかは人に使はれてゐる身分ですから、」と、グリゴリイは矢庭に大きな聲で、一こと一こと句切りながら言ふのであつた、「若し、お上がわたしをからかひなさるとしても、わたしはちつとこらへてゐるよりほかに仕方がございません。」

フェチュコーキッチはちよつとたじろいだらしかつたが、そのとき裁判長が口を挟んで、もつとこの場合に適當した質問をして貰ひたいと辯護士に注意を與へた。フェチュコーキッチはこれを聞くと、勿體ぶつた一禮を返したのち、自分の質問はこれで終つたのだと告げた。いふまでもなく、傍聴者や陪審員の間には、藥の加減で、『天國の戸を見た』虞れがある上に、今年が基督降誕後何年にあたるか、それさへ知らないやうな人間の申し立てにたいして、一沫の疑念が浮かんで來た。そこで、辯護士はとにかく自分の目的を達したのであつた。が、グリゴリイの退庭前に、もう一つ小さな出來事が生じた。それは、裁判長が被告に向かつて、以上の申し立てについて何か言ひ分はないかと訊いた時、

「戸のこと以外、あれの言つたことは皆本當のことです。」とミーチャが大聲で怒鳴つたことである。

「私の風をとつてくれたことにはお禮を言ひます。毆つたのを許してくれたことにもお禮をいひます。あの爺さんは一生涯正直でした。親父にたいしてはむく犬七百匹ほどに忠實でした。」

「被告、言葉を慎しみなさい。」と裁判長は厳しく注意をあたへた。

「私はむく犬ぢやありません。」とグリゴリイもいつた。

「では、わたしがそのむく犬です、わたしです！」とミーチャは叫んだ、「もしそれが失敬だつたら、むく犬の名は自分で引き受けます。そしてあれにはあやまりません。わたしは自分が黙だつたから、それにたいしても残酷なことをしました！ イソップにも残酷な真似をしました。」

「イソップとは一體、誰か？」とまた裁判長は厳しい口調で訊いた。

「あの、ピエロのことです、……親父のことです。フォードル・パーヴロキッチのことです。」

裁判長は又もや厳しい口調で、言葉づかひに注意しなければいけないと、ミーチャをたしなめた。

「そんなことをいふと、君自身のためにならないよ。」

證人ラキーチンの訊問に際しても、辯護士はちやうどこれと同じ筆法を用ひた。ちよつと斷つておくが、ラキーチンは最も重要な證人中の一人で、検事も彼には重きをおいてゐたことは疑ふべからざることであつた。聞いてみると、彼は何もかも、すつかり知つてゐた。驚ろくほどさまざまのことを知つてゐた。彼は誰の家にも出入して、何もかも見てゐた。また誰とでも話をしてゐた。フォードル・パーヴロキッチを初めカラマゾフ一家の人たちの経歴までも、極めて詳しく知つてゐた。尤も、三千留はいつてゐたといふ包みのことは、ミーチャから聞いて知つてゐただけであるが、その代り、『都』といふ居酒屋におけるミーチャの武勇傳のいくさり、つまり、彼を危地に陥れるやうな言葉や行動を委細に述べたうへ、二等大尉スネーギレフの『絲瓜』事件までも辯じ立てたのである。が、財産相續について、フォードルがミーチャに幾らか借金があつたかどうかといふ、特殊な一點については、ラキーチンもやはり何一つ申し立てることが出来ず、ただ輕蔑するやうな口調で、『あんな手合をつかまへて、誰がいい

か悪いかをきめることが出来るのですか、あんなに亂脈を極めてゐるカラマゾフ一家の中では、誰だつて自分の位置さへ悟ることも、決めることも出来ませんよ。従つて、誰が誰に借になつてゐるなんて、そんなことは、とてもはつきり勘定が出来ないにきまつてゐます。」と、かなり大ざつばなことをいつて胡魔化してしまつた。彼はまたこの刑事事件の悲劇全體を農奴制及び適當な制度の缺乏に苦しんで、無秩序の中に沈溺してゐる露西亞のさまざまな舊道徳の所産であると論じた。かうして、彼は滔々數千言をつらねる自由をあたへられた。しかも、ラキーチン氏はこの事件以來、すつかり名を擧げて、多くの人々に認められるやうになつた。検事は、證人ラキーチンが、この犯罪に關する一論文を雑誌に發表しようとしてゐることを知つてゐたので、論告の際に（これは後で書く）、この論文中の一節を引用したほどであつた。すなはち、前からこの論文を読んでゐたのである。ラキーチンが描き出した言語に絶した陰慘な光景は、充分に強く『有罪』なことを證明するものであつた。ラキーチンの陳述は、概してその思想が獨創的で、また極めて氣高く、立派であつたために、傍聽者たちをすつかり魅了し去つたのである。彼が農奴制度や無秩序に悩んでゐる露西亞のことを述べた時には、はからずも二三の拍手さへ起つたほどであつた。けれども、何といつてもラキーチンは未だ年が若かつたから、ちよつとしたことであつた。口をすべらしてしまつたのである。そこをすかさずにフェチュコーキッチはつけこんだのである。つまり、グルーシエンカについて、或る訊問に答へる際、自分の答辯の成功と（もとより彼はそれを自覺してゐた）、興奮した氣分につりこまれて、ラキーチンは、彼女のことをいくぶん蔑んで、つい『商人サムソフの妾風情』と言つてしまつたのだつた。この失言を取りかへすのに、彼は後でい

かばかり高價な代償を拂つたことであらう。何はともあれ、この言葉づかひによつて、フェチュコーキツチは即座に、すつかりラキーチンの人物を見抜いてしまつたからである。また、フェチュコーキツチが、こんな短時日の間にかうまで詳細に事件の裏面を探りつくしてゐようとは、ラキーチンにしても全く思ひがけないことであつた。

「ではちよつとお訊ねしますが、」と辯護士はいよいよ自分の訊問の番が廻つてくると、非常に愛想のよい、しかも慇懃な微笑をたたへながら口を切つた、「無論、あなたは地方教會本部で發行した『逝けるゾシマ長老の生涯』といふパンフレットの著者ラキーチン氏でゐられるのですね。わたしはあの深遠な宗教的思想にみちみち、それに、高僧にたいする氣高い敬虔の念にあふれた御高著を、このごろ非常な満足をもつて拜見しました。」

「あの本は出版するつもりで書いたのぢやありません、……ところが、たうとう發表されてしまひまして。」不意に、何となくやりこめられたやうな、てれくささうな様子で、ラキーチンはいつた。

「いや、あれは大へん御立派な御本ですよ！ あなたはやうな思想家は、社會のあらゆる現象を、きはめて廣い範圍にわたつて取扱はれるだけのお力をもつてゐられるのだし、また取扱つていただけなければなりません。あの有益な御本は、長老殿下の御庇護もあつて、廣く人々に讀まれ、また、かなりの利益をも齎したことと思ひます、……それはさうと、あなたに一つお訊ねしたいことがあります、たしか、あなたは今、スゼイトロワさんと大へん御昵懇にして、ゐらつしやるやうにおつしやいましたね？」(N・B・グルーシエンカの姓は「スゼイトロワ」であることがわかつた。このことを、わたし

はこの日はじめてこの審理中に知つたのである。)

「私は自分の知人のすべてにたいして一々、責任を負ふわけにはゆきません、……私はまだ若いんですからね、……逢つた人に一々、責任をもつといふことは、誰にだつて出来るものではありませんからね。」ラキーチンは、いきなりかつとなつた。

「分かつてゐます、よく分かつてゐますとも！」何だか自分ではつが悪くなつたのか、フェチュコーキツチは、あわてて、謝まるやうに叫んだ、「あの若い美しい御婦人は、御當地の若い方々の粹ともいふべき人たちに、好んで接して居られたさうですから、他の青年たちと同じやうに、あなたがあの御婦人と親しくなることに興味をお持ちになつたとて、それは何も不思議はありません、が……しかしです、ただ一つだけはつきりお訊ねしておきたいことがあります。聞くところによると、何でもスゼイトロワさんは、ふた月ばかり前のこと、カラマゾフの末の息子さんのアレクセイ・フォードロキツチと知合ひになることを、大變に望んでゐらして、當時まだ修道院の服を着てゐたあの男を、そのまま自分の家へ連れて来てくれれば、お禮として二十五留あげようとお約束したんださうですね。噂に聞けば、この約束がとり結ばれたのは、丁度この事件の基となつてゐるあの悲劇の突發した夜だつたとか。ところで、あなたは實際アレクセイ・カラマゾフをスゼイトロワさんの家へ案内して、——そのとき約束の二十五留の禮金をスゼイトロワから受けとられたさうですね？　これが私のお訊ねしたいと思つてゐることなんです。」

「あれは冗談だつたんですよ、……僕にはまるでその理由がわかりませんね、なぜあなたがこんなこ



とに興味をお待ちになるのか。……冗談半分に、僕は受けとつたまでですよ、……後で返すつもりで……」

「ぢや、一旦はお受けとりなすつたんですね。でも、まだ今日までお返しになつてゐないぢやありませんか、……それともお返しになつたとおつしやるのですか？」

「下らないことですよ、そんなこと……」とラキーチンは呟やいた、「僕はさういふお訊ねには御返事するわけにはゆきません、……無論、僕は返してしまひますとも……」

裁判長は何か口を挟んだが、このとき辯護士は、自分のラキーチン氏にたいする質問は終つた旨を告げた。ラキーチン氏はいささか面目をつぶされて、すこすこ舞臺を退いた。彼の極めて高尚な演説の印象は先づかういふ工合に傷けられたのであつた。

フェチュココキッチは彼を目送し乍ら聴衆に向かつて、「諸君の高潔なる弾劾者と言へば、まあこんなものですよ。」とでも言ふやうな様子であつた。私の記憶してゐるところでは、このときもミーチャはまた一場の挿話なしにはすまなかつた。ミーチャは、ラキーチンがグルーシエンカにたいして言つたことにひどく激昂して、いきなり自分の席から『ベルナル！』とどなりつけたのであつた。ラキーチンの審問が終ると、裁判長は被告に向かつて、何か言ふことはないかと訊いたが、そのときミーチャは聲高らかに叫んで言つた。

「あいつめ、このおれから、被告たるこのおれから金を借りて行つたくせに！ 見下げはてたベルナルめ！ おつちよこちよいめ、あいつは神様なんぞ信じてゐるものか、長老をまんまと瞞しやがつ

て！」

ミーチャがまた言葉づかひを注意されたことは言ふまでもないが、それはとにかくとして、ラキーチン氏はすつかり面目を潰してしまつたのである。二等大尉スネギーレフの證言もうまくゆかなかつた。尤も、それは全然べつな理由によつてである。ぼろぼろの汚い服をまとひ、泥まみれの靴をはいて、彼は法廷へ現はれてきた。しかも、前もつていろいろ注意を與へられ、『下検査』されてゐたにも拘らず、意外にもすつかり酔つぱらつてゐることがわかつた。そこでミーチャから加へられた侮辱のことを訊かされると、彼は忽ち返答を拒むのであつた。

「あんな人たちのことなんか、なあと構やしませんよ。わたしはね、イリュエーシエチカから口止めされてゐますので、なあと、あの世へ行けば神様がちゃんと償ひをしてくれますから。」

「あなたは口止めたといふのは一體、誰なんですか？ 抑々、誰のことをあなたは言つてゐるんです？」

「イリュエーシエチカですよ、わたしの倅ですよ。『お父さん、お父さん、あいつはお父さんをひどい目にあはしたんだね！』と、石の傍で言ひましたつけ。あの子は、いま死にかかつてゐるんです……」

二等大尉はいきなり聲をあげて泣き出した、かと思ふと、裁判長の足もとに身を投げ出した。傍聴者たちの笑ひ聲に送られながら、彼はすぐに表へ連れ出された。かくて、検事が傍聴者たちに與へようとした感銘は、つひに全くものにならなかつたのである。

一方、辯護士は、依然として手をかへ品をかへて、この事件を自分が極く微細な點に至るまで知りつ

くしてゐることを見せびらかして、いよいよ傍聴者たちを呆然たらしめるのであつた。例へば、トリフォン・ポリソキッチの證言であるが、それは非常に強い印象を與へ、勿論ミーチャにとつてはひどく不利益なことになつた。彼は殆んど指を折つて數へんばかりにして、ミーチャが兇行の一箇月ばかり前、初めてモークロエへ行つたときに使つた金は、三千留を下る筈がないと述べ立てた、「たとひ三千留が缺けてゐたにしても、それこそほんの僅かだつたにちがひないのです。あのジプシイの女たちだけにだつて、どのくらゐ撒き散らしたとか、分つたものぢやありません！ 虱だらけな村の百姓どもにさへ、『五十哥玉を往來へ投げつけてやる』どころか、少く見つても、二十五留紙幣を惠んでやるんですからね、それより少くはありませんでした。それに、あのとき土地の者たちに、どのくらゐあの人はいんちきされたことせう！ 泥棒の味を三日でも、嘗めた者は、やめられることがないものです。また盗人達はつかまるものぢやありません、あの人の方では撒く位なんだから！ 全く村の奴らと來たら、泥棒なんですからね、人間らしい心なんて、これっぽちも持つちやゐない。また一方、娘たち、村の娘たちには、どれだけの金が渡つたでせう！ あのとき以來、村の者たちはみんな金持になりましたよ。以前と來たら素寒貧だつたのに。」かういふ風に彼はミーチャの使つた金の行方を一々並べたてて、算盤で弾いてでも見せるやうな風に述べた。……そこで、ミーチャの費消した金額が千五百留であり、残りは守り袋の中に納めておいたといふ假定は、つひに成り立たなくなつた。「わたしは、ちやんとこの眼で見たんでございますよ。確かにこの眼で見ましたんで。あの人が、三千留の金を握つてゐるところをね。わたくし共にだつて、お金の勘定ぐらゐ出來なくて何といたしませう！」とトリフォ

ンは一心に『お上』の氣に入らうとつとめながら聲を大きくして言ふのであつた。

ところが、審問が辯護士の方へうつると、辯護士は殆んどトリフォンの申し立てを辯駁しようともせず、忽ち話をわきへ外らしてしまつて、馭者のチモフェイと百姓のアキムとが、ミーチャの最初の豪遊のときすなはち捕縛される一箇月前にモークロエで、ミーチャが酔つたまぎれに落したといふ百留の札を玄關の床から拾ひ上げ、それをトリフォンに渡したところ、トリフォンは二人に一留づつを與へたといふやうな話に外れて行つたのである。すると、『ところで、お訊ねしたいが、あなたはその時、果してその百留をカラマゾフ君にお返しなさいましたかね、どうでしたかね？』と訊ねた。トリフォンは最初のうち言葉は濁して事實を否認してゐたが、チモフェイとアキムとが訊問されるに及んで、やむなく百留拾つたことを白状した。尤も、そのとき、金は確かにドミトリイに返したといひ、『手をつけずに、きれいにあの人の手に渡したのですが、あの人はあの時、へべれけに酔ひつぶれてゐましたから、事によつたら はつきり覚えてゐないかもしれません。』とつけ加へた。それにしても、彼は二人の百姓が呼び出されるまでは、百留を見つけたことを否認してゐたのであるから、酔つ拂つてゐるミーチャ、に金を返したといふその申し立ては、甚だ疑はしいものとなつた。かくて、檢事側から出された最も危険な證人の一人は、やはり極めて胡散な人間と見られて、面目を失つたまま退廷したのであつた。

波蘭人たちとても、やはり同じことであり、彼らは胸をそらして威張つて出て來た。先づ最初に、自分たちが『君主に仕へてゐた』こと、『ミーチャ氏』が二人の名譽とひきかへに、三千留を提供したと、ミーチャが巨額の金を握つてゐたのを自分たちの眼でちやんと見たことなどを、大きな聲で證言し

た。紳士ムツシャローキッチは話の間に、屢々、波蘭語を挟んだが、そのことがかへつて裁判長や検事の眼には、自分の權威を高めてゐるらしく映つてゐるのを見てとると、しまひには、すつかり活氣づいて来て、波蘭語だけで喋り出した。が、フェチュコーキッチは彼らをも見事に自分の網へかけてしまつた。

再び呼び出されたトリフォンは、最初は言を左右にしてゐたが、結局、紳士ヴルプレーフスキイが、彼の出した札と自分の札をすり換へたことや、紳士ムツシャローキッチが『バンク』の札を配るとき、札を一枚ぬきとつたことなどを白状しないわけにはゆかなかつた。このことはカルガーノフも自分の證言の際に確證したので、二人の紳士たちは人々の嘲笑を浴びながら、すこすこ引きさがつた。

その後も危険な證人たちは一人のこらず、殆んど皆が皆まで、かういふ憂き目を見せられた。フェチュコーキッチは彼ら一人々々の皮を剥いで、すこすこ引きさがらせることに成功した。裁判通や法律専門家たちは感心して見とれながらも、殆んど確定的だとも言へる、かやうな大きな罪状にたいして、一體こんなことが何の役に立つのだらうかと不思議に思つた。すなはち、ここまでに繰り返していつて念を押しておくが、誰も彼も、罪證はいよいよのつびきならないものになつてゆくばかりで、今は如何とも手の下しやうもなくなつてゐることを痛感してゐたからである。しかし、彼らはこの『偉大なる魔術師』の自信にみちた態度を見て、この男が冷静であるのを知り、或る期待をかけてゐた。『かやうな人物』がわざわざペテルブルグから出かけて来る以上、手を空しうして歸る筈は決してないからである。

### 醫學鑑定と一フントの胡桃

醫學鑑定もまた被告にとつては大して役にたたなかつた。それにまた（これは後でも分かつたことであるが）フェチュコーキッチ自身は、あまりこの醫學鑑定には期待をかけてゐなかつたらしいのである。もともとこの鑑定は、カテリーナが自分一人の見で、モスクワからわざわざ名醫を呼びよせたりしたので、やつてみようといふことになつたのである。もとより、この鑑定のために辯護の上に不利を招くやうなことは少しもなかつた。尤も、ひよつとしたら、多少はためになつたかも知れない。それにしても、一方には、醫師たちの意見の相異からいささか滑稽なことがもちあがつたりなどした。鑑定人となつたのは、モスクワからやつて来たといふその名醫と、土地の醫師ヘルツェンシュトープと、若い醫師のワルギンスキイであつた。後の二人は單に證人として、檢事に召喚されて出廷したまでのことである。

そこで、先づ最初に、鑑定人として質問されたのは、ヘルツェンシュトープであつた。この醫者は年のころ七十ばかりの老人で、禿げた胡麻鹽頭に、中背の頑丈な體格の男であつた。彼はこの町ではかな

り人氣があつて、町の人から尊敬もされてゐた。誠實な、心がけの立派な、信心の篤い人で、わたしも確かなことは知らないが、何でも『フス教派』か、『ペーメン兄弟派』かの信者であつた。彼はこの町へ移り住んでから、もうかなりになるが、そのあひだ、身を持つること極めて嚴たるものがあつた。彼は優しい同情ぶかい性質の男だつたから、貧乏な患者や百姓たちには施療をしてやつてゐた！ 進んで貧しい茅屋へ見舞ひに出かけて、藥代さへも恵んでやつたりしてゐた。しかし、彼は驢馬のやうに頑固でもあつた。一旦かうと決めたら、てこでも動かかなかつた。序でながら、モスクワからやつて來た名醫が、この町へ着いて二三日たつたないうちに、醫師ヘルツェンシュトローベの技倆について、非常に侮辱的な批評を敢へてしたといふことは、殆んど誰しも知らぬものがないことであつた。つまり、モスクワの醫師は二十五留以上の往診料をとつたのにもかかはらず、町内の誰彼は、この名醫の來着を非常に悦んで、金を惜しまず、われ先きにと、その診察を乞うたのである。しかも、これらの患者たちは彼が來るまではみなヘルツェンシュトローベの診療をうけてゐたので、モスクワの醫師は到るところで、ヘルツェンシュトローベの診療ぶりに無遠慮な批評を加へたといふわけであつた、つひには、患者のところへ行くと、いきなり、露骨に、『誰が一體こんなにしてしまつたのです、ヘルツェンシュトローベですか？へ、へ！』などと訊くやうにさへなつた。ヘルツェンシュトローベの耳にこんなことが何から何まできこえたのは無論のことであつた。ところで、かういふ状態で、三人の醫師は質問をうけるためにかはるがはる出廷したのであつた。ヘルツェンシュトローベは『被告の智能が異常であることは言ふまでもないことだ』と申し立てた。次に彼は自分の意見を述べて（ここではそれを省くことにするが、『この變態は

第一、被告の過去におけるさまざまな行爲によつて證明されるばかりでなく、現にこの瞬間においても歴然たるものがある』と言ひ足した。然らば、なぜ今この瞬間といふのか、説明するやうにと要求されたとき、老醫師は持前の單純な性格から、率直に述べるのであつた——それは、被告が先刻法廷へはいつて來る際、『かういふ場合にふさはしくない妙な様子を見せてゐたのです。つまり、彼は兵隊のやうな歩き方をし、眼をぢつと前に据ゑてゐました。ところが、本來、彼は非常な女性崇拜家なので、いま婦人たちがどんな風に見てゐるかしたら、必らずさう考へて、婦人たちの腰を下ろしてゐる左側の方を見なくてはならん筈なのです。』この際、ちよつとつけ加へておかなくてはならないが、彼は好んで露西亞語を用ひたが、どういふわけか、その一句一句が獨逸語風になつてしまふのであつた。さうかといつて、そのために臆するやうなことは少しもなかつた。彼はつねに自分の露西亞語を模範的なもの、つまり『露西亞人たちのそれよりも更にすぐれた言葉』と考へる癖をもつてゐた。彼はまた露西亞語の諺を引用するのが大好きで、それを使ふその度ごとに、露西亞の諺は世界中の諺の中でも最も立派な最も意味深長なものだと説いてきかせるのであつた。もう一つ言つておかう。彼は話してゐるうちに、ついつつかりして、ごくありふれた言葉さへ忘れることがよくあつた。よく知つてゐる言葉でも、急に度わすれしてしまつて、口に出て來ないのである、尤も獨逸語で話すときにも、やはりさうであつ

\* ペーメンの愛國的宗教改革者ヨハン・フス（一三六九—一四一五）によつて稱へられた教を奉ずるもの。フスは死刑にされ、そのために十数年にわたつて、この教を奉ずるものの反亂がつづいた。その中から溫和派ペーメン兄弟派と過激派タボール派が生じた。ペーメン派は彈壓をうけて、秘密結社となつたが、のちにルーテルの福音主義をとりいれ新教と結合した。少しくわき道へそれたが、ここに彼の特異性の一端がある。（譯者註）

た。さういふ時、彼は思ひ出せない言葉を、まるで捉へようとするかのやうに、自分の顔の前で手を振るのであつた。さうなると、もうどんな人でも、度わすれした言葉を彼がさがし出すまでは、彼に話を つづけさせることが出来ないのである。

被告が入廷する際、婦人席の方を見るべき筈だつたといふ彼の申し立ては、傍聴席にふざけたやうな 囁やきをよびおこした。この町の婦人たちは、誰もが、この老醫師をかなり好いてゐた。また、彼が敬 虔であり、潔白であり、その半生を獨身で通して来て、女性といふものを一しほ高い理想の存在と見て みることをも承知してゐたので、思ひがけないこの申し立てを非常に不思議なことに感じたのである。

さて、モスクワからやつて来た醫師は、いよいよ自分の番が廻つて来て審問されたとき、被告の精神 状態を『極めて』變態的なものと見る旨を強く、はつきりと斷言した。彼は『感情發作』と『偏執』 とについて、いろいろ尤もらしい言葉を述べたのち、蒐集した多くの材料によつて、被告は捕縛の數日 前から、すでに疑ふ餘地のない病的 affect 傾 に陥つてゐたので、彼がもし實際に兇行を演じたとなす れば、たとひそれを意識してゐたにせよ、殆んど不可抗的に行つたのである、すなはち、彼は自分を 支配してゐる病的な精神の衝動と戦ふ力を全くうしなつてゐたのであると論斷した。しかも、彼は、 affect のほかに mania をも認めた。かれの言葉によると、その mania たるや、すでに純然たる狂氣に 陥ることの先觸れをなすものなのである。(N・B・私はいま自分流の言葉で語つてゐるが、實は醫者 は非常に學術的な専門語で説明したのである。『彼のとなつた行動はすべて常識と論理に反してゐるので す。』と彼はつづけた、『わたしは自分の實見しなかつたこと、つまり犯罪そのもの、慘劇そのものにつ

いては述べないことにしますが、現に一昨日わたしと話をしてゐる時ですらも、被告の眼はぢつとすわ つてゐて、そこに一種説明し難いものが現はれてゐました。被告は全くその必要のない場合に笑つた り、たえず不可解な昂奮状態に陥つたりして、『ベルナル』とか『倫理』とか、その他必要のない奇 妙なことを口走つてゐました。』しかし、醫師が被告に mania を認めてゐる主なる點は、被告が欺きと られたと信じこんでゐる三千留を口にするときには、必らず一種異様な昂奮に驅られること、しかもそ の他の失敗や侮辱などについて追憶し語るときには、きはめて平靜であることなどであつた。また最後 に、調査したところによると、被告は以前にも三千留のことに觸れるたびに、この場合と同じく、必ず 夢中になるほど激昂してゐる。然るに彼の無慾恬淡なことは人のよく證明するところである、と述べ た。『造詣淺からぬ我が同業者の意見によれば』と、自分の言葉を終るにあたつて、モスクワの醫師は 皮肉につけ加へて言つた。『被告が法廷へはいる際、婦人席の方を見るべきであるにもかかはらず、正 面の方を見てゐたといふことであるが、私はこれについては、ただかう申し上げたいのであります—— さういふ斷案はただに滑稽であるばかりでなく、根本的に間違つてゐるのであります。なぜかと申しま すならば、被告が自分の運を決せらるべき法廷へはいつてくる場合、もちろん、あんな風に自分の正面 を見るべきものではないのであります。實際それは、この瞬間、彼が精神の常態をうしなつてゐる一 つの徴候であるとなす説には、私も全く賛成であります。しかし一方、被告は寧ろ、左側の婦人席の 方でなく、かへつて右側の辯護士のゐる方を見るのが普通であつたとの斷定を下したのであります。 つまり、今の場合、彼は何よりも辯護士の援助に希望をつないでをり、且つまた、彼の運命は全くこの

人の上にかかつてゐるからであります。』

醫師はこの自分の意見を大膽に且つ熱心に述べた。ところが、二人につづいて最後に審問された醫師  
ワルヴィンスキイの意外の結論は、二人の博學な鑑定者の意見の相異に一種變つた滑稽さへ添へたの  
である。ワルヴィンスキイの意見によると、被告は今も以前も同じく、全く通常の精神状態にあるとい  
ふのであつた。尤も、捕縛される直前には、事實、並ならぬ神経の興奮状態にあつたことは確かである  
が、それは極めて顕著な多くの原因、すなはち嫉妬、憤怒、不斷の泥酔状態などから生じたものといふ  
ことが出来る。しかし、この神経の興奮状態は、いま論ぜられたやうな特殊な affect をちつとも含ん  
でゐるものではない。また被告が法廷へはいつてくるとき、左を見なければならぬとか、右を見るべ  
き筈だつたとかいふ問題については、——『彼自身の貧弱な意見に従ふと』——被告はその場合、實際  
にさうしたやうに、必らず正面を見るのが當然である。なぜなら、この際、被告の全運命を左右する裁  
判長や他の裁判官たちは、正面に腰を下してゐたからである。『従つて、彼が正面を見ながら入廷した  
といふことは、とりも直さず、その瞬間に、彼の精神状態が全くノーマルであつたことを證明してゐる  
ものであります。』と若い醫師はいささか熱をおびた調子で、自分の『貧弱な』證言を結んだのであつ  
た。

「いよう、<sup>ドクトル</sup> 醫者！」とミーチャは自分の席から叫んだ。「全く君の言ふ通りだ！」

いふまでもなく、ミーチャは制止された。しかし、若い醫師の意見は、裁判官にも傍聴者にもひとし  
く最も決定的な影響をあたへた。それは後で分かつたことであるが、みんなはこの醫師の意見に賛成し  
てゐたのである。ところで、次にヘルツェンシネトーベが今度は、證人として訊問をうけることになつ  
たが、そのとき彼は思ひがけなくも、ミーチャに有利な證言をあたへた。この町に古くから住んでゐ  
て、昔からカラマゾフの家庭のことをよく知つてゐた彼は、『有罪』説を主張する側に對して、非常に  
興味のある幾つかの申し立てをした後で、不意に何かを思ひついたかのやうに、次のやうなことを言ひ  
足した。

「けれども、この哀れた青年は、もつともつと立派な運命を享けてもよい筈でありました。といふの  
は、この人は子供の時分にも、成人してからも、立派な心の持主であつたからであります。わたしはそ  
れを知つてゐる。だが、露西亞の諺に、『自分に智慧があるのはよい、けれども他人の智慧を借りると  
なほよい。つまり、さうすると智慧が一つでなく二つになるからだ』といふのがありますが……」

「一つの智慧は結構、だが二つの智慧はなほ結構といふのでせう。」と檢事はもどかしさうに口を抉ん  
だ。ゆつくりと、長たらしい口調で話をして、聴衆の退屈にはとんとお構ひなく、かへつて馬鈴薯のや  
うな、鈍い、獨りよがりの獨逸式の警句を非常に尊重するこの老人の平生の癖を、檢事はもう前から知  
つてゐたのである。老人は警句を吐くのが好きであつた。

「ああ、さう、さう。わたしの言はうとしたのもそれです。」と彼は根強く合槌をうつた。「一人の智  
慧は結構だが、二人ならなほさら結構。しかし、この人のところへは他に智慧を持つたものが行かなか  
つたので、この人は自分の智慧を駄目にしちまつたんです、……ところで、一體、あの人は自分の智慧  
どをこへ使つたのか？ ええと、どこだつたかな、……ちよつと、私は言葉を度わすれしてしまつた

が、「と自分の眼の前で片手をふり廻しながら、かれは言ひつづけた、「ああ、さうさう、Spazieren」  
「道樂でせう？」

「ええ、さうです、さうです、道樂です。だから、私もさう言つてゐるのです。あの人の智慧は道樂に使はれた。さうしてたうとう深いところへはまりこんで、路に迷つてしまつた。だが、この人は恩義を忘れぬ、情の深い青年でしてね。ああ、わたしはこの人がまだ、こんな子供だつた時分のことを、よく覚えて居りますが、父親からまるで面倒を見て貰へないで、靴もはかずに、釦といへば一つしかないズボンを穿いて、地べたを駆けずりまはつてをりましたよ……」

感情のこもつた、しみじみした語調が忽ちにして、この高尚な老人の聲にひびくのであつた。フェチュコーキツチは何かを豫感したかのやうに、身を慄はせると、すぐその話のあとをつけた。

「ああ、さうです、さうです。わたしも未だその時分には若かつた、……わたしは、……ええと、さうだ、わたしはその時分、四十五歳で、丁度この町へやつて來たばかりでした。わたしはその時、この子が可愛想になりましたな、この子に一斤買つてどうしても買つてやらにやなるまいと、かう考へましたです……ええと、何だつたつけない、一斤買つてやるといふのは、何といつたか忘れた、……つまり、それは子供たちが大變に喜ぶものでしてな、何だつたかな、ええと、何だつたかな……」と醫者はまた手を振つた、「つまり、それは木に生るもので、それをとつて子供たちによくやるものですが……」

「林檎ですか？」

「さ、さ、さいや！ フント、フント。林檎は、十、二十と數へるもんでせう、フントとは言ひませ

んがな、いいや、何でも澤山あるもので、みんな小さいもので、口の中へ入れて、かりかりつと咬み割るものですが……」

「胡桃ですかね？」

「さう、さう、その胡桃ですよ、私の言つてゐるのは。」醫者は少しも言葉などは忘れてもゐなかつたかのやうに、落つき拂つて言つた、「わたしは胡桃をフントその子に持つて行つてやりました。つまり、その子は一度だつて誰からも、フントの胡桃を貰つたこともなかつたのでしてね。そこで、わたしが指を一本立てて、子供よ！ Gott der Vater とさひますとな、向ふも笑ひながら、Gott der Vater と言ふ。わたしが Gott der Sohn とさふと、子供も笑つて、Gott der Sohn と廻らぬ舌とさふ、わたしが、Gott der heilige Geist とさふと、その子も笑つて、やつと言へるだけに Gott der heilige Geist を繰り返しました。それで、わたしは引き返しましたが、三日目にまた傍を通りかかりましたと、その子は大きな聲で『小父さん、Gott der Vater, Gott der Sohn』とさひましたが、Gott der heilige Geist を忘れてゐましたので、教へてやりました。とまた、わたしは可哀想になるのです。ですが、その後子供は町から連れて行かれて、それからはいざ見かけませんでした。そのうちに二十三年といふ永い月日がいつの間にやら經ちました。ある朝のことでした、もう白髪になつてしまつたわたしが、自分の書齋に坐つて居りますと、だしぬけに、一人の血氣さかな若者が入つて參りました。わたしはそれが誰だかどうしても分かりませんでした、その男は指をあげて笑ひながら『Gott der Vater, Gott der Sohn und Gott der heilige Geist 僕は、たつたさまこの町へ歸つてきたところですが、實はあの一

フントの胡桃のお禮を言ひに参りましたのです。あの時分、僕に一フントの胡桃をくれるものは誰ひとりとしてなかつたのに、あなただけは胡桃一フント下すつたのです。」と言ふぢやありませんか。そこで私は自分がまだ幸福だつた若い時代のこと、靴も穿かずに外を駆けまはつてゐた可愛さうな子供のことを思ひ出しました。すると、わたしは胸がいっぱいになりました。で、わたしはかう言ひました——お前さんは恩義を忘れぬ青年だ、お前さんは子供の時分にわたしが持つて行つてやつた一フントの胡桃を覚えてゐてくれたのか、かう言つてわたしはこの人を抱いて祝福しました。わたしは泣き出しました。この人も泣きながら笑ひました、……露西亞人は泣かなければならぬ場合に、よく笑ひますからね。とにかくこの人は泣いたのです。それはわたしがたしかに見たことです。ところが、今は、悲しいかな！……」

「今だつて泣いてゐますよ、獨逸人さん、今だつて泣いてゐますよ、ほんとにあなたこそ神様のやうな人だ！」不意にミーチャは自席から大きな聲で呼びかけた。

何はともあれ、この小さな逸話は、傍聴人にある快い印象を與へたのである。しかも、ミーチャにとつて最も有利な効果を生み出したのは、カテリーナであつた。が、このことは後で述べることにしよう。それに全體として、a *decharge* 被告に有利な 證人、すなはち辯護士の申請した證人が審問されるやうになつてからは、急にミーチャの勢がまぎれもなく開けて來たのである。それは辯護士にとつてさへ全く思ひがけないことであつた。が、カテリーナの前に、まだアリオシヤの訊問が行はれた。しかも、アリオシヤは不意に、ある一つの事實を思ひ起こして、ミーチャの有罪を認めさせる重大な一點に、き

はめて有力な反證をあげたのである。

#### IV

幸運はひらける、ミーチャに

それはアリオシヤ自身にとつてさへ全く思ひ設けぬことであつた。彼は宣誓なしで呼び出された。私の記憶してゐる限りでは、検事側も辯護士側も、共に、彼を審問するにあつては、最初から優しい同情をもつて對したやうである。彼の評判が前からよかつたことは明らかなことであつた。アリオシヤはおとなしく控へ目に申し立てをしたが、その申し立ての中には不幸な兄にたいする熱い同情がはつきりと波うつてゐた。ある質問に答へるとき、彼は兄の性格を述べ、ミーチャは亂暴で、情に驅られやすい人間かも知れないが、同時にまた高潔で、自尊心をもち、鷹揚で、人から求められれば、自己を犠牲にすることさへ辭せない人であると述べた。尤も、兄が近ごろ、グルーシエンカにたいする情熱と、父親との争ひのために、言語道斷の状態に陥つてゐたことは彼も承認した。兄が金を奪ふ目的で父親を殺したといふ假定は、憤然としてこれを否定したが、しかしこの三千留がミーチャの心の中で、殆んど一種のマニアとなつてゐたことや、兄がこの金を父親に詐取された遺産の一部だと思ひこんでゐたこと



や、また恬淡な兄でさへこの三千留のことを口にする度に、奮激と狂憤を禁じ得なかつたことなどは、アリョーシャも認めないわけにはゆかなかつた。検事のいはゆる、二人の『婦人』、すなはち、グルーシエンカとカテリーナの競争については、なるべく答へを回避し、一二の訊問に對しては、全く答へようとしなかつた。

「少くとも君の兄さんは、お父さんを殺さうと思つてゐるなどと、あなたに言つたことはなかつたでせうね？」と検事は訊いた、「若し答へる要がないと思つたら、答へないでもよろしいが、」と彼はつけ加へた。

「はつきりとさう言つたことはありませんでした。」とアリョーシャは答へた。

「ぢや、どういふ風に言つたのかね？ 遠廻しにでもいつたといふのかね？」

「兄は一度わたくしに、自分は父親に個人的な憎しみを感ずると申したことがありました。そして、悪くすると、厭やで厭やでたまらなくなつた場合、……嫌忌の情が極端に達した場合、ひよつとしたら父親を殺しかねないと我ながらそれを心配してゐると言つたことがありました。」

「君はそれを聞いて、本気で言つてゐるのだと思つたのか？」

「本氣にしたとは申し兼ねます。けれども、わたくしは、さういふ危険に瀕したとしても、その時にはきつと或る氣高い感情が兄を救ふだらうと、いつもさう信じてゐました。また實際に、その通りでもありました。と申しますのは、父を殺したのは決して兄ぢやないのですから。」アリョーシャは法廷中に響きわたるやうな聲で、きつぱりと言ひ切つた。

検事は喇叭の音を聞きつけた軍馬のやうに、ぶるぶると身を慄はせた。

「いいかね、わたしは君の信念が全く君の衷心から出たものだといふことを信じてゐる。わたしは君の信念を割引きして考へたり、またそれを不幸な兄にたいする愛情と一しよにして考へたりなどはしないつもりだ。ところで、君の家庭に起つた悲劇にたいする君の独自の見解は、すでに豫審のときからよく承知してゐる。が、打ち明けて言ふと、君の見解は非常に特殊なもので、検事局の集めた他の一切の陳述とは全然正反對になつてゐるのです。で、しつこいやうだが、一體、どういふいはれがあつて、さういふ考へを持つやうになつたか、いや、そればかりではなく、下手人は君の兄さんではなく、別な人間、つまり君が豫審のとき公然と指摘した人だといふ、斷乎たる信念に到達したのか、それをお訊ねする必要がある。」

「豫審のときは、ただ訊問にお答へしただけで、」とアリョーシャは落ち着いて、小さな聲でいつた、

「自分からスメルチャコフを告訴した譯ではありません。」

「しかし、やはり、彼を犯人だと指名したわけではせう？」

「わたくしは兄ドミトリイの言葉として彼を擧げたまでです。わたくしは訊問をうける前に、兄の捕縛された時の様子や、そのとき兄自身がスメルチャコフを名ざしたことなど聞いてゐましたので。わたくしは兄には罪のないことを全く信じて居ります。従つて、もし下手人が兄でないとするば……」

「スメルチャコフだといふのかね？……では、一體、どうして他の人間でなく、スメルチャコフといふことになるのかね！ それに、なぜ君はあくまでも兄さんの無罪を信ずるといふのか？」

「わたくしはどうしても兄を信じないわけにはゆかないのです。わたくしは、兄が決して私には嘘な  
ど言はないのをよく知つてゐます。わたくしは兄の顔付で、兄のいふことが嘘でないと思つたのです。」

「ただ顔付で？ それ君の證據の全部なのかね？」

「それよりほかには、べつに證據をもちません。」

「では、スメルヂャコフが犯人だといふことについても、兄さんの言葉と顔つき以外に、少しも證據  
はないんだね？」

「さうです、ほかには別に證據といふやうなものはありません。」

以上で檢事は訊問を打ち切つた。アリョーシャの答辯は傍聴者たちに、極めて物足りない印象を與へ  
た。といふのは、既に裁判が始まる前から、スメルヂャコフについては町でいろんな風評があつたので  
ある。誰がそれを聞いたとか、誰がこれこれの證據をつかんだとか、さういふやうな取り沙汰が行はれ  
てゐたのである。アリョーシャについても、彼が兄のために、下男の罪を明らかにする有力な證據をあ  
つめたといふ噂があつた。ところが、意外にも、彼は被告の實弟として尤もな精神的信念以外には何一  
つとして證據らしいものをもつてゐなかつたのである。

が、やがてフェチュコーキツチがいよいよ訊問にとりかかつた、被告はかれアリョーシャに向かつ  
て、父親に憎悪を感じるとか、父親を殺すかもしれないなどと、いつ話したのか？ また彼がそれを聞  
いたのは慘劇のおこる直前に、最後に顔を合はした時であつたか？ といふやうな辯護士の問ひに對し  
てアリョーシャは答辯をしてゐるうちに、今ふつと何かを思ひ出して、考へついたかのやうに、ぶるぶ

る身を慄はせたらしかつた。

「わたくしは今、或ることを思ひ出しました。自分でも、このことはすつかり忘れかけて居りまして、  
あの當時もどうもはつきり分からなかつたことです。ところが、それが今になつて……」

かういつて、アリョーシャは、たつた今、不意に或る一つの考へに打たれたらしく、ある晩、修道院  
へ歸る途すがら、一もとの樹のそばで、ミーチャと最後にめぐり合つたときのことを、夢中になつて話  
しはじめた。そのとき、ミーチャは自分の胸を、『胸の上の方』叩いて見せ、おれには自分の名譽を  
恢復する方法があるんだ。その方法はただ、ここに、この胸三寸の中にあるのだと繰り返し繰り返し、  
アリョーシャに語つたのであつた、……「わたくしはその時、兄が自分の胸を叩いて見せたのは、自分  
の心臓のことを言つてるんだと思つてゐました。」とアリョーシャはつづけた、「自分の眼の前に迫つて  
ゐて、しかも、それをわたくしにさへ打ち明けることの出来ない、或る怖ろしい屈辱から逃れるだけの  
力を、自分の中に見出すことが出来た、——とでも兄は言ふのだらうと、思つてゐたのです。正直なと  
ころ、わたくしはそのとき兄が言つてゐるのは、きつと父のことだと思つてゐたのです。父に暴行を加  
へたいといふ心が起るのを、恐るべき恥辱だとして戦慄してゐるのに相違ないと思つたのでした。と  
ころが、兄はそのとき、自分の胸にある何かを指さうとするやうな様子を見せました。で、今になつて  
思ひ出しますが、わたくしはそのとき、心臓はそんなところになんかありやしない、もつと下の方だの  
にといふ考へが、ちらと心をかすめたのです。けれども、兄はもつと上の、ここいら邊を、頸のすぐ下  
をたたいて見せ、しきりにそこを指して見せました。そのときにも、自分の考へたことは何だか馬鹿馬

鹿しいことのやうな気がしたのですが、あのとき、事によつたら、兄は例の千五百留を縫ひこんだ、あの守り袋を指したのだつたかも知れません！……」

「さうだ！」と突然ミーチャは自席から叫んだ、「全くその通りだよ、アリオージャ、さうだよ、あのとき僕は拳でその守り袋をたたいてみたんだ。」

フェチュコーキツチはそくさと彼の方へ駆けよつて、静かにするやうにと頼むと同時に、熱心にアリオージャに根掘り葉掘り訊ねた。アリオージャは、つとめて當時のことを思ひ出すやうにしながら、熱心に自分の想像するところを述べた。兄がそのとき屈辱と考へたのは、恐らくカテリーナにたいする負債の半額千五百留を、彼女に返さずに、ほかのこと、——グルーシエンカが承知したら、あの女を連れ出す費用にあてようと決心した、そのことを指したものにちがひないのである……

「さうです、たしかにその通りです。」アリオージャはいきなり昂奮に驅られて叫んだ、「兄はその時、わたくしに向かつて、屈辱の半分を、半分を、と叫びました。（兄は幾度も『半分！』と繰り返しました。）今すぐにでも、その半分を——と兄は叫びました——取り除くことも出来るんだが、意氣地のない悲しさにそれが出来ずにゐるんだ、……自分には出来ない、それを實行する力のないことが前もつて分かつてゐるんだ、——と、さう兄は言ひました！」

「では、あなたは兄さんが自分の胸のここら邊を叩いたのを、しかと覚えてゐるんですね！」とフェチュコーキツチは力をこめて訊いた。

「確かに覚えてゐます。つまり、その時わたくしは、心臓がもつと下の方にある筈なのに、なぜ兄は

あんな上の方をたたくのだらう、と不思議に思つたからです。それに、その時、自分で自分の考へを馬鹿げてゐると感じたからです、……わたしは自分の考へが馬鹿げてゐると感じたのを、今もつて覚えてゐます、……さうです、さういふ考へがちらと頭の中をかすめたのでした、だからこそ今、私は思ひ出したのです。一體、どうして今といふ今までそれを忘れてゐたのか！ 本當に、兄があ守り袋をたたいてみせたのは、ちゃんと屈辱をそぐ方法があるんだが、しかもこの千五百留を返さないんだ、といふつもりだつたのです。それに、わたしは人から聞いて知つてゐますが、兄はモークロエで捕まつたとき、負債の半分を（さうです半分です！）カテリーナさんに返して、あの人にたいし、泥棒にならずに済む方法を持ちながら、やはりそれを返す決心がつかずに、却つて、金を手離すくらゐなら、いつたことあの人から泥棒と見られた方がましだなどと考へたのは、自分の生涯で最も恥づべきことだつたと言つて叫んだのださうです！ それにしても、兄さんは、どんなに苦しんだことか！ あの負債のためどんなに憂き目を見たことせう！」と叫びながら、アリオージャは言葉を結んだ。

このとき、検事が口を挟んだのは言ふまでもない。彼はアリオージャに向かつて、その時のことをもう一度言つてくれと頼んだ。また、被告はそのとき本當に何か指すやうにして、自分の胸をたたいたのか、或ひはただ拳だけで自分の胸を打つたのではなかつたのか、と繰り返して、うるさく訊ねた。

「はいえ、拳ではありませんでした！」とアリオージャは叫んだ、「指でさしたのです。ひどく高いところ、ここら邊を指したのです、……それにしても、どうしてまたわたしは忘れてゐたのかしら！」裁判長はミーチャの方を向いて、今の申し立てについて何か言ふことはないかと訊いた。彼はそれに

たいして、全くその通りであつた、自分は頸のやや下の胸のところに隠しておいた千五百留の金を指したのである、そしてあの金のことは確かに恥づべきことであつた、とも言つた、「あの恥さらしを私は否定しはしません。あれはたしかに私の生涯の中で最も恥づべき行爲でした！」とミーチャは叫んだ、「返すことが出来たのに返さなかつたのです。あの女の眼には泥棒と映つてもいい、金は返すまいと、その時わたしは考へたのですが、何よりも恥づかしいことは、決して返さないだらうといふことを、初めから自分で知つてゐたことです！ 實際、アリオーシャの言つた通りです！ アリオーシャ、ありがとう！」

これでアリオーシャの訊問は終つた。が、僅か一つでもかういふ事實が発見されたのは、重大な特筆すべきことであつた。とにかく、小さいながらも一つの證據が発見されたからである。それはただ證據の暗示にすぎなかつたが、しかもなほ、あの守り袋が實際にあつたものであり、その中に千五百留といふ金がたしかに入つてゐたといふことや、被告が豫審の際モークロエで、その千五百留は『わたしのものだ』と云ひ張つたことなどが決して嘘ではなかつたといふ證據として、多少とも役に立つたのである。アリオーシャは嬉しかつた。顔を眞赤にして、彼は指定の席へ退いた。彼は永いこと、口のなかで、『どうして忘れてゐたんだらう？ どうしてあれを忘れてゐることが出来たのかしら！ どうして今になつてやつと思ひ出したんだらう！』と繰り返してゐた。

さて、今度はカテリーナの訊問が初まつた。この女が姿をあらはすと同時に、法廷には一種異様などよめきが起こつた。婦人たちは柄付眼鏡や双眼鏡をとり出した。男たちは身うごきをし、中には席から

起ち上がつて、よく見ようとする者さへあつた。後で言ひ合つたことであるが、彼女があらはれると、ミーチャは、さつと『手巾』のやうに眞蒼になつたさうである。彼女は、すつかり黒づくめの衣裳をつけてゐたが、つつましやかに、殆んど、おぼおぼの體で指定の席へ近づいて行つた。昂奮してゐるやうな様子は、その顔いろには少しもあらはれてゐなかつたが、その決心の程は、黒みがかつた眸の中にかすかに窺はれた。ここで特筆すべきことは、後に多くの人が斷言してゐたやうに、この瞬間、彼女が非常に美しく見えたといふことである。彼女は小聲ではあるが、しかし法廷全體にひびくほどの聲で、はつきりと陳述を始めた。彼女の口調はおちついてゐた。少くとも、落ちつかうとつとめてゐたらしかつた。裁判長は、『或る種の琴線』に觸れるのを恐れてゐるかのやうに、この不幸に充分の敬意を拂つて、慎重な態度で、鄭重に訊問を始めた。が、カテリーナ自身は提出された質問の一つに對して、あつさり、自分は被告とは許嫁の仲であつたと、はつきり答へ、「あの人が私を見棄てるまで、」と彼女は小聲でつけ加へた。親戚へ送らうとして、ミーチャに托したといふ三千留のことを訊かれると、「わたくしは必らずしも郵送して貰はうと思つて、あのひとにお金を渡したわけではなかつたのでございます。わたくしはあの時、……あの瞬間に……あのひとが大へんお金の困つてゐるといふことを存じて居りましたので、もし何だつたら、一と月ぐらゐは融通してあげてもよいと考へて、あの三千留を渡しましたのでございますから、後であの借金のために、あんなにまで心配なさる必要はなかつたのでございます。……」ときつぱり言ひ切つた。

私はすべての問答を一々ここに詳しく物語ることはやめよう。ただ彼女の申し立ての眞意だけを傳へ

るだけにしよう。

「わたくしは、あの方が、ただお父さんから、受け取られさへしたら直ぐにもあの三千留はお送り下さることと確く信じて居りました。」と訊問に答へて彼女はつづけた。「わたくしは、どんな場合にも、あの人の恬淡で潔白なことを信じてゐました。……わけても金銭のことにかけては、……全く、この上もなく潔白な方でしたから。あの方はお父さんから三千留を受けとることを確信してゐまして、そのことは度々わたくしにも話して下さいました。あの方がお父さんと仲違ひであつたといふことも、よく承知してゐましたし、また、お父さんに瞞されてゐるのだともつねに信じて居りました。あの方がお父さんを嚇すやうなことを言つたかどうか、わたくしはちよつとも記憶がございません。少くとも、わたくしのゐますところでは、嚇しめいたことは一度もなさいませんでした。若しあのととき、わたしのところへいらつしやれば、三千留のための心配なんか、消しとばして上げるのでしたのに、あの方はその後、わたくしのところへいらつしやられなくなつたのでございます。……ところが、わたくしは、……自分の方からはお呼びすることも出来ないやうな立場におかれてしまつたものですから、……それにまた、わたくしは、あの方にお金を返してくれといふ権利など、ちつとも持つてゐなかつたので。」彼女は不意にかうつけ加へたが、聲の調子には決然たるひびきもつてゐた。「わたくしは或るとき、あの人から三千留以上のお金を借りたことがあつたのでございます。しかも返すことが出来るといふ確かな目あてもないのに、貸していただいたのでございました……」

彼女の聲音には一種の挑戦的なものさへ感ぜられた。さて、このとき代つてフェチュココキッチが訊

ねる番になつた。

「それはこの町へお出でになつてからのことではなくて、あなた方が知り合ひになられた最初の頃のことなんでせうね？」フェチュココキッチは忽ち何か吉兆を豫感したもののやうに、用心ぶかく、さぐりをいれて、啄をいれた。(徐ろにここで括弧をして言つておくが、彼はカテリーナの手でペテルブルグから招聘されたといつてもいいのであるが、ミーチャが嘗て向ふの町で、彼女に五千留あたへたことや、例の『額を地にすりつけての會釋』のことは、少しも知らなかつたのである。この話を彼女は彼に隠してゐた。これは驚くべきことでもある。彼女は最後の瞬間まで、この話を法廷へ持ち出したものかどうかと決しかねて、何か一種の靈感でも待つてゐた、と想像するのが至當であらう。)

「さうです、わたくしは一生涯あの瞬間を忘れることは出来ません！」と彼女は語り始めた。彼女は何もかも残らず物語つた。嘗てミーチャがアリョーシャに話した例の挿話も、『額を地にすりつけての會釋』も、その原因も、自分の父親のことも、自分がミーチャの許へ行つたことも、残らず話したのである。しかしミーチャがカテリーナの姉を通じて『カテリーナ自身で金をとりに来るやうに』と申し込んだことについては、一ことも言はなかつた。それどころか、それを仄めかすやうな言葉をも口にしなかつたのである。彼女は鷹揚にも、このことを隠したのである。そのとき自分は自分から發作的に、何かを期待しながら、……金を借りるために若い將校のところへ馳けつけたのだ、といふ風にいささかも恥づる様子さへなく物語つた。これは實に一同の心に強い衝撃をあたへる出来事であつた。私は心が凍りつくやうな思ひで、身慄ひしながら聞いてゐた。人々は一言も聞き洩らすまいと鳴りを静めて、法廷

は水をうつたやうにしんと静まりかへつた。こんなことは實に例のないことであつた。彼女のやうな我意のつよい、むしろ輕蔑に値ひするほど氣位の高い女が、かやうな偽りのない告白をしたり、これほどまでの犠牲を拂つたりしようなどは、殆んど思ひもよらぬことであつた。しかも、これは果して何のためであつたらうか？、誰のためにしたことであつたらうか？ それを自分を裏切つた男、自分を侮辱した男を救ふためであつた。たとひ、いかほどでも、たとひ僅かなりとも、彼のために量り、彼のためになるやうない印象を人に與へて、彼を救はうとしたのだ！

事實また、我が身に殘された、なけなしの五千留を餘すところなく惜しげもなく與へて、一介の無垢な處女の前に恭々しく跪拜した將校の姿は、確かに憐れを誘ひ、人の心を惹くに充分ではあつたが、……私の心は痛まじさに縮みあがつた！ 私は後で蔭口が始まりさうな氣がした！（あとでたしかに始まつたのだ！）後で、町中の人々は意地わるげな微笑をたたへて、將校が『恭々しく平身低頭したただけで』娘を放したといふところは、どうもあてにならぬやうだと話し合つた。そこには何かが『省略されてゐる』ことを仄めかしたのである。『たとひ省略されてゐないにしても、たとひ彼女の言つた通りであつたにしても、』——と當地で最も尊敬されてゐる貴婦人たちは言ふのであつた、——『どうだか分かつたものではない、また、假りに父親を救ふためだつたにしろ、處女の身でそんな眞似をするのが、果してそれほど見上げたことだらうか？』

ところで、あんなに聰明であり、病的なほどに敏感なカテリーナが、こんな噂をされるといふことに、どうして前から氣がつかなかつたのであらうか？ 恐らく、氣づいてゐたのに相違はない。しかもな

ほ、彼女はすつかり言つてしまふ決心をしたのであつた！ いふまでもなく、話の眞否がどうのかうのといふ、これらの穢らはしい疑惑はみな後で起こつたことであつて、初めて聞いたときには、一同はただ異常な衝動を身を感じたばかりであつた。裁判官側についていへば、彼らは敬虔の色をかべて、彼女のために、羞恥の念をすら感じながら、黙々として耳を傾けてゐたのだ。檢事も、この問題については、敢へて一言の問ひをも發しようとはしなかつた。フェチュコーキツチは深く深く彼女に對して頭を下げた。ああ、彼はすでに殆んど勝ち誇つてさへもゐたのだ。多くのものを彼はそこで得ることが出来たのだ。つまり、高潔な發作に驅られて、なけなしの五千留を與へた人が、何で後になつてから、夜、こつそりと、三千留をとる目的で、父親殺しなどをしようぞ。そんな辻褄の合はない話であらう筈はない。フェチュコーキツチは今では、少くとも、金を奪つたといふ點だけは、はつきり否定することが出来た。さて、『事件』は不意にある新しい光りを浴びて、照し出されて來た。ミーチャにたいする一種の同情とも言ふべきものが湧いてきた。一方、ミーチャに至つては、……カテリーナの申し立ての際、二三日席を立つたが、また、ベンチに腰を下ろして、兩手で顔を蔽つてゐた、と後での噂である。しかし、彼女が申し立てを終つたとき、彼はいきなりその方へ兩手をさしのべながら、すすりなきにふるふる聲で叫んだ。

「カーチャ、なぜ僕を破滅さすんだ！」

といつて、彼は法廷中に響くほどの聲をあげて泣き始めたが、忽ちまた、自分をとり直して、再び叫んだ。

「これで僕はもう宣告をうけたのだ！」

彼は齒を喰ひしぼり、兩手を胸に組み合せて、化石したやうになつて腰かけてゐた。カテリーナはなほも法廷に居残つて、指定の椅子に腰をおろしてゐた。彼女はまつ蒼な顔をして、うつむいてゐた。傍にゐた者の話すところによると、彼女は熱病にかかつたやうに、永いこと、わなわな、慄へてゐたといふ。さて、次ぎにはグルーシエンカが訊問に呼び出された。

そこでわたしの物語りも次第にかの大椿事ダイセンジに近づいて來たが、實はその大椿事といふのは、とつぜんに勃發して、しかも事實上ミーチャを破滅させたものと思はれる。なぜと言へば、わたしの信ずるところでは、のみならず、法律家もみな後でさう言つてゐたが、若しも、あの出來事さへなかつたならば、被告は少くとも寛大な處置をうけたに相違なかつたのである。が、このことをいま話すことにするが、その前にいささか、グルーシエンカの事を言つておくことにする。

彼女もやはり黒い服を着て、例の見事な黒いシヨールを肩にかけて法廷へ出て來た。彼女はよく肥つた女がするやうに、軽く體を左右へ揺りながら、瞼もふらずにじつと裁判長をみつめながら、ふらふらと足どりも軽く手すりの方へ近づいて行つた。私の眼には、その瞬間、彼女が非常に美しく見えた。あとで婦人たちも語つてゐたが、少しも蒼い顔などしてはゐなかつた。婦人たちはまた、彼女が思ひつめたやうな、意地わるさうな顔つきをしてゐたといふが、わたしに言はせると、彼女はただ醜い騒ぎに餓ゑた傍聴者たちの、物好きなき、蔑みの視線を、自分の身に重苦しく感じて、そのために苛々してゐただと思ふ。彼女は傲慢な輕蔑には堪へられぬ性質の女であつた。誰かに辱しめられてゐはすまいかと疑

ふだけで、早くも、かつとして、反抗心に燃え立つ、さういふ類ひの女であつた。が、一方には、もとより、小心なところもあつた。さうして、ひそかに、この小心さを恥づる氣持も持つてゐたのだ。従つて、彼女の申し立てにむらのあるのは無理からぬことでもあつた。怒氣を含んでゐたかと思ふと、今度は輕蔑したやうな調子で、並はづれて荒つぽい口をきき、また、さうかと思ふと、急に心の底から自分の罪を責めるやうな響きが聞えたりするのであつた。時とすると、『どうにでもなるがいい。言ふだけのことは言つてやらう』といふやうな棄鉢な口のきき方をすることもあつた。フォードルと知合ひになつたことについて、『あんなことはみんな下らないことです。あの人の方からつき纏つたのですから、わたしの知つたことではございませぬ』ときつぱり言つてのけるかと思ふと、今度は、すぐその後から『いいえ、みんなわたしのせゐです。わたしは二人とも——お爺さんと、このひとと兩方をからかつてゐたのです。さうして二人をたうとうこんな目にあはせてしまひました。何もかも、元はといへば、みんなわたしから起つたことです。』とつけ加へたりした。何かの拍子で、話がサムソフにふれたとき、『一體、そんなことが何のかかはりがあるといふのでせう』といきなり、はげしい勢で喰つてかかつた。『あの人はわたしの恩人です。あの人はわたしが兩親の家から逐ひ出されたとき、着のみ着のままのわたしを引きとつてくれたお方です』。しかし、裁判長は非常に丁寧な言葉で、脇道へそれずに、直接問ひにだけ答へるやうにと、彼女をたしなめた。グルーシエンカは、顔を赧らめ、眼を耀やかさせた。彼女もまた金のはいつてゐた封筒といふのは見てゐなかつた。ただフォードルが三千留を入れた何かの封筒を持つてゐるといふ話だけは、あの『惡黨』から聞いてゐた。「けれども、そんなことみんな馬

鹿馬鹿しい話です。わたしはただ笑つてやりました。どんなことがあつたつてあんなところへなど行つてやるものですか。」

「今あなたが『悪黨』といつたのは誰のことですか？」と検事は訊いた。

「下男のことです。自分の主人を殺しておいて、きのふ首を縊つた、あのスメルチャコフのことです。」

無論、その言葉にたいしては、すぐに、どういふ譯でさうきつぱり断定するのかと訊かれたが、やはり彼女にも別に根據とてはないのであつた。

「ドミトリーさんがさう言つたんです。だつてあの人のいふことは嘘ぢやありませんから。ほんとにあの邪魔ものつたら、あのひとを破滅させちまつて、何もかも元を言へばみんなあの女から出たことです。」と憎悪のあまり身をふるはせんばかりにして、グルーシエンカはかうつけ加へて言ふのであつた。彼女の聲には悪意をこめた響が感ぜられた。

彼女はまたしても、それは誰のことかと訊かれた。

「あのお嬢さんのことですか、そこに居るそのカテリーナさんのことです。あの人がつたら、あの時わたしを呼びよせて、チヨコレートなんか御馳走して、それで釣らうとしたんです。本當の恥つてどんなものか、あの人なんかには分かりつこないんです。ちつとも……」

今度は裁判長も厳めしく彼女を制して、言葉を慎しむやうにと言つた。しかし、彼女の心は早くも嫉妬に燃えたつてゐた。彼女は殆んど棄鉢になつてゐた……

「モークロエで被告が逮捕されたときに、」と検事は思ひ出しながら訊いた、「あなたがほかの部屋から駆け出して来て、『みんなわたしがわるいんです、一しよに懲役にでも何でも行きます！』と叫んだのを、みんな見もし、聞きもしたといふが、してみると、あなたはその時被告を親殺しだと信じてゐた譯ですね？」

「あの時の氣持、わたし、よく覚えてゐませんが、」とグルーシエンカは答へた、「あの時は、みんな、あの人がお父さんを殺したつて騒いだのですわ、だから、みんなわたしのせゐだつた、あの人がお父さんを殺したのもわたしのことからだと、かう思つたのです。けれど、あの人が、あの人がしたんでないといふことを聞いて、すぐそれを信じてしまひました。今でも信じてゐますわ。いいえ、いつまでだつて信じますわ。だつて、あの人は嘘をつくやうな人ぢやありませんから。」

今度はフェチュニコキツチが訊問する番になつた。わたしは彼がラキーチンのことや、二十五留のことなどを訊いたのを特によく覚えてゐる。「あなたはアレクセイ・フォードロキツチ・カラマゾフを連れて来たその禮に、ラキーチンに二十五留おやりになつたさうですか？」と彼は訊いた。

「あの人がお金を取つたからつて、別に不思議なことございませぬわ。」とグルーシエンカは輕蔑するやうに、悪意のこもつた微笑をささげた、「あの人と來たら、しよつちゆう、わたしのところへお金をせびりに來てましたの。一と月、三十留ぐらゐづつ持つて行つてましたの。だらしがないんですから。だつて、若しわたしがお金をやらなかつたら、あの人が、どうして食つたり飲んだり出来るものですか。」

「一體どういふわけで、あなたはラキーチン氏にさうまでしておやりになつたのですか？」フェチュニコ



「キッチは、裁判長がはげしく身を動かしてゐたにもかまはず、追究して言った。

「だつて、あの人はわたしの従弟なんですからね。わたしのお母さんとあの人のお母さんとは親身の姉妹なんです。でも、あの人がつたら、何時もそれを誰にも言はないやうにしてくれつて、始終わたしにたのんでゐましたわ。わたしを従姉に持つてゐるのを、ひどく恥に思つてゐたのですからね。」

この新しい事實は凡ゆる人々にとつて全く意外なことであつた。町では無論のこと、修道院でも、誰ひとりとして今日までそれを知つてゐた者はなかつたのである。ミーチャさへも知らなかつた。話によると、そのときラキーンは自分の椅子へ腰をかけたまま、恥かしさのあまり顔いろを紫色に變へてしまつたといふことである。どういふわけであらうか、グルーシエンカは法廷へ入る前に、彼がミーチャにとつて不利な申し立てをしたといふことを聞き知つて、それですつかり怒つてしまつたのである。ラキーン氏の先刻の演説も、その卓拔な論旨も、農奴制や露西亞における民権の不備にたいする攻撃なども、悉く、今度といふ今度こそ聴衆の心の中で、抹殺されてしまひ、破棄されてしまつてゐた。喜んだのはフェチニコキッチであつた。神は再び、彼に恵を垂れ給うたのである。ところで、グルーシエンカにたいする訊問は、全體としては、それほど長くはかからなかつた。それにまた、言ふまでもなく、彼女は何ら新しい事實を述べることが出来なかつたのだ。また、聴衆にとつては、彼女のあたへた印象は極めて不愉快なものであつた。申し立てを終ると、彼女はカテリーナから、かなり離れたところに腰を下ろしたが、そのとき無数の蔑むやうな視線が彼女のうへに注がれた。彼女が訊問をうけてゐる間ぢゆう、ミーチャは化石したやうになつて、眼をじつと床の上に落したまま、口をつぐんでゐた。

さて、やがてイワン・フォードロキッチが證人として現はれた。

V

不意の椿事

ここで一言斷つておくが、實はイワンはアリョーシヤより先に呼び出されたのであつた。しかし、そのとき、廷丁は裁判長に向かつて、證人が突然病氣、といふよりは、一種の發作をおこしたことを報告し、今すぐには出廷しかねるが、なほり次第出廷して陳述する旨を傳へてゐた。尤も、その時は誰もそのことには氣がつかずゐて、後になつてから知つたのである。彼が出廷したときには、最初、誰も殆んど氣がつかずゐた。もう主なる證人、わけても二人の戀がたきの訊問がすんでしまつた後だつたから、傍聴者たちの好奇心は満たされてゐて、いささか疲労氣味にさへなつてゐた。まだ幾人かの證人の訊問も残つてはゐたが、彼らも別に、とりたてて新しい陳述をしさうな風も見えなかつた。それに時間ももうかなり經つてゐたことである。さて、イワンは何となく、不思議なほどゆつくりゆつくり歩いて出て來た。さうして、誰の方もふり返らずに頭を垂れてゐる様子は、何やらひどくふさぎこんで、默想でもしてゐるやうに見うけられた。彼は身なりこそどこと言つても非の打ちどころがなかつたが、その

顔いろは、少くとも私には、病的な印象を與へた。まるで死にかかつた人のやうに土いろを帯びてゐて、眼はどんより曇つてゐた。彼はその眼をあげて靜かに法廷をふり返つて見た。と、アリョーシャは不意に自分の席から立ち上がつて、「ああ！」と一聲うなつた。わたしはそれをよく憶えてゐる。しかし、それに氣づいた者は極めて少かつた。

裁判長はまづ彼に向かつて、宣誓しなくてもいいこと、また、陳述してもしなくともそれは隨意であるが、陳述するとすれば、良心に疚しからぬやうにやつて貰ひたいといふことなど、説いて聞かせた。イワンは、ぼんやり裁判長を眺めながら聽いてゐたが、やがて、その顔には一抹の微笑がたたへられた。やがて、愕ろいたやうに自分を見つめてゐる裁判長の言葉が漸く終ると、だしぬけに彼は笑ひ出した。

「で、それから？」と彼は大きな聲を出して訊いた。

法廷の中は水をうつたやうに靜まりかへつた。何かの氣はひがあつたらしかつた。裁判長は不安になつて來た。

「あなたは、……まだすつかり身體がよくなつてゐられませんね？」廷丁の方へ眼をやりながら彼は言つた。

「閣下、御心配には及びません。大丈夫です。わたしはいろいろ興味あることを申し上げることが出来るかも知れません。」急に落ついてきて、恭々しくイワンは答へた。

「では、何か變つた陳述でもなさらうといふのですか？」裁判長はやはり一抹の不安をたたへながら

つづけた。

イワンはうつむいて、暫らくは躊躇してゐたが、ふとまた頭をあげて、吃るやうな口調で答へた。

「はい、……さうぢやありません。何も特別な陳述をしようなどといふではありません。」

そこで、いよいよ彼に對する訊問が始まつたが、彼は何だか氣が進まぬらしく、せいぜい簡單に答へるのであつた。彼は心の中にわだかまつた嫌惡がますます募つてくるのを感じてゐるしかつたが、答辯は要領を得てゐた。大抵の質問に對しては知らぬ存ぜぬで逃げてゐた。父親とドミトリイとの間の金銭上の問題については、何一つ知らないといひ、「そんなことは氣にしませんでした。」と彼はいつた。親父を殺すといつて脅かしたことは、被告の口から聞いてゐた。封筒に入れた金のは、スメルチャコフから聞いて知つてゐた……。

「いくらお訊ねになつても、同じことです。」彼は、ぐつたり疲れたやうな様子で、いきなり遮つた。

「わたしは公判のために何も特別なことを陳述することはありません。」

「お見受けするところ、どうもあなたの身體の工合は、まだ本當でないやうだ。あなたの氣持はよくわかるけれども……。」と裁判長は言ひかけた。

彼は兩側にゐた検事と辯護士に向かつて、もしその必要があれば訊問して貰ひたいと言つた。と、同時に、イワンは不意に弱々しい聲で嘆願した。

「閣下、どうか退廷させて下さい。わたくしは、どうも身體の工合がひどく悪いやうな氣がいたします。」

といつたかと思ふと、許しもうけずに、いきなりくりと背を向けて、法廷から出て行かうとした。が、四歩ばかり歩くと、不意にまた何か考へついたらしく、立ちどまつて、靜かに微笑を洩らすと、又もや以前の席へ引き返した。

「閣下、わたくしは丁度あの百姓娘と同じなんです。……ねえ、お分かりでせう、あれですよ、\*『立ちたくなつたら——立つてやる。立ちたくなければ——立たぬまで。』みんなで上着と袴をもつて、娘のあとをつけ廻してゐる。つまり娘を立たせるためです。娘を縛つて結婚につれて行くためです。ところが、娘は、『立ちたくなつたら——立つてやる。——立ちたくなければ、——立たぬまで。』といふ、……つまり、これは一種の民俗なんですわね。」

「一體、それは何のことですか？」と裁判長は嚴かに訊いた。

「つまり、かういふことなのです。」とイワンはいきなり紙幣束をとり出した、「御覽なさい、さあここに金がありますが、……實は、これはあの、(彼の證據物件の載つてゐる卓子を顎でしゃくつた。)封筒の中にはいつてゐた金なんです。この金のために親父は殺されたんです。どこへ置いたらいいですか？ 廷丁さん、これを渡して下さい。」

廷丁は紙幣束を残らず受けとつて、裁判長に渡した。

「どうしてまたこれがあなたの手にはいつたのです？……これがあの金だとすると。」と愕りいて裁判長は訊いた。

「昨日、スメルチャコフから、あの人殺しから受けとつたのです、……あいつが首を縊る前に、わた

しはあいつの家へ行つたのです。親父を殺したといふのは、あいつです、兄貴ぢやありません。あいつが殺したんです。しかも、あいつを唆したのはわたしなんです、……だつて、一體誰が親父の死を望まないものがありませんか？」

「一體、あなたは正氣ですか？」と裁判長は思はず言つた。

「無論、正氣ですとも、……あなた方みんなと同じく、ここにゐる誰もと、……化物どもと同じく、卑劣な正氣を備へてゐますよ！」彼は不意に聴衆の方を振り返つた。「あいつらは親父を殺したくせに、愕ろいたやうなふりをしてゐるんです。」と彼は烈しい侮蔑を現はしながら齒ぎりをした、「あいつらは、お互ひに芝居をしてゐるんだ。嘘つきめ！ みんな親父の死ぬのを望んでゐたくせに。毒虫、毒虫をくらはうとしてゐるんだ、……若しも父親殺しがなかつたら、——やつらは皆ぶりぶりして家へ歸つて行くだらう、……まるで見物にやつて來てるんだからな！ 『麵麩と見世物！』つてことが、ありますね。だが、わたしだつて餘り立派とは言へやしない！ ところで、水はありませんか、一杯飲ませて下さい、後生ですから！」彼は矢庭に自分の頭をつかんだ。

廷丁はすぐ彼の傍へ寄つて行つた。と、突然アリョーシヤは立ちあがつて、「兄さんは病氣なんです。兄さんの言ふことを本氣にしないで下さい。兄さんは妄想に憑かれてゐるんです！」と叫んだ。カテリナははつと氣がついて、自分の席から立ち上ると、恐怖のあまり身動きもせず、じつとイワンを見つめた。ミーチャも立ちあがつた。彼は一種殘忍な歪んだ笑ひをうかべて、貪るやうにイワンをみつめ

\* 親が、娘に結婚を承諾させる場合に、スカートを置いて、その上に娘が黙つて立てばそれでその結婚を承諾したことになる。タムボフあたりの風習。(譯者註)

ながら、その言ふことを聞いてゐた。

「御心配には及びません。わたしは気が狂つてゐるのぢやありません。ただ人殺しをしたといふだけのことです！」と再びイワンは口を切つた。「人殺しから筋道のたつた立派な言葉を聞かうとなすつても、それは結局、無駄といふものです……」彼はどうしたわけか、不意にかうつけ加へて、妙な笑ひ方をした。

検事は、いかにもどきまぎしたらしく、裁判長の方へ身をかがめた。裁判官たちはそはそはして、互ひに何か囁やき合つてゐた。フェチュコーキツチはいよいよ心を澄ますやうにして、聴き入つてゐた。法廷の中は何かを期待するやうに静まりかへつてゐた。急に、我に返つたらしく裁判長は口を切つた。

「證人、あなたのおつしやることは、どうもよく分かりません、また、それは法廷においてはあるまじき言葉でもある。出来るだけ氣を落ちつけて話して下さい、……若し何か本當に言ひたいことがあるのなら、あなたは一體、どうしてあんなことを仰つしやるんですか、自白なさるんですか……若し、あなたの仰つしやることが謔言たはぶごとでないとしたら……」

「つまり、それなんです、まるで證人がないので。スメルヂヤコフの犬め、あいつはあなた方にあの世から申し立てを送りはしませんからね、……封筒に入れたりしてね、……だつて、あなた方は何でもかでも、封筒を欲しがつていらつしやるんでせう、だが封筒は一つだけで澤山だ、そこで、わたしは證人がないんです、……あいつの外には一人も。」と彼は意味ありげに薄笑ひをうかべた。

「あなたの證人といふのは、誰なんです？」

「閣下、その證人といふのは尻尾を持つてゐるんですが、それぢや規則に反しませうね！ Le diable n'existe point 悪魔は存在しない！ 別に氣にかけないで下さい。やくざな、ちつぽけな悪魔なんですから。」彼は急に笑ふのをやめて、何か内密話でもするやうにつけたして言つた、「奴は、きつとここいらにゐますよ、この證據物件の載つてゐる卓の下の方にも。でなくて、どこにゐるもんですか？ ね、實はかうなんです。わたしは奴に言つてやつたんです。黙つて居れなかつたもんですから。ところが、奴は地質上の大變動のことなんか言ひ出します。冗談ぢやない！ では、あの悪黨を許してやつて下さい……あいつは讚美歌を歌ひ出したんです。なに、その方が氣が樂だつたからです！ 酔つ拂ひの悪黨が、『ワンカはたうとう、行つちやつた、花の都のピーテルへ。』つてわめくのと、變りはないんです。だが、わたしは歡喜の二秒間のためには、千兆の千兆倍も投げ出したつてかまはない。あなたはわたくしを御存じないんですね！ ああ、あなた方のなさつてゐられることは、實に馬鹿げたことですよ！ さあ、私をあいつの代りに縛つて下さい！ わたしだつて、何かしに來たんですからね、……一體、どうして、何もかもこんなに馬鹿げてゐるんだらう？……」

かういつて、彼は又もや物思はしげな顔つきをして、徐ろに法廷の中を見廻しはじめた。が、すでにその時には部屋ぢゆうが動搖をおこしてゐた。アリョーシヤは席を立つて、兄の傍へ駈け寄つた。と、廷丁がもうイワンの手をつかんでゐた。

「何をするんだ？」廷丁の顔をじつと見つめながら、かう叫んだかと思ふと、イワンはいきなり廷丁の兩肩に手をかけて、激しく床の上に投げつけた。守衛たちが駈けつけて來て彼をおさへた。忽ち彼は

恐ろしい聲で喚き出した。法廷から連れ出される間も、彼は喚きたてたり、何かとりとめもないことを叫んだりしてゐた。

大騒ぎになつた。わたしはいま、一切の出来事を順序を追うて記憶してはゐないが、それは自分自身も昂奮に驅られてゐて、よく觀察するほどの餘裕がなかつたからである。ただ私が知つてゐることは、あとでもうすつかり鎮まつて、一同が事の真相を知つたときに、廷丁が散々お目玉を頂戴したといふことだけである。尤も、廷丁は、——一時間ばかり前、證人は少し氣分を悪くして醫者の診察をうけたのだが、その時には別に身體の工合が悪かつたといふわけではなかつたし、また法廷へ出る時までは、とにかく辻褄のあはないやうなことは言はなかつたし、だからこんなことが起こらうなどとは全く思ひがけなかつた、それにまた證人自身でせひ申し立てをしたと言ひ張つたのだ——と、充分に理由の立つ申し開きをした。しかし、一同がまだすつかり落ちついて、自分を取りもどさないうちに、この事件に引き續いて、今度はまた別な事件が突發した。カテリーナがヒステリーの發作をおこしたので。彼女は大聲で悲鳴をあげながら慟哭しはじめた。しかも、法廷からは出て行かうとはせず、かへつて身をもがいて外へつれ出さないやうにしてくれと哀願した。さうして、いきなり裁判長に向かつて叫んだ。

「わたしはすぐに……この場で、もう一つ申し立てなければならぬことがあります！ これはその證據の書面です。手紙です、……手にとつて、直ぐにお讀みになつて下さい、早速！ これはその惡黨の、ほれ、そこに居るその男の書いた手紙です！」と彼女はミーチャを指した、「父親殺しはあの人です。今すぐあなたにもお分かりになります、あの人が父親を殺すつもりだと、わたしに書いてよこし

たのです！ ですが、あちらの方は病人です。妄想に憑かれてゐるのです！ わたしはあの人を妄想に憑かれてゐるのを、もう三日も前から知つてゐました！」

彼女は夢中になつて叫び立てた。廷丁は裁判長に差し出された書類を受けとつた。カテリーナは自分の椅子に腰をおろすと、顔を蔽つて、わなわたと身を顫はせ、聲を忍んで泣き出した。しきりに身慄ひしながらも、彼女は法廷からつれ出されはしないかといふ懸念から、わづかな唸り聲すら抑へてゐた。彼女の差出した書類は、ミーチャが居酒屋「みやこ」から出した例の手紙で、イワンが「これこそ確かに重大な」證據と名づけたものである。ああ、裁判官たちも實際この手紙に確かに重大な價值を認めたのだ。この手紙さへなかつたならば、恐らくミーチャは破滅せず済んだに相違ないのだ。少くとも、あんな恐ろしい破滅のし方をしなくて済んだのに相違ないのだ！

繰り返して言ふが、わたしは委しく觀察することが出来なかつたのである。今でもただ雑然と一切のことが頭に残つてゐるばかりである。確か、裁判長はその場ですぐこの新しい證據品を、判事と、検事と、辯護士と、陪審員一同に提供した筈である。わたしの記憶してゐるのは、あらためてカテリーナにたいする訊問が始められたといふことだけである。もう落ちついたか？ といふ裁判長の優しい質問にたいして、カテリーナは直ぐにかう叫んだ。

「大丈夫です、大丈夫ですわ！ わたし、立派にあなた方にお答へ出来ますわ。」彼女は依然として、何か聞き洩しはしないかと、ひどく心配してゐるやうに言ひ足した。

裁判長は彼女の方を向いて、一體これは如何なる手紙で、いかなる場合に受けとつたのか、詳しく説

明してくれといった。

「わたしがこの手紙を受けとつたのは、ちやうどあの兇行の前の日でございました。でも、あの人がこれを書いたのは、それより一日前で、つまり兇行の二日前に酒場で書いたのでございます。——御覽下さい、何か勘定書の上へ書きつけたものではありませんか？」と、彼女は息をはずませて叫んだ、「あのころ、あの人は私を憎んで居りました。つまり、あの人は卑しい眞似をして、この賣女のところへ行つたのです。……それにまた、わたくしからあの三千留を借りてゐたからです。……ええ、あの人は自分が卑劣な眞似をしたものですから、この三千留が忌々しくて堪らなかつたのです！　つまり、この三千留といふのはかういふ譯なのでございます、——お願ひです、後生ですから、わたしの申し上げますことをどうかお耳にとめ下さいまし、——父親を殺します三週間ばかり前のことでもございました。あの人は或る朝、わたしのところへやつて参りました。妾はそのときあの人にお金の要ることも、また何のために要るのかといふこともよく存じてゐました。それはこの賣女を唆かして、駆落するのに要る金だつたのでございます。わたしはその時あの人が心變りして、わたしを棄てようとしてゐるのを知つてゐましたので、わざとそのお金をあの人に突きつけてやりました。モスクワにゐる姉に送つて貰ひたいと言つて出したのでございますが、——そのとき、お金を渡しながら、わたしはあの人の顔をじつと見つめたのでございます。そして『一ヶ月後でもかまはないから』氣のむいた時に送つてくれたらいいと申しました。さうです、わたしはあの人に向かつて、『あなたはわたしをあつた賣女に見かへるために、お金が入り用なんでせう。だから、このお金をおとりになつたらいいでせう。わたし、このお金、あな

たにお上げしますわ。もしこれが受けとれるほどの恥知らずなら、遠慮なくおとり下さい！』と言つてやつたのでございますが、どうして、どうして、それがあの人に分からない筈がございませう。わたしはあの人に罪を悟らせるつもりだつたのでございます、ところが、どうでしたらう？　あの人は受けとりました。受けとつて持つて歸つて、あそこで一晩のうちに、あの賣女と二人で費ひ果してしまつたのでございます、……でも、あの人は悟つて居りました。わたしがお金を渡したのは、あの人がそれを受けとるほどの恥知らずかどうかを試してゐるのだといふことを、その時ちやんと分かつてゐたのです。そしてまた、わたしが何もかもすつかり承知してゐることも、あの人には、分かつてゐたのでございませう、本當に。わたしがあの人の眼を見ると、あの人もわたしの眼を見ました。いいえ、あの人には何もかも分かつてゐたのでございます、すつかり分かつてゐたのでございますとも。それでゐて、わたしの金を受けとつて、持つて歸つたのでございます！

「その通りだ、カーチャー！」とミーチャはいきなり叫んだ。「おれはお前の眼を見て、お前がおれに恥をかかせようとしてゐることを悟つたのだ。だが、やはりお前の金を受けとつた！　この卑劣漢を、皆さん、輕蔑して下さい。いくら輕蔑されても、それは當然なことなんですから！」

「被告、」と裁判長は叫んだ、「もう一こと、言ふと退廷させる。」

「そのお金のことがあの人を苦しめたのでございます。」とカーチャはおづおづと、せきこんでつづけ、「そこであの人はその金を妾に返さうといたしました。ええ、返さうといたしましたわ、それは嘘でも偽りでもございませぬ。けれども、やつぱりあの人にはこの女のためにお金が必要だつたのでござ

います。だからお父さんを殺したりしたんですわ。なのに、やはり、わたしにはその金を返さずに、この女と駈落してあの村へ行き、たうとう捕まつたんですわ。それに、お父さんを殺して取つてきたお金も、あの村ですつかり費ひ果してしまひました。ところで、この手紙のことでございますが、これはお父さんを殺す前の日に、酔つ拂つて書いたものでございますわ。わたしはその時すぐに、この手紙はあの人が妾につらあてに書いたものだといふことが分かりました。そしてあの人は、たとひお父さんを殺しても、わたしがこの手紙を誰にも見せやしないといふことをよく知つてゐたのでございます。確かに知つてゐたのでございます。でなければ、こんな手紙を書く筈がございませんもの！ あの人はわたしが復讐をしたり、あの人を破滅させたりするのを望まないつてことを、ちやんと承知でゐたのでございます。だけど、何卒お読みになつて下さいまし、注意して、どうか充分に注意してお読みになつて下さいまし。あの人がどんな風にお父さんを殺さうかと前から考へてゐたことや、お金のありかをちやんと知つてゐたことなど、すつかりこの手紙の中に書いてございますわ。どうか御覽下さいまし、見落さないやうにして読んで下さいまし。その中には、『イワンさへ發つてしまへば、すぐにも殺すつもりである。』といふ文句もござります。確かにそれは、あの人から、お父さんを殺さうとして、いろいろ思案をめぐらしてゐた證據でございますわ。』とカテリーナは、鋭く、恨みをこめて裁判長へ入れ智慧した。ああ、確かに彼女はこの運命的な手紙を残る隅なく熟讀して、一點も残さず仔細に調べてゐたものらしい。「あの方は酔つ拂つてさへるなければ、こんな手紙をわたしにくれる譯はなかつたのでせうが、まあ御覽なさつて下さいまし、これには残らず前もつて豫告してあるのでございます。何もかもす

分たがはずその通りになつたのでございます。その通りにあとでお父さんを殺してしまひました。まるで番組のやうでございますわ。』

彼女は我を忘れてかう叫ぶのであつた。もとより、彼女はそれが崇つて自分がどんな憂目を見ようとも構ひはしないと覺悟を決めてゐたのである。尤も、彼女はこんなことになるのを、一と月も前からちやんと豫見してゐたのかも知れなかつた。といふのは、すでにその時分から、彼女は憎惡にわななきながら、『一體、これを法廷で読み上げたものかどうか？』と思案してゐたらしいからである。それにしても、彼女はいま、崖から一足とびに飛び下りたやうな風であつた。今でも覺えてゐるが、この手紙はその場で直ぐ書記によつて読み上げられ、一同に驚ろくべき印象を與へた。ミーチャはこの手紙を認めるかどうかと訊かれると、

「わたしの書いたものです、確かに私の書いたものです！」と叫んだ、「酔つ拂つてゐなかつたら、書きはしなかつたのに……それはさうと、ねえ、カーチャ、二人はいろんなことでお互ひに憎み合つてゐたね。だが、おれは誓つていふよ、本當に誓つていふよ、憎みながらも、おれは、お前を愛してゐたんだ。ところが、お前はさうではなかつた！」

絶望のあまり、両手を揉みしだきながら、彼はどつかと自分の席へ腰を下ろした。検事と辯護士とは入れ替り立ち替り、彼女にいろいろと訊問をはじめたが、主としてそれは『あなたはどうしてそれほど證據を今まで隠してゐたのです？ それに、前にはなぜ今と全然ちがつた氣持と調子で、申し立てをしたのです？』といふ意味のものであつた。

「ええ、さうですわ、わたしはさつきは嘘の申し立てをしました。名譽をすてて、良心に逆つて、嘘のことばかり申し立てました。けれど、それはあの人があんなにまでわたしを憎んだり、輕蔑したりしてゐましたから、却つてあの人を救つてみせるといふ氣がしてゐたからです。」とカーチャは狂ほしげに叫ぶのであつた。「ええ、あの方はわたしをずるぶん輕蔑してゐましたわ。それも、それも——わたしがあのお金ゆゑに、あの方の足もとに身を投げて、お辭儀をしたあの瞬間から、さうして蔑むやうになつたのです。そのことはわたしにもよく分かつてゐました、……あの場ですぐにそれと氣づいたのですけれど、わたしは永い間それを自分に信ずることが出來ずにゐたのです。あの方の眼つきに、『何といつてもお前はあの時、自分でおれのところへ來ようと思つたのではないのか』といふ意味を、幾たびも讀みました。ええ、あの方には分からなかつたのですわ。あの時、何のためにわたしがあの方のところへ駆けつけたのか、それがちつともあの方には分からなかつたのですわ。何もかもみんな下劣なところから出たやうに疑ふよりほか、あの方には能がないんです！ 自分の物差しで人を計つて、誰でもみんな自分のやうなものだと、あの方はさう決めてゐたのです。」カーチャはすつかり無我夢中で、はげしく齒齧みするのであつた。「あの方がわたしと結婚しようとしたのは、ただわたしが財産を相續したからのことでした。ええ、ええ、そのためだつたのですわ！ わたしはしよつちゆう、さうだらうと疑つてゐました！ ええ、あの方は獸です！ あの方は心の中で、あの時わたしが金を貰ひに行つたことを恥ぢてゐて、一生涯びくびくしてゐるにちがひない、だから永久に妾を輕蔑することが出来る、つまりおさへつけてゐることが出来るんだと、いつも信じてゐたのです——だからこそまた、わたし

と結婚しようといふ氣にもなつたのです！ ええ、それに違ひありません！ そこでわたしは自分の愛であの人に打ち勝つてやらうとしたのです。あの方の裏切りさへ忍ぼうとしました。けれど、あの方には、何も、何も分からなかつたのです。それにまた、あの方が一體、物事がわかるやうな人でせうかしら！ だつて、あの方はごろつきなんですから、わたしがこの手紙を受け取りましたのは、あの翌晩のことでした。酒場から届けて來たのでございます。でも、ついその朝まで、丁度その日の朝までは、わたし、何もかも、——心變りさへも許さうと思つてゐたのでございました！」

いふまでもなく、裁判長と檢事は彼女を落ちつかせようとした。彼女のヒステリイをいい幸ひに、かういふ申立てを聞きとるのが、さすがに彼らにも氣がひけたのであらう。私は今でもはつきり覺えてゐる。「あなたがどんなに苦しんでゐられるか、それは私たちによく分かる。信じて下さい、私たちだつて木や石ではないんですからね。」などと彼らは言つてゐた。しかもなほ、彼らはこのヒステリイによつて正氣を失つた女から、必要なだけの陳述は、とにかくひき出したのである。最後に彼女は、イワンが自分の兄の『ごろつきの人殺し』を救はうとして、この二ヶ月のあひだ、こころを碎いたために、殆んど發狂せんばかりになつてゐることを申し述べたが、その陳述は極めて明確なものであつた。かやうな明確さといふものは、たとひ瞬間的であるとはいへ、かやうな緊張し切つた精神状態にある際、しばしば閃くやうに現はれるものである。

「あの方は苦しんでゐました。」と彼女は叫んだ、「あの方はわたしに向かつて、自分も親父を愛してゐなかつた。或ひは自分も親父の死ぬのを望んでゐたかもしれない、などと告白したりして、始終、兄



さんの罪を軽くしようと思つてゐました。ええ、あの人は深い深い良心をもつた人です！ だから自分の良心に苦しめられたのです！ あの人は何もかも残らずわたしに打ち明けてゐました。始終、わたしをただ一人の親しい友として、毎日毎日、話しに参りました。ええ、あの人にとつては、確かにわたしはただ一人の親しい友でございました！」彼女はきつとなつて眼を輝やかせながら、不意にかう叫んだ。「あの人はスメルチャコフのところへ二度も行つたのでございますよ。で、或る時わたしのところへ参りまして、もし下手人が兄でなくて、ムメルチャコフだつたら（だつて、當地では下手人はスメルチャコフだなんていふ馬鹿馬鹿しい噂が立つてゐたものですから）、もしスメルチャコフだつたら、自分にも罪があるかも知れない、何しろ、自分が親父を愛してゐないことをスメルチャコフは知つてゐたし、従つて彼は自分が父親の死を望んでゐるのだと思つてゐたかもしれない、などと云つたことがございました。その時わたしがこの手紙を出して見せますと、あの人は、下手人はいよいよ兄さんだといふことを確信して、ひどく仰天してしまひました、親身の兄が親殺したと考へることに堪へられなかつたのでございませう。一週間ばかり前に會ひましたときなど、そのために身體を悪くしてゐるのがわたしにもよくわかりました。近頃などわたしの家へ来て、讒言を言ふほどになつたのです。わたしはあの人が次第に正氣を失つてゆくのに氣がつかました。あの人は表を歩きながら讒言を言つてゐました。その様子は人もよく知つてゐます。わたしがモスクワから呼びましたお醫者さまも、一昨日あの人を診て下さいましたが、夢遊病に近い病氣だと申して居りました、——それもみんな、あの人から出たことすわ、あのごろつきのためなんです！ しかも、昨夜、スメルチャコフが死んだといふことを耳にすると、

あの人はあんまりびつくりしたために、すつかり氣が狂つてしまひました、……何もかも、あのごろつきのためです、……ごろつきを助けたい一心から起こつたことすわ！」

ああ、かやうな言葉や、かやうな告白は、もとより、一生涯にただ一度、死に臨んで、たとへば斷頭臺へ上る瞬間でもなければ、到底發し得るものではあるまい。しかも、カーチャは性質として、それの出来る女であり、また一方には、今の場合が、彼女にそれを許しもしたのである。それは、嘗てあのと、父を救ふために、若い放蕩者の前に自分の身を投げ出したときの、あの激しい氣性のカーチャなのである。また、ついさつきのこと、この大勢の聴衆たちを前にして、氣高い、穢れのない態度で、ミーチャを待ちうけてゐる運命を、少しでも軽減したいばかりに、『ミーチャの高潔な行爲』を物語つて、處女の羞恥をかなぐりすてて省みなかつた、あのカーチャなのだ。彼女はこの場合もまた自分の一身を犠牲に供したのだ。しかし、それはすでに、彼ならぬ外の男のためであつた。しかも、彼女は今、この瞬間に初めて、この一人の男を自分にとつて、かけ代へもなく貴い人と感じもし、悟りもしたのに相違なかつた！ そこで彼女は、男の一身を氣づかふあまり、男のために自分の身を投げ出してかかつたのである。その男が、いきなり、『下手人は兄ではなくて、自分だ。』と申し立てて、一身の破滅を自ら招いたと見るや、男の身と、その名譽と體面とを救ふために、彼女は自分を犠牲にしたのである！ が、しかし、ここに一つの大きな疑問となるのは、彼女がミーチャとの古い關係を述べたとき、自らをあざむいたのではあるまいか——といふのである。いやいや、さうではあるまい、自分が土に頭をすりつけて跪拜したために、ミーチャは自らを輕蔑するやうになつたのだと自分は述べたが、それは故らに讒誣

したといふ譯ではないのだ！と、彼女は確く信じてゐた。それまではまだ、自分を尊敬してゐてくれるやうにと思ひ、無邪氣だつたミーチャも、頭を地にすりつけて跪拜したあの瞬間からといふもの、すつかり自分を冷笑し、輕蔑するやうになつたのだと彼女は深く信じきつてゐたのだ。彼女はただ自尊心のゆゑに、傷けられた誇りのゆゑに、ヒステリックな、痛ましい愛を一途にミーチャにささげたのであつた。然るに、この愛は、愛といふよりも、むしろ、復讐に近いものであつた。ああ、この痛ましい愛も、ひよつとしたら、本當の愛にまで成長したのかも知れなかつたのだ。恐らく、カーチャとても、何よりそれを望んでゐたのにちがひない。が、ミーチャの心變りは彼女を魂の底まで辱かした。魂が許すことを承知しなかつたのだ。ところが、そこへ突如として復讐の機會が降つて來た。辱かしめられた女の胸に、長いあひだ鬱積してゐた一切の苦痛は、思ひがけなくも堰をきつて外部へ迸り出た。彼女はミーチャを裏切つたが、同時にまた我とわが身をも裏切つたのである、無論、彼女は言ふだけ言つてしまふと、急に心の張りが弛んで、恥かしさに堪へられなくなつた。ヒステリーの發作は、又もややつてきた。彼女は泣いたり、喚いたりしながら倒れ伏した。彼女は法廷の外へつれ出された。と、彼女が外へつれ出されるや否や、今度はグルーシエンカが、わつと泣きながら、人々のとめる間もなく、自分の席からミーチャの傍へ駆けよつて行つた。

「ミーチャー！」と彼女は聲を張り上げていひ始めた、「あの毒蛇がたうとう、あんた方を臺なしにしましたね！あの女は、たうとう、あなた方に本性を露はして見せましたね！」憎惡のあまり身を慄はせながら、彼女は裁判官に向かつて叫ぶのであつた。裁判長の指圖によつて、人々は彼女をつかまへて法

廷からつれ出さうとしたが、彼女はなかなか肯かすに、しきりに身をもがきながら、ミーチャに縊りつかうとした。ミーチャも叫び聲を立てて、やはり彼女の方へ飛び出さうとしたが、たうとう二人ともしつかりと抑へつけられてしまつた。

定めし、この光景を眼にした婦人たちは満足したと思ふ。實に珍らしく變化に富んだ場面であつた。續いてモスクワから來てゐた醫師が現はれたやうに記憶してゐる。裁判長はイワンの手當をさせるために、どうやらその前に廷丁を迎へにやつてゐたものらしい。醫師は判事に向つて、患者は非常に危険な譫妄症の發作に襲はれてゐるから、すぐに病院へつれて行かなければならないと申し出た。それから検事と辯護士の問ひに對して、患者が一昨日自身で診察を受けに來たことや、近いうちに發作が起るかもしれないからと、そのとき前もつて注意をしておいたにも拘はらず、患者は治療を望まなかつたことなど立證した。「患者は全く健全な精神状態にはゐなかつたのです。自分で私に言つたことです。患者はうつつに幻を見たり、とつくに死んでしまつた人を通りで見たり、毎夜惡魔の訪問をうけたりしてゐたさうです。」と醫師は言葉を結んだ。自分の申し立てを終ると、この有名な醫師は退出した。しかし、カテリーナの提出した手紙は證據物件の中へ加へられた。裁判官は合議の上で審問を繼續し、この二人（カテリーナとイワン）の意外な申し立てを調書へ書き込むことにした。

しかし、私はもう、その後の審問の様子を書くことは、よすことにしよう。その他の證人の申し立ては、それぞれ異つた特質を持つてゐたが、つまるところは、以前の申し立てを反復し、裏書するに過ぎなかつた。もう一度いふが、申し立ては悉く検事の論告に一括されてゐるので、わたしは今度はその論

告の方へ移ることにしよう。人々はみな興奮してゐた。みな最後の大橋事のために電氣にうたれたやうになつて、熱心に大團圓——すなはち、検事の論告と辯護士の辯論と、裁判長の宣告を待つてゐるのであつた。フェチュエコーキツチは、カテリーナの申し立てに打撃を感じたらしかつたが、一方検事の方は大満悦であつた。審問が終了したとき、約一時間の休憩が宣せられた。やがて、いよいよ裁判長が辯論の再開を宣言して、検事イツポリットが、論告を始めたのは、夜ももう八時ごろであつたやうに記憶してゐる。

## VI

### 検事の論告、性格論

検事イツポリットは論告を始めた。彼は額と額頭に痛々しい冷汗を滲ませ、全身に悪寒と發熱とを代る代る感じながら、ぶるぶると神経的な身慄ひをしてゐるのであつた。それは彼自身後で語つたことであるが、彼はこの論告を *chef d'oeuvre* 傑作 であつたと心得てゐた。自分の一生涯を通じての *chef d'oeuvre* つまり、自分の白鳥の歌と考へてゐたのである。事實、彼はそれから九ヶ月の後には、悪性の肺患のために、あの世の人となつたが、事實において、彼が自分の最後をすでに豫感してゐたものとす

れば、彼は自分自身を、臨終の歌をうたふ白鳥に喩へる資格を立派にもつてゐたのかもしれない。彼はこの論告に自分の全心をうちこみ、あらん限りの智識を傾けたが、そのために圖らずも、彼の心中に公民としての感情や、『忌はしい懷疑の念』が（少くとも、彼の内心に容れうる範圍において）潛んでゐることを證據立てた。わけでも彼の論告はその眞剣さにおいて人を動かすものであつた。彼は被告の有罪を眞面目に信じてゐた。彼は他人から註文されたのでもなければ、單なる職務上の要求からでもなく、衷心から被告の罪を認めて、『復讐』を主張しながら、『社會を救ひたい』といふ布望に慄へてゐたのである。

イツポリットに反感を懷いてゐた當地の婦人連でさへもが、並々ならぬ感銘をうけたことを告白したほどであつた。彼は、ぎれぎれな顛へ聲で辯じ始めたが、やがてその聲にだんだん力がいつてきて、それからずつと論告の終るまで、法廷全部に朗々と響きわたつた。が、論告を、辛うじて終つたときには、彼は危ふく卒倒せんばかりであつた。

「陪審員諸君、」と検事は口を切つた、「この事件は實に全露西亞にわたつて喧傳されたことでありますが、しかし、考へてみまするに、一體そこには何か驚ろくに足るものがあるものでありませうか？ 特に恐るべきものが何かあるものでありませうか？ われわれにとりましては、一しほその感が深いのであります。いや、われわれはかやうな事件にはすでに慣れきつてゐる筈であります！ しかしながら、われわれの恐るるところは寧ろ、かやうな暗黒な事件さへも、すでに人々を驚ろかすに足りなくなつた、といふ點にあらねばなりません！ して見れば、また、われわれは己れ自身の習慣をこそ恐るべきであ

つて、ある個人の罪惡に驚ろく必要はないのであります。かやうな事件、すなはち好ましからぬ將來をわれわれに豫言する、かかる時代の特徴にたいして、われわれが冷淡な微温的態度をとりうるのは、そもそも如何なる理由でありませうか？ それは吾人の犬儒主義ドグマにあるのでせうか、それともまた壯年期にありながら、すでに時ならずして老耄した、社會の理性及び想像力の萎微に存するのでせうか？ 或ひはまた、わが國における道德的基礎の動搖にあるのでせうか？ それとも遂にはわが國民が、この道德的基礎を全然有してゐないためでせうか？ 尤も、私はいま、これらの疑問を解かうとしてゐるではありません。さりながら、これの問題は非常に痛切なものであつて、すべての公民はこの疑問に苦しまずにはゐられないばかりでなく、また當然くるしむべき義務さへあるのであります。ところで、我國の新聞紙であります、それは未だ幼稚であり、臆病であるとはいへ、しかしとにかく、社會にたいしては幾分かの貢獻をしたのには相違ありません。と申しますのは、もしこれがなかつたとしたら、われわれは放縱なる意志と道德の頹廢とが生み出す恐怖を、多少とも詳細に知ることが出來ないからであります。新聞雑誌は絶えずこれらの恐怖を掲載して、ただにこの聖代の賜物たる新しい公開の法廷を訪れる人ばかりでなく、あらゆる人々に報道してゐるのであります。さて、われわれが毎日のやうに眼にするそれらの記事は一體何でありませうか？ ああ、それは本件の如きものすら光りを失つて、むしろ殆んど平凡きはまるものと思はれるほど恐怖すべき事件の報道なのであります。しかも、最も重大なことは、わが露西亞の國民的刑事事件の大部分が、正にある一般的なもの、——すなはち、わが國民の習性となつたある一般的不幸——を證明してゐることでありませう。従つて、一般的惡としてのこの不幸と戰

ふことは、すでにわれわれにとつては極めて困難なことなのであります。たとへば、ここに上流社會に身をおく一人の輝やかしい前途をもつ青年將校があります。彼は今やつとその生活と榮達の道をふみ出したばかりでありました。ところが、彼は卑劣にも夜陰に乗じてしかも、いささかの良心の呵責をも感ずることなく、己れの恩人ともいふべき一官吏と、その下女を斬殺いたしました。何のためにさうしたかといへば、それは自分の借用證書と一しよに、官吏の金を奪ふためでありました。その金は、つまり『社交界の快樂と、將來の經歷をつくるために役に立つ』金だつたのであります。彼は二人を殺してしまふと、死體に枕をさせて立ち去りました。また次には、勇敢な行爲によつて多くの勳章を下賜されてゐる一人の若い勇士は、恩顧のある上官の母親を、まるで強盜かなんぞのやうに、大道で、殺害しました。しかも、自分の同僚を仲間に取り入れるために、『あの人は僕を親身の息子のやうに愛してゐるか。僕はいふことなら何でも肯くから、大丈夫警戒はせんだらう。』と言つてゐるのであります。勿論、この男は並外れた無賴漢であつたのでありませうが、しかし私はいま、現代においては、かかる無賴漢はこの男だけだとは言ひ得ないのであります。人殺しこそしないが、内心では、この男と同じことを考へ、同じやうに感じてゐるものは他にもないと言へませうか。しかも彼らの心中たるや、その破廉恥さにおいて、この男と何ら異るところはないのであります。彼らは、ひよつとしたら、暗夜、靜かに自己の良心と對座したとき『いつたい名譽とは何だらう？ 血を流すことを罪惡だなんて、それは偏見なのぢやないか？』などと自問したかもしれないのであります。こんなことをいふと、或ひは、わたしに反對して——お前は病的で、ヒステリックな人間だ、お前は露西亞に向かつて奇怪な讒謗を敢へてするの